(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第170集

筑井八日市遺跡

一般国道50号(東前橋拡幅)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集

1994

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

笂井八日市遺跡　正 誤 表　　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
38	土層注記 C－C'	④黒褐色土。多量のシルト含む。	④' 黒褐色土。多量のシルト含む。

資料 No.94-597
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
平成6年6月14日
01-353
517
1 (5)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第170集

UTHUBO I YOU KA ICHI

筑井八日市遺跡

一般国道50号(東前橋拡幅)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集

1994

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道50号は、前橋市を起点として、茨城県水戸市に至る延長152kmの主要幹線道路です。このうち、前橋市天川大島町から今井町にかけての東前橋地域は、かねてより交通渋滞が激しく、これを緩和するために、また道路交通の安全確保を図るために、今井町の上武道路と交差する地点から天川大島町間の5.1kmの現道拡幅工事が昭和63年度より始まり、既に工事も終了して供用されています。工事着工に伴い工事区域内に所在する埋蔵文化財発掘調査も始まり、今井白山、今井道上、笂井八日市、野中天神の4遺跡の発掘調査が平成4年度まで行われました。

これらの遺跡のうち今井白山遺跡については、平成4年度に調査報告書を刊行しましたが、これについで笂井八日市遺跡の整理作業が今年度完了しましたので、ここに調査報告書を刊行することにしました。

本報告書には、荒砥川を挟んで立地する前方後円墳の今井神社古墳と同時期の豪族居館の可能性のある堀、竪穴住居、古墳などの遺構・遺物が報告されていますが、特筆すべきものとして、利根川の旧流路である広瀬川低地帯で平安時代の水田が検出され、この地域の遺跡が広瀬川低地帯にまで及ぶことが報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事々務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の方々から種々、ご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成6年　3月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小寺弘之

例　　言

1　本書は一般国道50号（東前橋拡幅）改築工事に伴う、笂井八日市遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は群馬県前橋市笂井町字八日市５～53番地、字長瀞53～86番地、前橋市小島田町字八日市524番地、字蛭田１～177番地に所在する。

3　本遺跡の名称は、遺跡所在地の町名と字を併記して「笂井八日市遺跡」と呼称し、小島田町に所在する遺跡についても一連の遺跡であるために同遺跡に含めた。

4　事業主体　建設省関東地方建設局

5　調査主体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

6　調査期間　平成２年１月23日～平成２年２月14日（平成元年度）
平成３年１月14日～平成３年３月31日（平成２年度）
平成３年４月16日～平成３年７月15日（平成３年度第１次）
平成３年10月16日～平成４年１月15日（平成３年度第２次）
平成４年８月３日～平成４年８月８日（平成４年度第１次）
平成４年10月13日～平成４年11月６日（平成４年度第２次）

7　調査組織　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
常務理事　邊見長雄
事務局長　松本浩一（平成元～３年度）　近藤　功（平成４年度）
管理部長　田口紀雄（平成元・２年度）　佐藤　勉（平成３・４年度）
調査研究部長　神保侑史
庶務課長　住谷　進（平成元年度）　岩丸大作（平成２・３年度）
斉藤俊一（平成４年度）
調査研究第２課長　桜場一寿（平成元年度）　能登　健（平成２～４年度）
事務担当　国定　均　笠原秀樹　小林昌嗣　須田朋子　吉田有光　柳岡良宏　船津　茂
高橋定義　野島のぶ江　今井もと子
調査担当　平成元年度　飯島義雄（専門員）　石北直樹（主任調査研究員）
神谷佳明（主任調査研究員）　樋口伸男（調査研究員）
平成２年度　飯島義雄（専門員）　神谷佳明（主任調査研究員）
黒田　晃（調査研究員）
平成３年度　坂口　一（主任調査研究員）　徳江秀夫（主任調査研究員）
（第１次）　井上昌美（調査研究員）
平成３年度　坂口　一（主任調査研究員）　井上昌美（調査研究員）
（第２次）　関口博幸（調査研究員）
平成４年度　洞口正史（主任調査研究員）　徳江秀夫（主任調査研究員）
井上昌美（調査研究員）

8　整理主体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

9　整理期間　平成４年４月１日～平成５年３月31日

10　整理組織　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

常務理事　邊見長雄
事務局長　近藤　功
管理部長　佐藤　勉
調査研究部長　神保侑史
庶務課長　斉藤俊一
調査研究第2課長　能登　健
事務担当　国定　均　笠原秀樹　須田朋子　柳岡良宏　船津　茂　高橋定義
松下　登　今井もと子　角田みづほ　松井美智代　塩浦ひろみ
整理担当　坂口　一（主任調査研究員）
整理班員　阿部和子　狩野フミ子　神谷順子　五明志津江　島崎敏子　島村玲子
橋爪美頼　福島和恵

11　本書作成の担当者は次のとおりである。

編　　集　坂口　一
執　　筆　Ⅰ章1節　神谷佳明（群馬県埋蔵文化財調査事業団　主任調査研究員）
Ⅲ章・Ⅴ章　黒田　晃（群馬県埋蔵文化財調査事業団　調査研究員）
Ⅶ章　寒川　旭（通商産業省工業技術院　地質調査所）
縄文土器観察　藤巻幸男（群馬県埋蔵文化財調査事業団　主任調査研究員）
上記以外　坂口　一
遺構・遺物図面整理、図版作成等
阿部和子　狩野フミ子　神谷順子　五明志津江　島崎敏子　島村玲子　橋爪美頼　福島和恵
遺物写真　佐藤元彦
保存科学　関　邦一　小材浩一　土橋まり子　樋口一之

12　出土遺物と、笂井八日市遺跡に関する整理済み記録資料の一切は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

13　本書の作成にあたっては、次の方々に有益な指導と助言を賜った。記して深甚なる感謝の意を表す次第である。

赤山容造　新井喜昭　飯島静男　飯島義雄　石本　弘　牛嶋　茂　江浦　洋　工楽善通　小林正春
佐藤明人　申　敬澈　須永光一　早田　勉　外尾常人　武末純一　田中清美　田辺昭三　趙　現鐘
橋本澄朗　細野高伯　前原　豊　三浦京子　宮崎重雄　柳沼賢治　梁木　誠　柳沢一男　渡辺　一
（敬称略）

凡　　例

1　調査区域には、国家座標に基づいて4m間隔のグリッドを設定した。グリッドの原点（AA-00）は日本平面直角座標系第IX系のX＝40.950km、Y＝－61.800kmで、グリッドの国家座標上における位置は、付図1「遺跡位置図」に示した。

2　住居の方位は、長軸線あるいは竈が付設されていたと推定される壁に直行する軸線の、真北に対する傾きを示し、時計回りを＋、反時計回りを－とした。

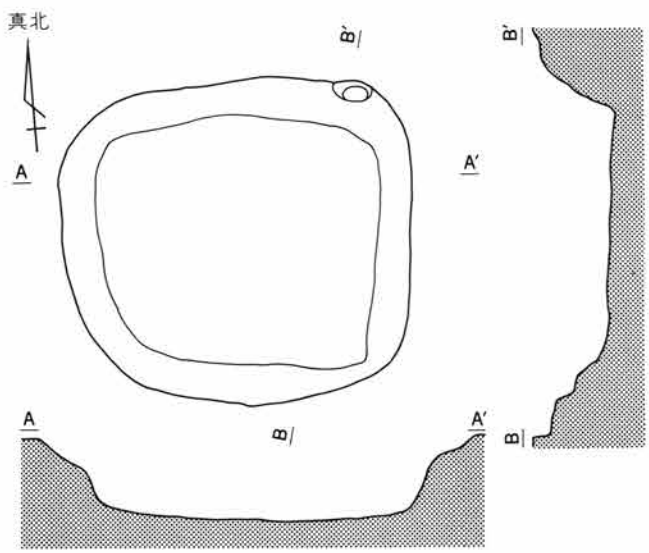
3　遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

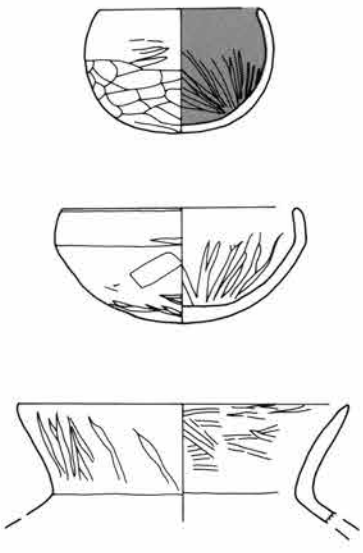
(1)　胎土中の砂粒の大きさによる分類は、土壌物理研究会による基準に従い、細砂粒（　<0.5mm）、粗砂粒（0.5～2.0mm）、細礫（2.0～5.0mm）、中礫（5.0mm<　）とした。

(2)　色調は農林省水産技術会議事務局監修、㈶日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に従った。

(3)　遺物の出土レベルは、遺構の床面から遺物までの垂直距離を示した。

4　竪穴住居の面積は、1/40図上でプラニメーターによる3回の計測平均値を採り、住居確認面の掘り込みから内側を測定した。





竪穴住居外形分類基準

上　段：長軸長（単位　m）
下　段：長軸比（長軸長／短軸長）

規模＼形状	正　方　形	縦長長方形	横長長方形
超大形	6.5m以上 1.0～1.1未満	6.5m以上 1.1以上	6.5m以上 1.1以上
大形	5.4～6.5m未満 1.0～1.1未満	5.4～6.5m未満 1.1以上	5.4～6.5m未満 1.1以上
中形	4.3～5.4m未満 1.0～1.1未満	4.3～5.4m未満 1.1以上	4.3～5.4m未満 1.1以上
小形	3.2～4.3m未満 1.0～1.1未満	3.2～4.3m未満 1.1以上	3.2～4.3m未満 1.1以上

目　　次

序 …… i
例言 …… iii
凡例 …… v
報告書抄録 …… vii
Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要
　1　調査の経過 …… 1
　2　遺跡の位置と地形 …… 2
　3　周辺の遺跡 …… 3
　4　遺跡の標準土層 …… 5
Ⅱ　竪穴住居 …… 7
Ⅲ　古　　墳 …… 15
Ⅳ　方形区画遺構 …… 19
Ⅴ　水　　田 …… 24
Ⅵ　その他の遺構 …… 29
Ⅶ　考　　察
　1　笂井八日市遺跡の方形区画遺構について …… 64
　2　笂井八日市遺跡における地震の痕跡 …… 69

遺物観察表 …… 72

付　図
　1　遺跡位置図（1/1,000）
　2　遺構全体図 1（1/500）
　3　遺構全体図 2（1/500）
　4　水田詳細図 1（1/200）
　5　水田詳細図 2（1/200）
　6　水田詳細図 3（1/200）
　7　水田詳細図 4（1/200）

報　告　書　抄　録

フリガナ	ウツボイヨウカイチ
書名	笂井八日市遺跡
副書名	一般国道50号（東前橋拡幅）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第3集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第170集
編著者名	坂口　一
編集機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784－2
発行年	西暦1994年3月24日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
笂井八日市 (ウツボイヨウカイチ)	前橋市笂井町 (マエバシシウツボイマチ) 字八日市・字 (アザヨウカイチ・アザ) 長瀞 (ナガトロ) 前橋市小島田 (マエバシシコジマタ) 町字八日市・ (マチアザヨウカイチ) 字蛭田 (アザヒルタ)	102016		36°22′02″	139°8′25″	19920123 ～ 19920214	1,240m²	道路建設
						19930114 ～ 19930331	4,030m²	
						19930416 ～ 19930715 19931016 ～ 19940115	m² 4,957	
						19940803 ～ 19940808 19941013 ～ 19941106	440m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
笂井八日市	土壙	縄文時代	土壙	2基	縄文土器	
	住居	古墳時代	竪穴住居	6軒	古墳時代中期	
	墳墓			1基	土師器	
	方形区				古墳時代	
	画溝		方形区画溝	1か所	土師器、須恵器	
	水田	平安時代	水田		中世陶器	

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

1　調査の経過

一般国道50号（東前橋拡幅）改築工事に伴う笂井八日市遺跡の発掘調査は、平成元年度から平成４年度までの４年間にわたって実施した。調査対象地は、県道藤岡･大胡線を挟んで西側390mから東側290mまでの全長680m、幅は国道50号線の両側で概ね８～10mである。発掘調査にあたっては、調査対象地内の用地買収の進捗、耕作物の除去、家屋の移転撤去などの工程上の経緯もあり、発掘調査の可能な地点より順次着手することになった。以下調査年度次に沿って経過を報告する。

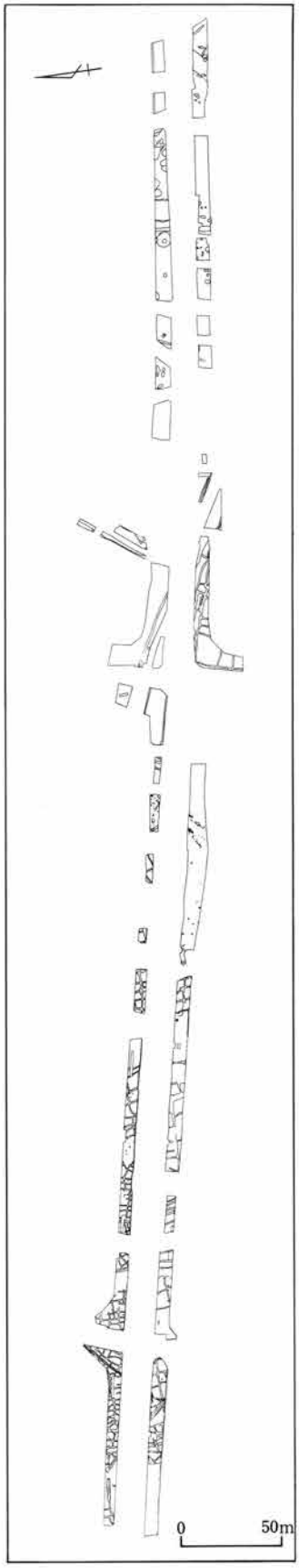
平成元年度（1992年１月23日～２月14日）は、用地買収がなされ耕作物、建造物が撤去されている県道藤岡・大胡線の東側で国道南側の１区２地点（センター杭178～179、184～186）、国道北側の２区１地点（センター杭177～179）の３地点、面積1,240m²の発掘調査を実施した。１区東側と２区の２地点は、国道50号線の建設時の土砂採取によりローム層中まで掘削が行われ、遺構･遺物は検出されなかった。１区西側の調査区でも大部分はローム層中まで掘削がおこなわれていたが、南端で上部に人頭大の礫が入った溝を１条検出した。

平成２年度（1993年１月14日～３月31日）は、県道藤岡・大胡線の西側で国道南側の３区（センター杭153～160、162～170）、国道北側の４区（センター杭153～165）、面積4,030m²の発掘調査を実施した。平成２年度の調査区は、広瀬川低地帯にあたる部分で３区の西端で古墳の一部分が検出された他では、浅間Ｂ軽石層（As-B）下より平安時代の水田跡を検出した。

平成３年度（1993年４月16日～７月15日、10月16日～1994年１月15日）は、１区（センター杭173～176、177～184）、２区（センター杭173～177、179～188）、３区（センター杭160～162）、４区（165～171、171.5～173）、面積4,957m²の発掘調査区を実施した。調査対象地のなかには、商店や人家の出入口にあたる箇所があり発掘調査の実施にあたり調整を要し、表土掘削の際に範囲を分割しておこなった箇所が数箇所あった。遺構のなかでは、２区のセンター杭170付近で古墳時代中期の豪族居館に伴う堀を検出したのが注目される。

平成４年度（1994年８月３日～８月８日、10月13日～11月６日）は、１区（センター杭187～188）、４区（センター杭171～171.5）の前年度までの未調査区の面積440m²について実施した。平成４年度も３区（センター杭187）で、平成３年度に検出したのと同様な豪族居館の大規模な堀を検出した。

笂井八日市遺跡の発掘調査は、平成元年度から４年度にわたり、のべ11か月で面積は10,667m²を実施した。



笂井八日市遺跡

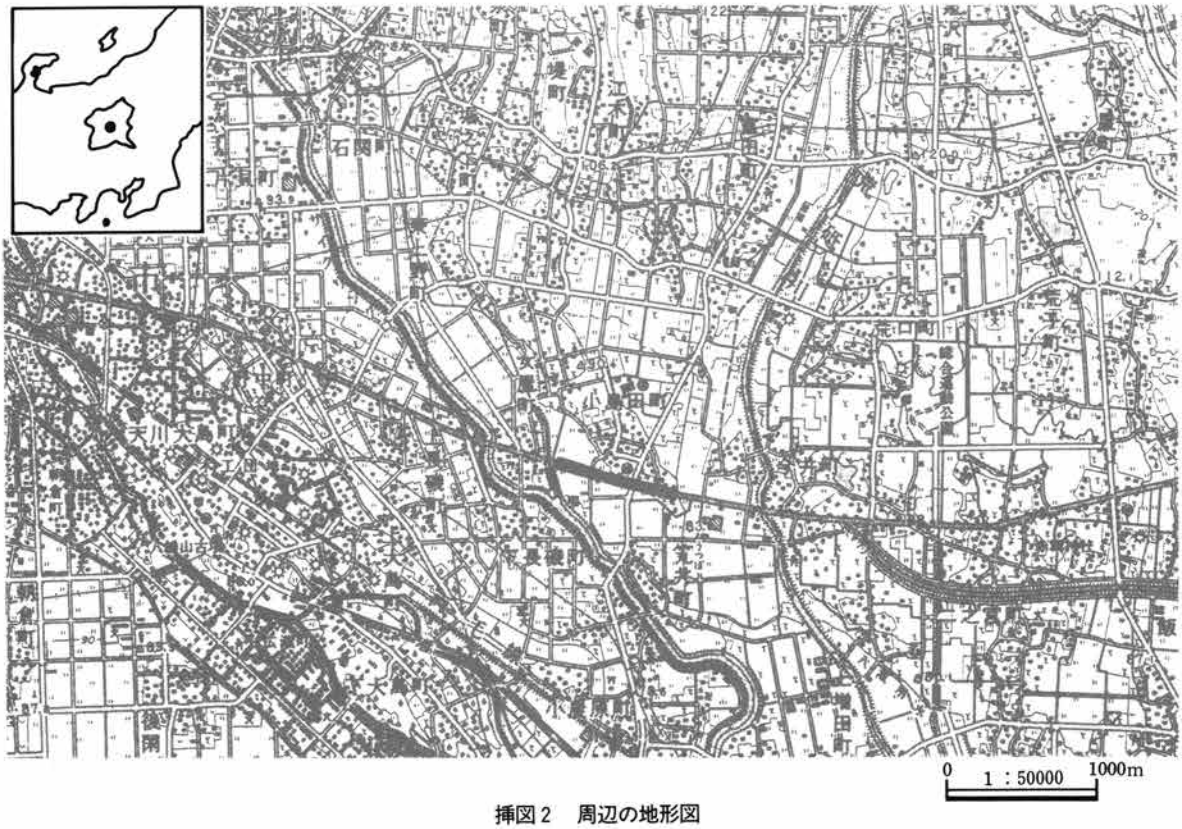
2　遺跡の位置と地形

笂井八日市遺跡は群馬県前橋市笂井町、小島田町に所在し、前橋市街地の東方6㎞に位置している。この遺跡を南麓の末端に載せる赤城山は、標高1,828mの黒檜山を最高峰として、半径15㎞の範囲に緩やかな裾野をひろげている。山麓には数多くの開析谷が台地を刻み、特に南麓の一帯は樹枝状に伸びた沖積低地が発達している。また、この地域では前橋台地が形成された際に堆積した前橋泥流堆積物が赤城山麓の末端部と接し、さらにこの前橋泥流堆積物層が旧利根川によって浸食されてできた広瀬川低地帯が、北西から南東にかけて存在する。したがって、この遺跡の周辺では赤城山麓、前橋台地、広瀬川低地帯という変化に富んだ地形面を形成している。

この遺跡は広瀬川低地帯から、旧利根川に浸食されずに残存した前橋台地にかけて立地している。このため、遺跡が立地する地形は大きく広瀬川低地帯にあたる低地部と、前橋台地にあたる台地部とに分かれ、現地盤の標高は低地部が83～85m、台地部が83～86mである。台地部は西側の広瀬川低地帯と、東側の貴船川に挟まれた北西から南東にかけて伸びた細い台地で、遺跡はこの台地の先端部にあたっている。低地部、台地部ともに北西から南東にかけて緩やかな傾斜地形を示している。

低地部には、旧利根川による堆積物の上位を完新世の火山灰が覆っている。下位から4世紀中葉の浅間C軽石層（As-C）、6世紀初頭の榛名山二ツ岳降下火山灰層（Hr-FA）、天仁元（1108）年の浅間B軽石層（As-B）、天仁元年以降の浅間－粕川テフラ（As-Kk）である。しかし、これらのテフラが検出できるのは台地に近い部分のみで、広瀬川低地帯の本流に近い部分では浅間B軽石層を除いて検出することができない。また、台地部の標準土層でもこれらのテフラは検出できない。

現在、低地部では水田が、台地部では畑がそれぞれ営まれ、これと同様に低地部では古代の水田が、台地部では集落がそれぞれ発掘調査されている。



挿図2　周辺の地形図

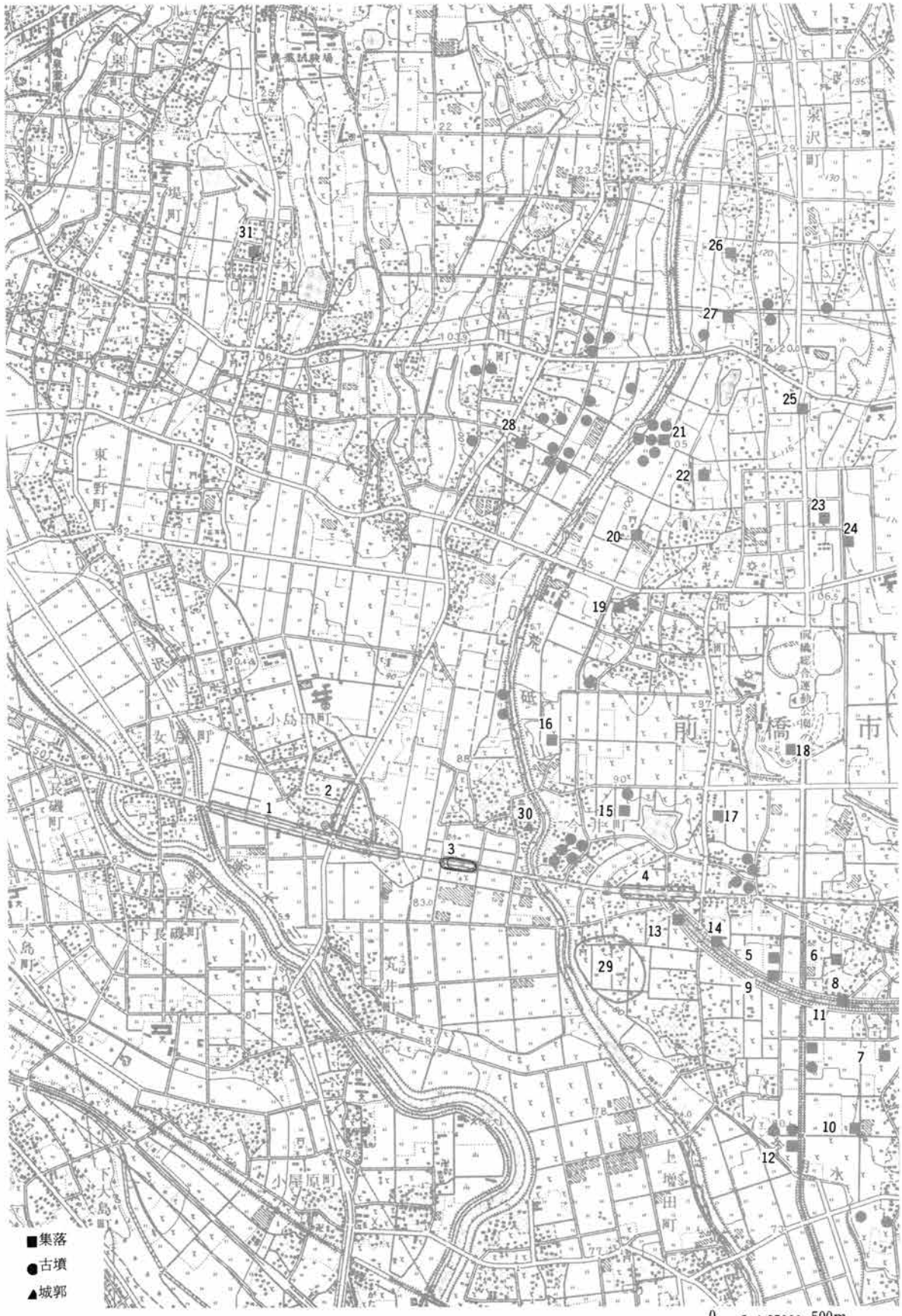
3　周辺の遺跡

笂井八日市遺跡が立地する赤城山の南麓の末端部では、多くの遺跡が発掘調査されている。特に、遺跡の東方500mの位置を南流する荒砥川の流域には数多くの集落遺跡・墳墓が立地し、とりわけ古墳時代中期以降から、集落は急激な増加の傾向を示している。これに対して、荒砥川から広瀬川低地帯にかけての赤城山麓の末端部では、遺跡の発掘調査例が少ない。しかし、古墳時代前期から平安時代にかけての集落を検出した萱野遺跡(№31)などの例から、これはこの地域における開発行為の頻度の差と考えられる。

この遺跡では、5世紀後半代の豪族居館の可能性がある大規模な堀を検出した。これは、南北160m、東西200mの範囲を堀が区画すると考えられる。一方、貴船川の低地を挟んだ今井白山遺跡では、古墳時代前期から平安時代にかけての竪穴住居、荒砥川を挟んだ今井道上遺跡では古墳時代中期から後期の竪穴住居、荒砥北三木堂遺跡では弥生時代から平安時代にかけての竪穴住居がそれぞれ発掘調査されている。これらの竪穴住居は5世紀代から急激な増加傾向を示し、荒砥川の縁辺部に立地する今井神社古墳も含めてこれらの相互の関連性が考えられる。

また、従来遺跡が存在しないと考えられていた広瀬川低地帯においても、天仁元（1108）年の浅間山の噴火に伴う浅間B軽石層（As-B）に覆われた平安時代の水田が検出され、今後は台地上のみではなく広瀬川低地帯をも含めた遺跡立地の検討が必要になろう。

番号	遺　跡　名	年　　代	遺　　構	文　　献
1	笂井八日市遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中近世		
2	小島田八日市遺跡	縄文・古墳・中世	墳墓・墓址	『年報』12　㈶群埋文　1993
3	今井白山遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	住居址・地震跡	『今井白山遺跡』　㈶群埋文　1993
4	今井道上遺跡	古墳・奈良・平安	住居址・居館址	
5	荒砥洗橋遺跡	古墳・奈良・平安・近世	住居址・水田址	『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』　㈶群埋文　1989
6	荒砥宮西遺跡	古墳・奈良・平安	住居址	『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』　㈶群埋文　1989
7	荒砥天之宮遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	住居址・水田址	『荒砥天之宮遺跡』　㈶群埋文　1987
8	二之宮千足遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世	住居址・水田址	『年報』6・7　㈶群埋文　1987・1988
9	二之宮洗橋遺跡	古墳・奈良・平安	住居址	『年報』6・7　㈶群埋文　1987・1988
10	荒砥島原遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	住居址・墓址・水田址	『荒砥島原遺跡』　㈶群埋文　1983
11	宮川遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	住居址・墓址・水田址	『宮川遺跡』群馬県教委　1980
12	宮原遺跡	古墳	住居址・墓址	『宮川遺跡』　群馬県教委　1980
13	今井道上道下遺跡	先土器～近世	住居址	『年報』6・7　㈶群埋文　1987・1988
14	二之宮谷地遺跡	先土器・縄文・古墳・奈良・平安	住居址・水田址	『年報』6・7　㈶群埋文　1987・1988
15	荒砥北三木堂遺跡	先土器・縄文・古墳・奈良・平安	住居址・墓址	『荒砥北三木堂遺跡』　㈶群埋文　1982
16	荒砥北原遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	住居址・墓址	『荒砥北原遺跡』　㈶群埋文　1986
17	荒砥大日塚遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	住居址・水田址	『年報』1　㈶群埋文　1982
18	鶴ヶ谷遺跡群	弥生・古墳・奈良・平安	住居址	『鶴ヶ谷遺跡群』『鶴ヶ谷遺跡群II』 市教委　1981・1982
19	荒口前原遺跡	弥生・平安	住居址	「荒口前原遺跡」『まえあし』14　柿沼恵介　1973
20	荒砥宮田遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中近世	住居址・墓址・水田址	
21	荒砥諏訪西遺跡	古墳・平安・中・近世	住居址・水田址・墓址	昭和58年度『荒砥北部遺跡群』　群馬県教委　1984
22	荒砥諏訪遺跡	古墳	墓址	昭和58年度『荒砥北部遺跡群』　群馬県教委　1984
23	柳久保遺跡群	先土器・縄文・古墳・奈良・平安	住居址・墓址	『柳久保遺跡群』Ⅰ　前橋市埋文発掘調査団　1985
24	柳久保水田遺跡	平安	水田址	『柳久保遺跡群』Ⅰ　前橋市埋文発掘調査団　1985
25	大久保遺跡	古墳・奈良・平安	住居址	昭和59年度『荒砥北部遺跡群』　群馬県教委　1984
26	丸山遺跡	古墳	住居址・墓址	『丸山・北原』群馬県教委　1987
27	北原遺跡	古墳・平安	住居址・墓址	『丸山・北原』群馬県教委　1987
28	宮下遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	住居址・墓址	
29	今井神社古墳群	古墳・平安	住居址・墓址	『荒砥北原遺跡ほか』　㈶群埋文　1986
30	今井城	中世	城館址	『群馬県古城墓址の研究』上巻　山崎　一　1971
31	萱野遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	住居址・墓址	『萱野・下田中・矢場遺跡』　群馬県企業局　1991



挿図３　周辺の遺跡分布図

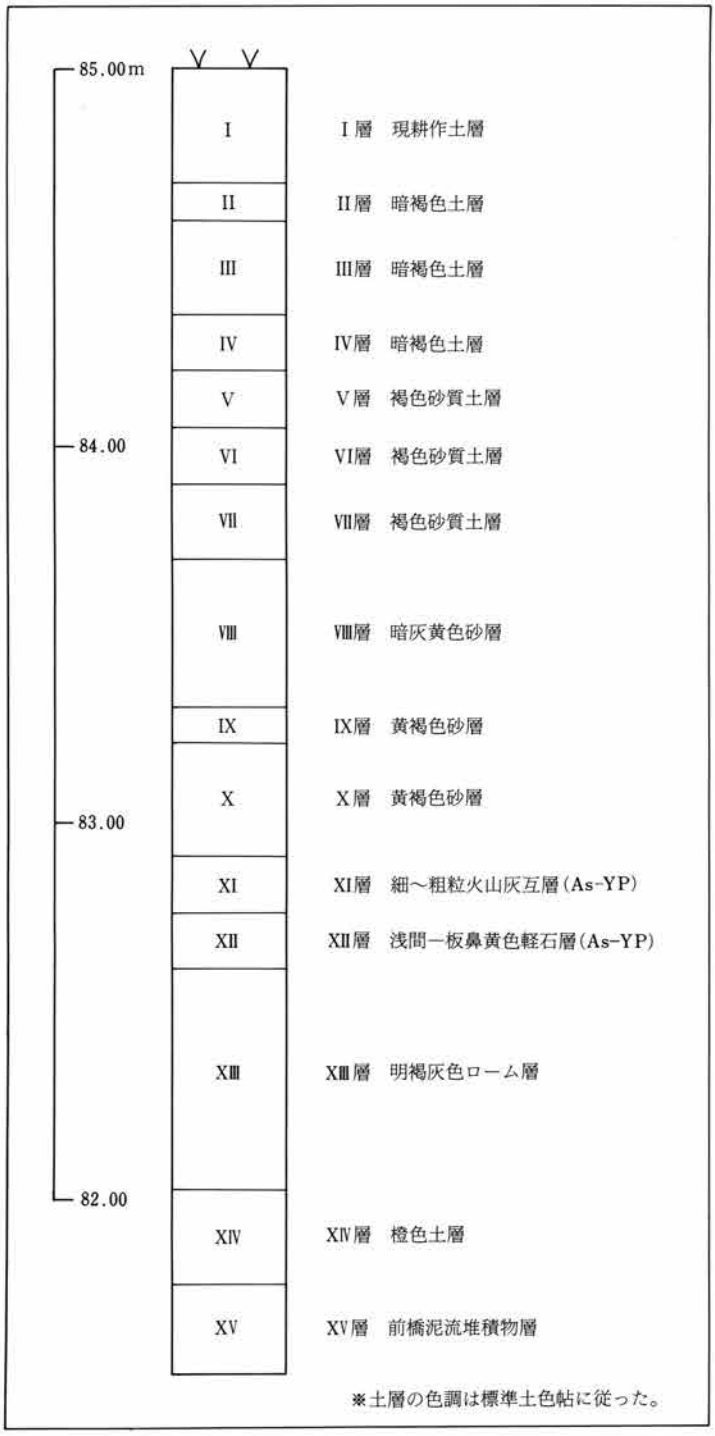
4　遺跡の標準土層

この遺跡は広瀬川低地帯から、旧利根川に浸食されずに残存した前橋台地にかけて立地している。このため、前橋台地上(台地部)と広瀬川低地帯の部分(低地部)とでは、標準土層が大きく異なる。ここでは、台地部と低地部に分けてその層序を以下に述べる。

台地部

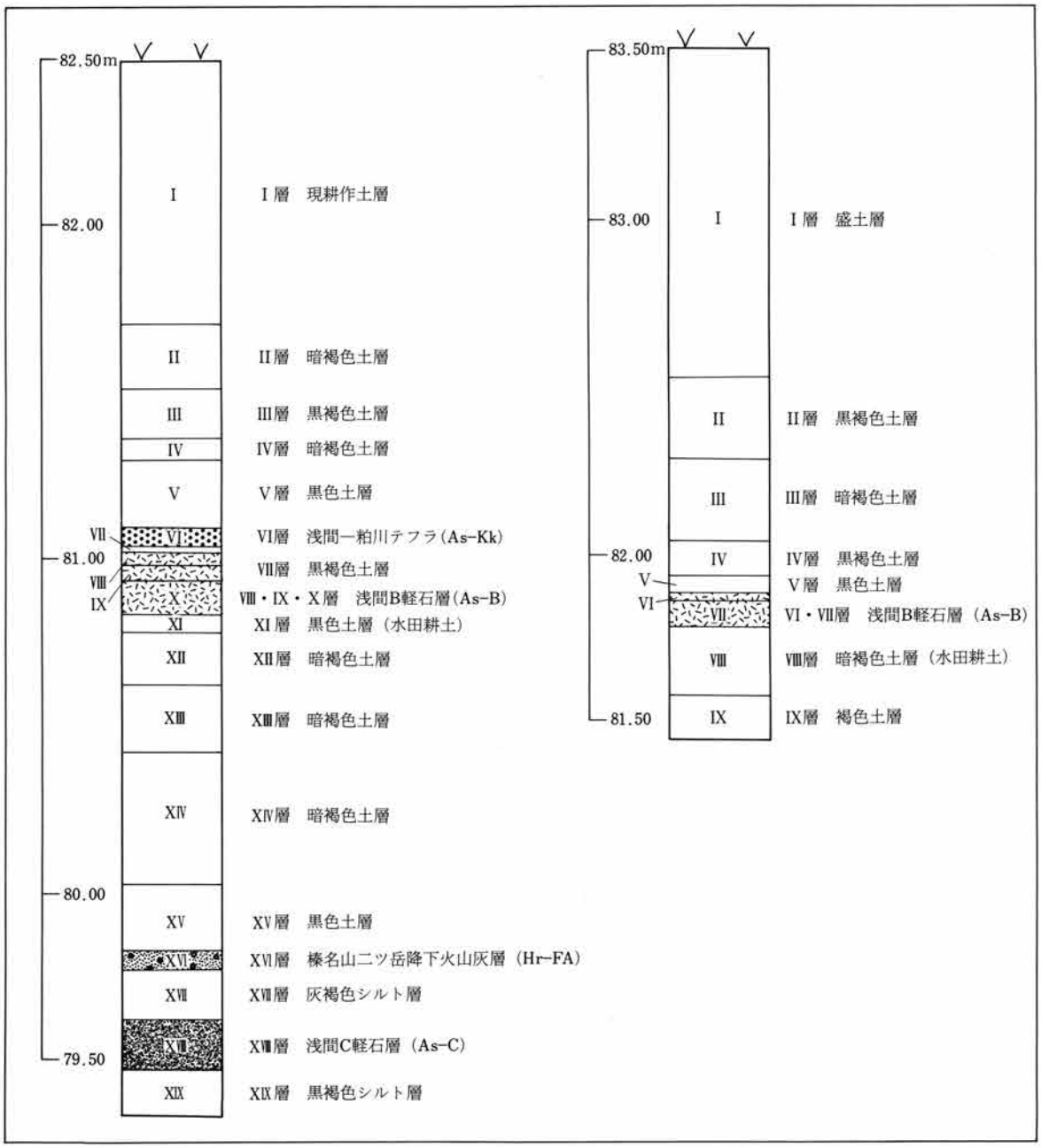
台地部では、前橋泥流堆積物層の上位を上部ローム層が覆い、このなかには浅間－板鼻黄色軽石層（As-YP）が含まれる。その上位を赤城山麓からの砂礫層が覆って、現地表面に至っている。

Ⅰ層：現耕作土層
Ⅱ層：暗褐色土層（少量の黒褐色土粒を含む）
Ⅲ層：暗褐色土層（褐色土粒、黒褐色土粒を含む）
Ⅳ層：暗褐色土層
Ⅴ層：褐色砂質土層(多量の細礫を含む)
Ⅵ層：褐色砂質土層（多量の褐色土ブロックを含む）
Ⅶ層：褐色砂質土層
Ⅷ層：暗灰黄色砂層（小円礫、円磨された軽石を含む）
Ⅸ層：黄褐色砂層
Ⅹ層：黄褐色砂層（円磨された黄色軽石を多量に含む）
Ⅺ層：細～粗粒火山灰互層（As-YP）
Ⅻ層：黄色軽石層（As-YP）
XIII層：明褐灰色ローム層（円礫含む）
XIV層：橙色土層（多量の円礫含む）
XV層：前橋泥流堆積物層



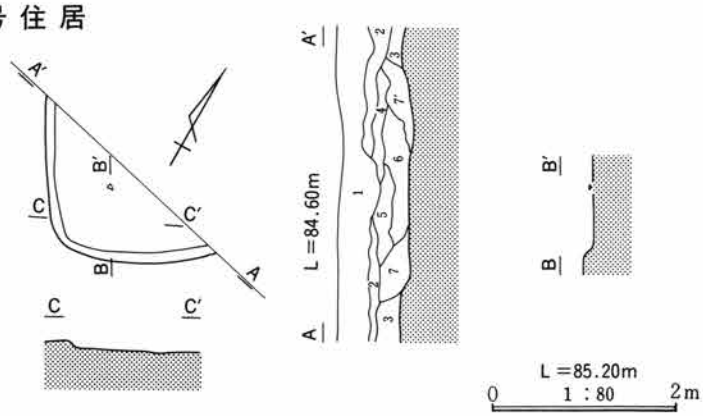
低地部1　Ⅰ層：現耕作土層　Ⅱ層：暗褐色土層（暗褐色土、白色軽石を含む）　Ⅲ層：黒褐色土層（細礫、白色軽石を含む）　Ⅳ層：暗褐色土層　Ⅴ層：黒色土層　Ⅵ層：青灰色細粒火山灰層、浅間－粕川テフラ（As-Kk）　Ⅶ層：黒褐色土層　Ⅷ層：灰褐色極細粒火山灰層、浅間Ｂ軽石層（As-B）　Ⅸ層：黒色中粒火山灰層、浅間Ｂ軽石層（As-B）　Ⅹ層：灰黄褐色軽石層、浅間Ｂ軽石層（As-B）　Ⅺ層：黒色土層（平安時代水田耕土）　Ⅻ層：暗褐色土層（小礫含む）　XIII層：暗褐色土層（Hr-FP粒含む）　XIV層：暗褐色土層（Hr-FP粒含む）　XV層：黒色土層　XVI層：黄褐色火山灰層、榛名山二ツ岳降下火山灰層（Hr-FA）　XVII層：灰褐色シルト層　XVIII層：暗褐色軽石層、浅間Ｃ軽石層（As-C）　XIX層：黒褐色シルト層

低地部2　Ⅰ層：盛土層　Ⅱ層：黒褐色土層　Ⅲ層：暗褐色土層　Ⅳ層：黒褐色土層　Ⅴ層：黒色土層　Ⅵ層：灰褐色細粒火山灰層、浅間Ｂ軽石層（As-B）　Ⅶ層：粗粒火山灰層、浅間Ｂ軽石層（As-B）　Ⅷ層：暗褐色土層　Ⅸ層：褐色土層



II　竪穴住居

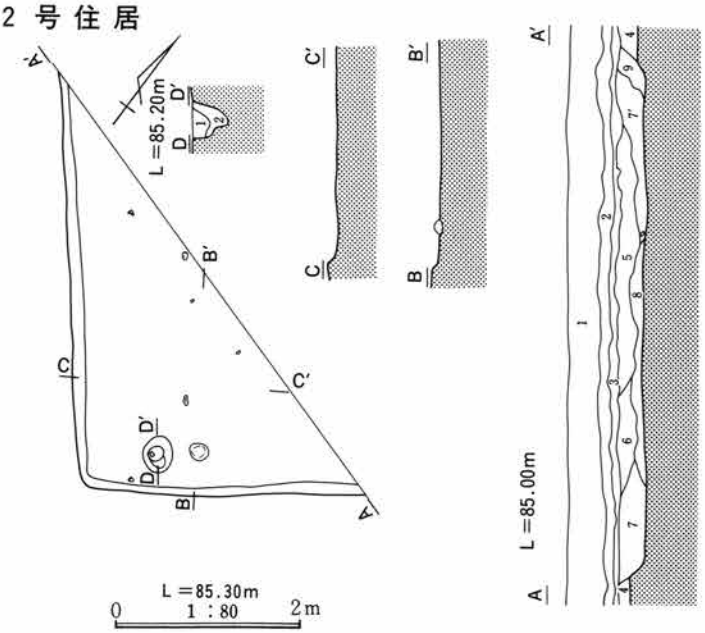
1 号 住 居



1　耕作土。
2　暗褐色土。黒色土粒含む。
3　暗褐色土。褐色土粒、黒色土粒含む。
4　暗褐色土。2より暗い色調。
5　黒褐色土。褐色土粒含む。
6　黒褐色土。褐色土粒含む。
7　暗褐色土。褐色土粒、黒色土粒含む。
7′　暗褐色土。7より明るい色調。

形　状　住居の大半が調査区域外のため、外形を確定することができない。**床　面**　基盤層を30cm掘り込んで床面とする。確認した床面は平坦で整っている。**柱　穴**　確認できない。**炉・竈**　確認できない。**遺　物**　復原が可能な伴出土器はない。**重　複**　6号住居と重複する。1号住居が6号住居を切って構築する平面精査の所見を得た。**方　位**　測定不可能　**面　積**　測定不可能

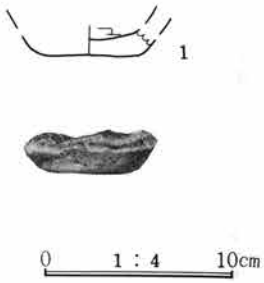
2 号 住 居



遺物観察表 72

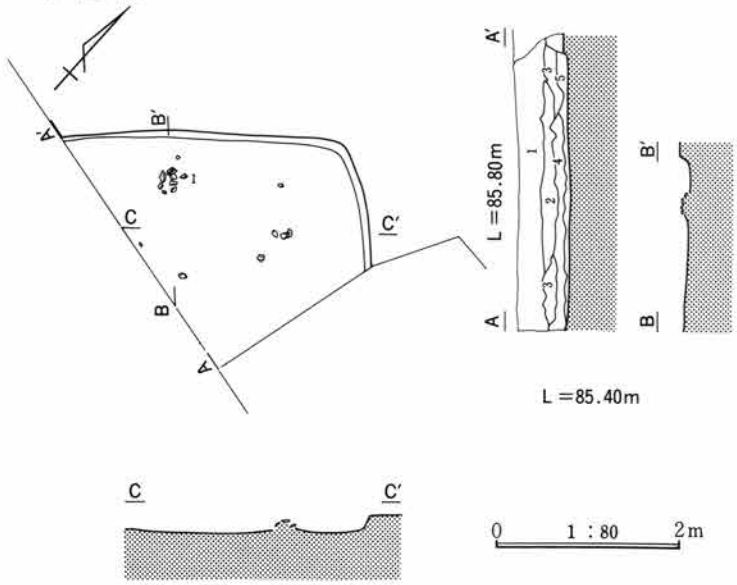
1 盛土。
2 黒褐色砂質土。
3 暗オリーブ褐色砂質土。
4 暗褐色土。褐色土粒、黒色土粒含む。
5 黒褐色土。暗褐色土粒、白色軽石粒含む。
6 黒褐色土。多量の暗褐色土粒含む。
7 暗褐色土。黒色土粒含む。
7′ 暗褐色土。多量の黒色土粒含む。
8 暗褐色土。黒色土粒含む。
9 黒褐色土。暗褐色土粒含む。

形 状 住居の北半部が調査区域外のため、外形を確定することができない。**床 面** 基盤層を30cm掘り込んで床面とする。確認した床面は平坦で整っている。住居南西隅のピットは直径30cm、深さ40cm。**柱 穴** 確認した床面の範囲に主柱穴はない。**炉・竈** 確認した床面及び壁の範囲に、炉、竈ともに確認できない。**遺 物** 床面に密着した遺物はない。覆土内より土師器甕の底部が出土するが、詳細な年代を推定し難い。**重 複** 他の住居と重複することなく、単独で占地する。**方 位** +140° **面 積** 測定不可能



3 号 住 居

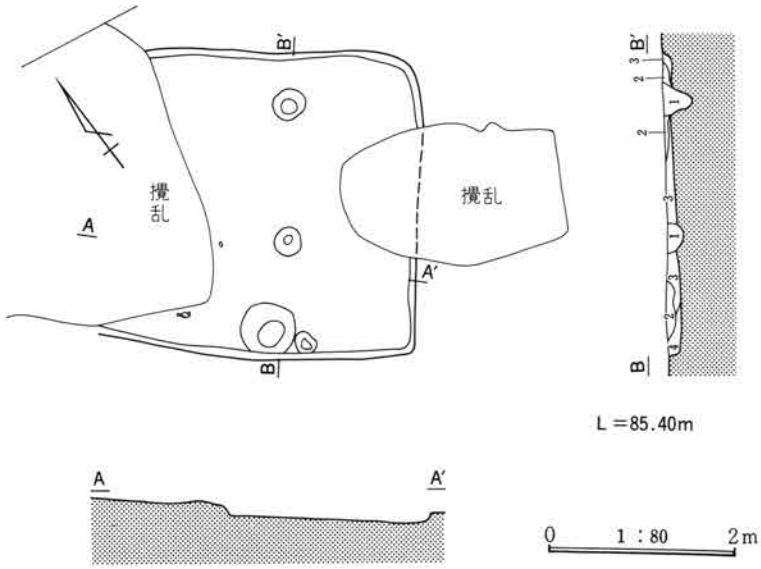
遺物観察表 72



1 黒褐色砂質土。
2 暗褐色土。黒褐色土粒、白色軽石粒含む。
3 黒褐色土。暗褐色土粒、白色軽石粒含む。
4 黒褐色土。暗褐色土粒含む。
5 暗褐色土。黒褐色土粒含む。

形 状 住居の南半部が調査区域外のため、外形を確定することができない。**床 面** 基盤層を30cm掘り込んで床面とする。確認した床面は平坦で整っている。**柱 穴** 確認した床面の範囲に主柱穴はなく、壁外にもこの住居に伴う柱穴の痕跡がない。**炉・竈** 確認した床面及び壁の範囲に、炉、竈ともに確認できない。**遺 物** 北壁際中央部の床面直上より土師器甕の破片が出土し、これが住居の年代を示す。**重 複** 他の住居と重複することなく、単独で占地する。**方 位** +48° **面 積** 測定不可能

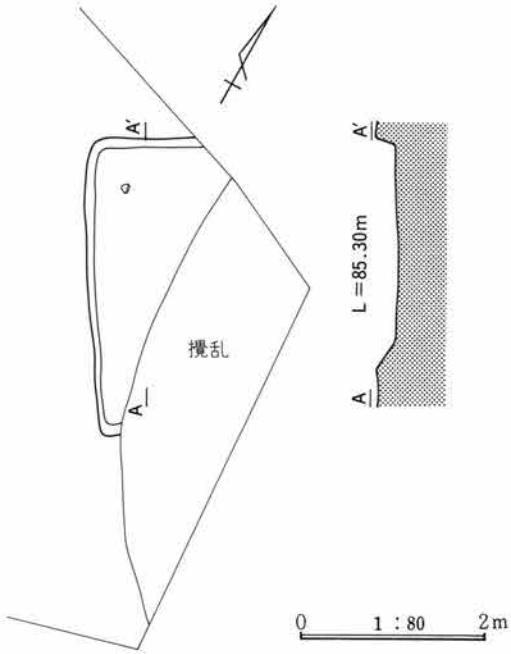
4 号 住 居



1　黒褐色土。白色軽石粒、暗褐色土粒含む。
2　暗褐色土。白色軽石粒含む。
3　暗褐色土。黒褐色土粒含む。
4　暗褐色土。黒褐色土粒含む。

形　状　住居の西壁部に撹乱を受けているため、外形を確定することができない。確認した南北軸は3.3mである。**床　面**　基盤層を10cm掘り込んで床面とする。確認した範囲の床面は平坦で整っている。**柱　穴**　壁内に主柱穴はなく、壁外にもこの住居に伴う柱穴の痕跡がない。住居の中央部を南北に並ぶ3個のピットは深さ10～20cmで、いずれも主柱穴とは考え難い。**炉・竈**　確認した床面及び壁に、炉、竈の痕跡はない。**遺　物**　復原が可能な伴出遺物はない。**重　複**　他の住居と重複することなく、単独で占地する。**方　位**　＋40°　**面　積**　測定不可能

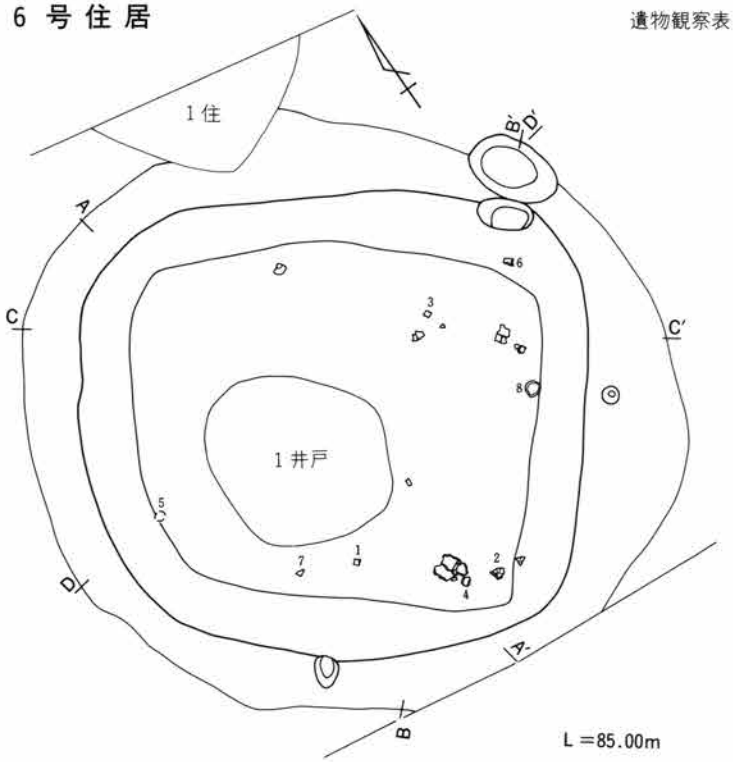
5 号 住 居

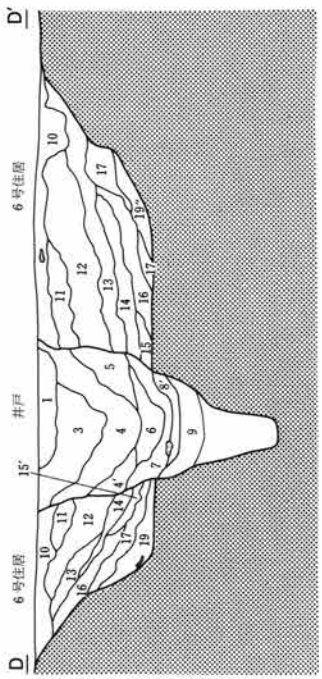


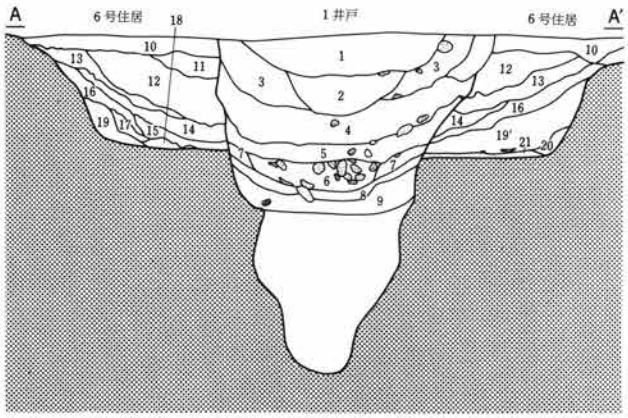
形　状　住居の東半部が調査区域外のため、外形を確定することができない。確認した南北軸は3.2mである。**床　面**　基盤層を20cm掘り込んで床面とする。確認した床面は平坦で整っている。**柱　穴**　確認した床面の範囲に主柱穴はなく、壁外にもこの住居に伴う柱穴の痕跡がない。**炉・竈**　確認した床面及び壁の範囲には炉、竈ともに確認できない。**遺　物**　復原が可能な伴出遺物はない。**重　複**　他の住居と重複することなく、単独で占地する。**方　位**　+58°　**面　積**　測定不可能

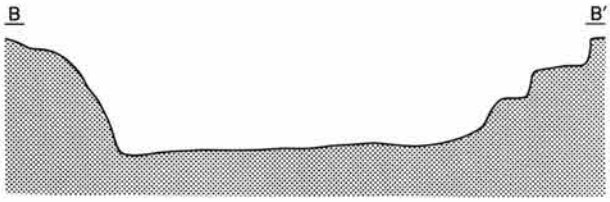
6 号 住 居

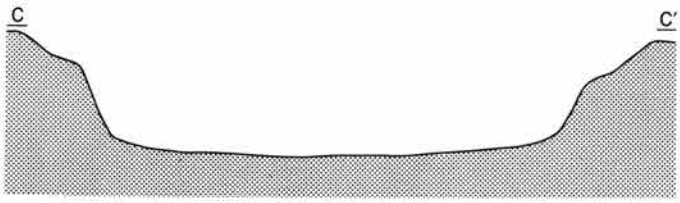
遺物観察表 72







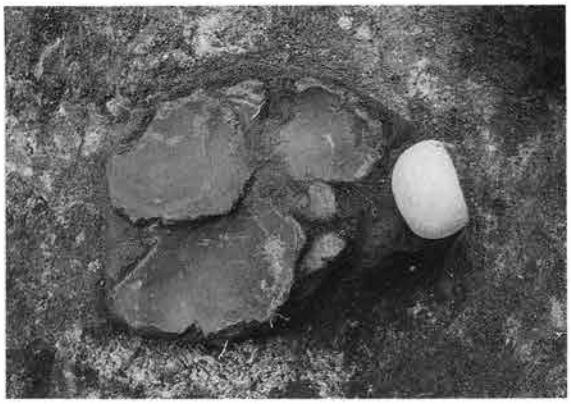


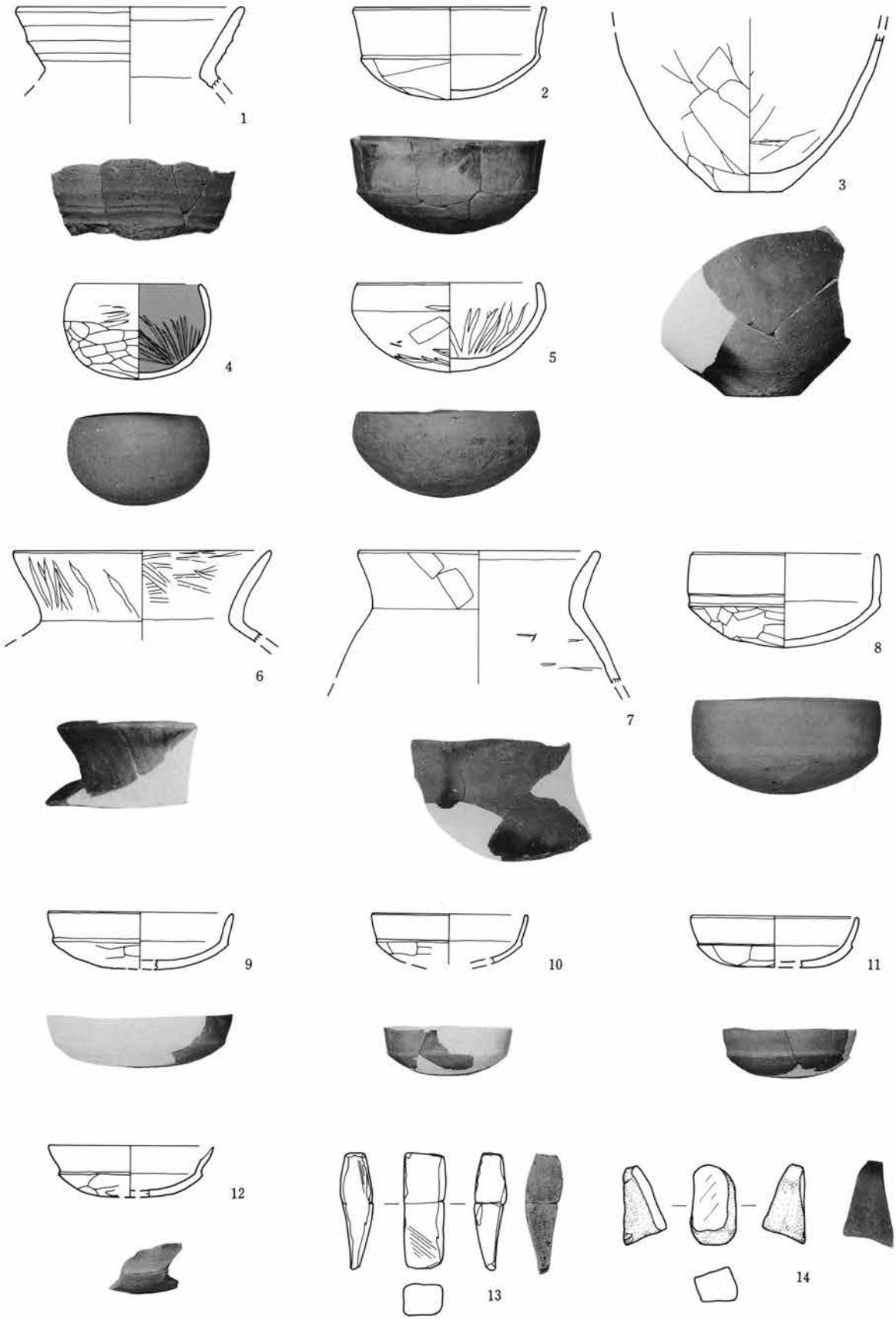


0　1：80　2m

1　暗褐色土。褐色土粒、黒褐色土粒含む。
2　黒褐色土。黒褐色土粒、白色軽石粒含む。
3　暗褐色土。黒褐色土粒含む。
4　黒褐色土。暗褐色土粒含む。
4′　黒褐色土。
5　黒褐色土。砂質。
6　黒褐色土。礫含む。
7　黒褐色土。
8　黒褐色砂。黒褐色土含む。
8′　黒褐色土。白色軽石粒含む。
9　黒色土。暗褐色土粒含む。
10　黒褐色土。暗褐色土粒、白色軽石粒含む。
11　黒色土。白色軽石粒含む。
12　黒褐色土。白色軽石粒含む。
13　黒褐色土。白色軽石粒含む。
14　黒褐色土。地山のブロック含む。
15　黒色土。
15′　黒色土。暗褐色土粒含む。
16　黒褐色土。暗褐色土粒含む。
17　暗褐色土。
18　暗褐色土。
19　暗褐色土。砂質土粒含む。
19′　暗褐色土。
19″　暗褐色土。多量の砂質土粒含む。
20　黒褐色土。砂質土ブロック含む。
21　黒褐色土。黄褐色軽石粒含む。

形　状　短軸4.9m、長軸5.4mで、東西に長軸をもつ大形横長長方形住居。住居確認面の上端は擂鉢状の傾斜をもつが、これは住居の埋没過程で崩れた可能性が高い。**床　面**　基盤層を1.2m掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で整っている。住居の西側を後世の井戸が切る。**柱　穴**　壁内に主柱穴はなく、壁外にもこの住居に伴う柱穴の痕跡がない。**炉・竈**　壁に竈の痕跡がないことから炉付き住居と考えられるが、炉の痕跡を示す焼土は一切検出できない。重複する井戸に切られた可能性がある。**遺　物**　東壁際北側の床面に密着して土師器坏、南壁際中央部の床面に密着して土師器壺・甕、住居南東隅と南西隅の床面直上より土師器坏が出土し、これらが住居の年代を示す。**重　複**　住居の北西部で1号住居と、住居の西側で1号井戸とそれぞれ重複する。6住→1住の順を示す平面精査の所見、6住→1井戸の順を示す土層断面の所見を得た。
方　位　+128°　**面　積**　23.41m²





6号住居出土遺物

0　1：4　10cm

Ⅲ　古　墳

1号古墳

遺物観察表　73

位　置　この古墳は広瀬川低地帯と舌状台地の接点の、やや低地寄りから確認され、現在の国道50号線と県道藤岡・大胡線が交差する小島田交差点の前橋側に位置する。昭和10年に県下一斉調査された『上毛古墳綜覧』には記載されておらず、早い時期から削平されていたものと考えられる。確認されている周辺の古墳は全て舌状に伸びる台地上に分布しており、低地から発見された古墳は現在のところこの1基のみである。

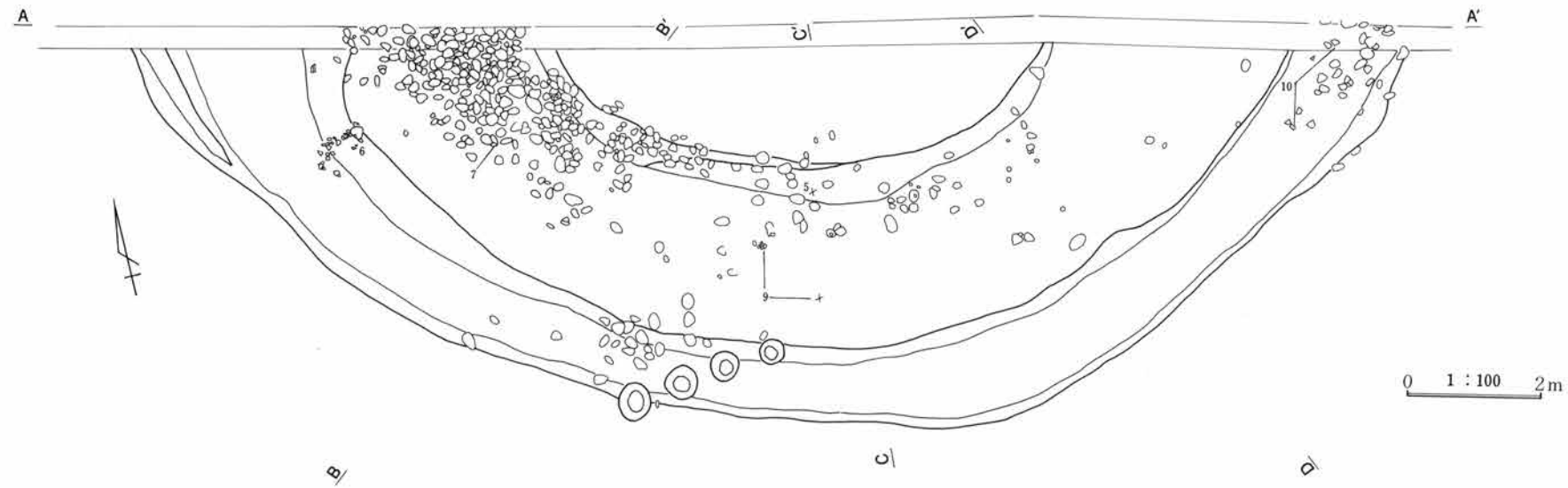
墳　丘　古墳の北半部は調査区域外で、調査は全体の1/3と周堀について行った。直径約8mの円墳と推定される。墳丘は、浅間C軽石層(As-C)と考えられる0.2～3㎜のパミスを含む黒褐色土の地山の上に造られているが、盛り土の部分は完全に削平されており、主体部も確認できなかった。墳丘の周囲は、幅2～3mの範囲を20～30cmの深さまで削って平坦な面を造りだしている。この平坦面に、墳丘から落下した葺石や埴輪が多く見られる。

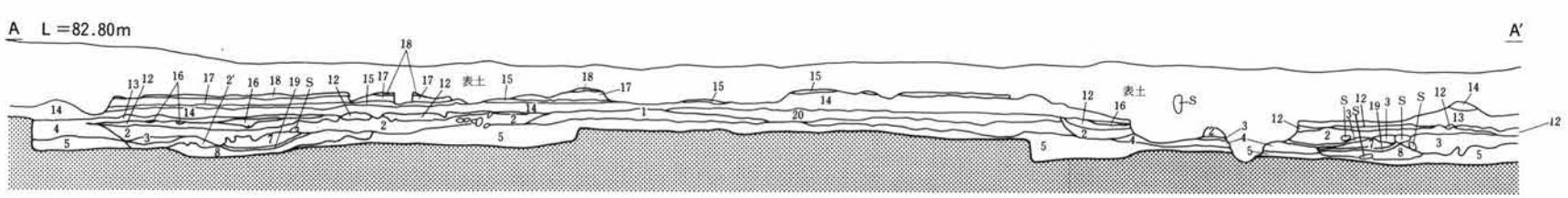
周　堀　幅1～1.5mで、深さは約20cmである。周堀の底面から10cmの位置に、約2cmの層厚で榛名山二ツ岳降下火山灰層(Hr-FA)の一次堆積が見られる。平坦面上の葺石や、埴輪の上にはHr-FAがないことから、古墳が築造された後にHr-FAが降下し、その後に古墳が削平されたことが確認できる。

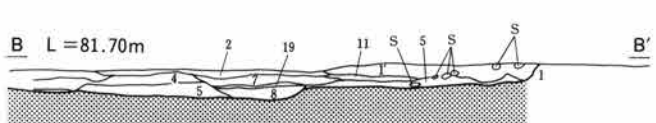
埴　輪　埴輪は古墳の周囲に小片となって散乱していたが、平坦面と周堀の境に接合可能なものが1個体のみ検出された（17頁－6)。口縁部と2条の突帯が残存しており、半円形の透かしが1対穿たれている。口径23cm、器高35cm前後の2条突帯の埴輪であったと推定される。

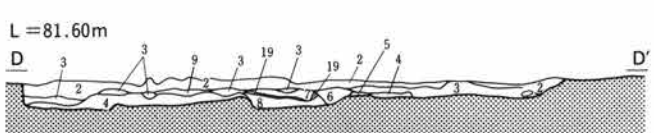
年　代　古墳の築造年代を示すものは埴輪と、Hr-FAである。埴輪は全体の仕上がりの丁寧さ、透かしの形などから判断して、5世紀後半から6世紀初頭でも早い時期のものであると思われる。一方、Hr-FAは6世紀第1四半期の降下とされており、築造直後にHr-FAが降下したと考えられることから両者に矛盾が認められない。したがって、この古墳は、5世紀後半から6世紀の第1四半期頃の築造と推定され、台地上で確認された豪族居館の可能性のある古墳時代の堀と近似した時期の築造であったと考えられる。

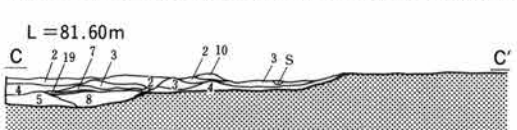
1号古墳出土遺物



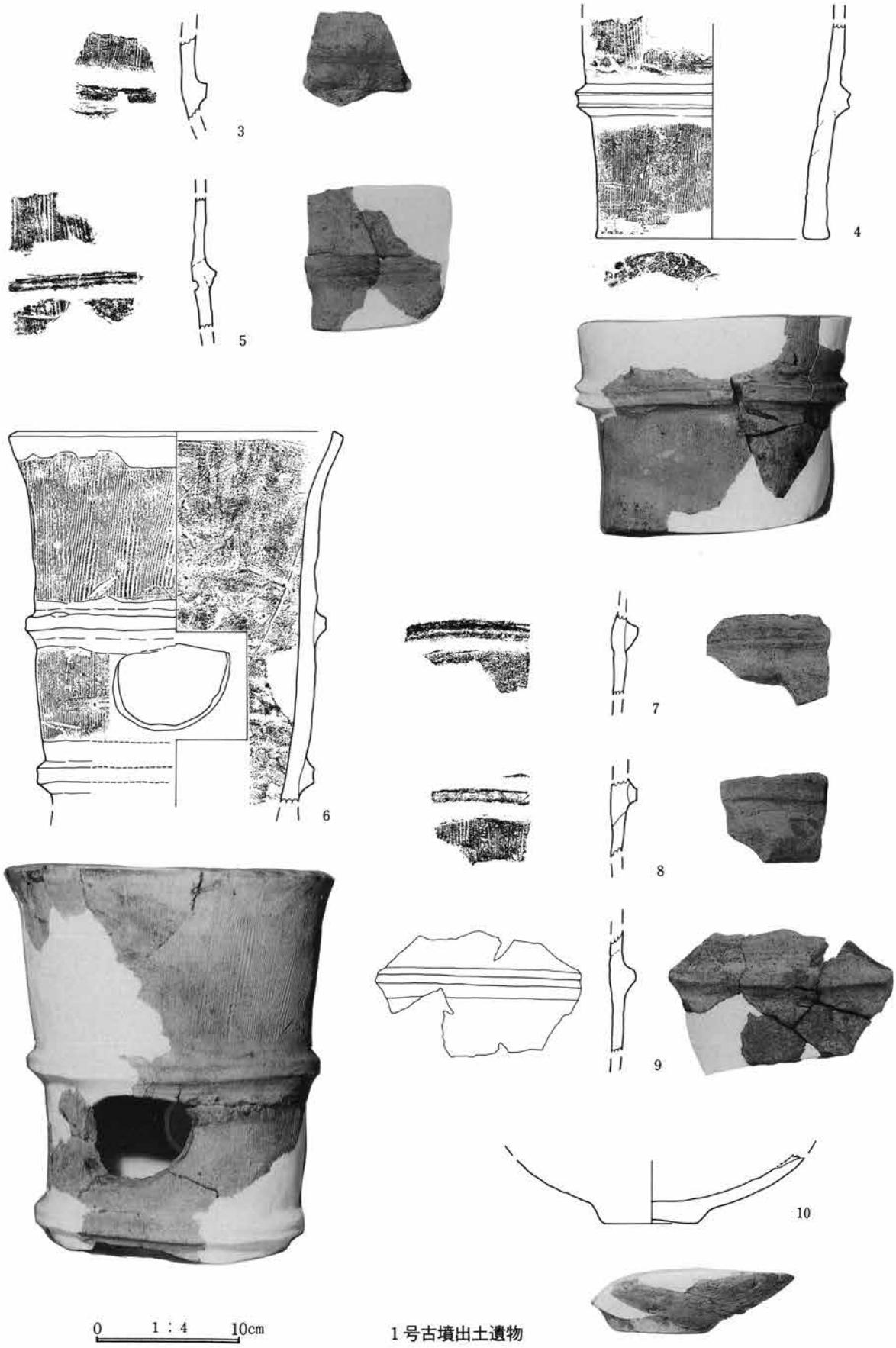






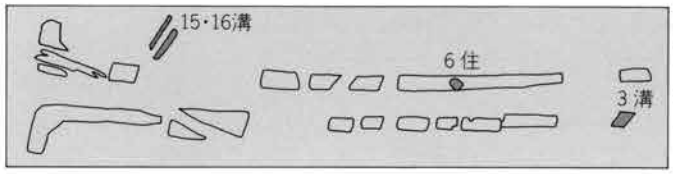


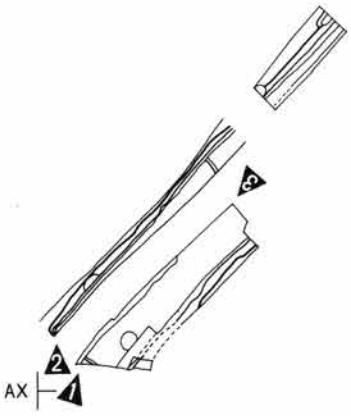
1　黒褐色土。φ0.2～3㎜の軽石粒含む。
1′　1の崩落土。
2　暗灰黄色土。
2′　暗灰黄色土。パミスを含む。
3　褐色砂。
4　暗灰黄色砂。φ0.1～1㎜の軽石粒含む。
5　黄褐色土（地山）。
6　暗灰黄色土。
7　褐色土。φ0.2～3㎜の軽石粒含む。
8　黒褐色土。φ0.2～3㎜の軽石粒含む。
9　暗灰黄色土。
10　暗灰黄色土。細かい白色砂含む。
11　暗灰黄色土。
12　暗灰黄色土。As-B。
13　黒褐色土。
14　黒褐色土。砂粒含む。
15　灰黄褐色土。黄橙色土粒含む。
16　暗褐色土。As-Bの灰。
17　黒褐色土。
18　灰黄褐色土。
19　黄橙色土。Hr-FA？含む。
20　黒褐色土。



1号古墳出土遺物

Ⅳ　方形区画遺構





1

AN

2

3

AD　60　50　40

古墳時代の方形区画遺構

立　地　この遺構は、広瀬川低地帯と貴船川低地に挟まれた台地上に位置し、現地盤の標高は84～86mである。北西から南東の方向にかけて半島状に伸びたこの台地は、先端部にゆくにしたがって幅が狭くなり、この遺跡の周辺では台地の南北幅が約180mほどである。

構　成　台地の先端部から150mほど西側の部分と、ここから約200mの地点に、それぞれ台地を横断する方向の2条の堀を確認した。この両者は、形状や軸線の傾きに強い共通性が認められることから同一遺構の可能性が高く、北辺と南辺は調査区域外のため確認できないが、堀によって一定の範囲を囲んだ方形区画遺構の一部と推定した。なお、西辺の堀の平面的な位置は、台地を横断する現代の市道の走向と完全に一致している。

形状・規模　西辺の堀は上端の幅８m、下端の幅6.5m、深さ1.5mで、軸線を真北から約45°東側に傾けている。調査区域の南端部で、東側にほぼ直角に折れ曲がる部分を確認した。この部分は方形区画遺構の南西隅に相当する可能性がある。発掘調査によって確認した堀の長さは約35mであるが、ハンドオーガーボーリングによる遺構確認調査の結果、この堀は台地を横断して南北160mの規模をもつ。堀の底面はほぼ平坦で、発掘調査及びハンドオーガーボーリング調査の結果から、堀の北端部と南端部に標高差が認められない。

東辺の堀は上端の幅7.6m、下端の幅3.6m、深さ2.5mで、西辺の堀と同様に軸線を真北から約45°東側に傾けている。発掘調査によって確認した長さは約10mであるが、ハンドオーガーボーリングによる遺構確認調査では、少なくとも約50mの長さに堀が存在することを確認した。この堀も底面はほぼ平坦であるが、中央部分に幅約70cm、深さ約25cmの小溝が掘削されている。この２条の堀が同一の遺構で、北辺と南辺にも堀があったものと仮定するならば、その全体の規模は南北160m、東西200mの方形区画となる。

遺　物　この遺構に共伴すると考えられる遺物は、西辺の底面に密着して出土した土師器坏２点（１・２）のみである。東辺より出土した須恵器甕（３）は覆土内からの出土であることと、西辺の土師器坏との間に年代差が認められることから、この遺構に伴うものではないと判定した。

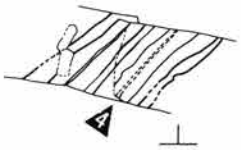
重　複　西辺の堀には、ほぼその走向に沿って後世の溝が重複している。重複する溝の年代は明かではないが、溝の中位に天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴う浅間Ｂ軽石層(As-B)の純層堆積がみられることから、この溝の掘削年代は平安時代以前である。また、浅間Ｂ軽石層より上位の覆土内には内耳土器が出土することから、この溝の埋没が完了したのは中世以後であると考えられる。

したがって、西辺の堀はその埋没過程で平安時代以前の溝が掘られ、この溝が埋没を完了した後に道路になっており、結果的に古墳時代の堀の走向が現代まで踏襲されていることになる。

火山灰　西辺の堀の底面上10cmの位置と東辺の堀の底面上30cmの位置に、榛名山二ツ岳降下火山灰層(Hr-FA)が一次堆積している。

内部施設　この遺構に伴う可能性があるのは、６号住居である。この住居は共伴する土器の年代がこの堀の年代に近く、軸線の傾きも近似している。しかし、この住居を除いてこの方形区画遺構に伴う可能性のある遺構は一切検出できない。

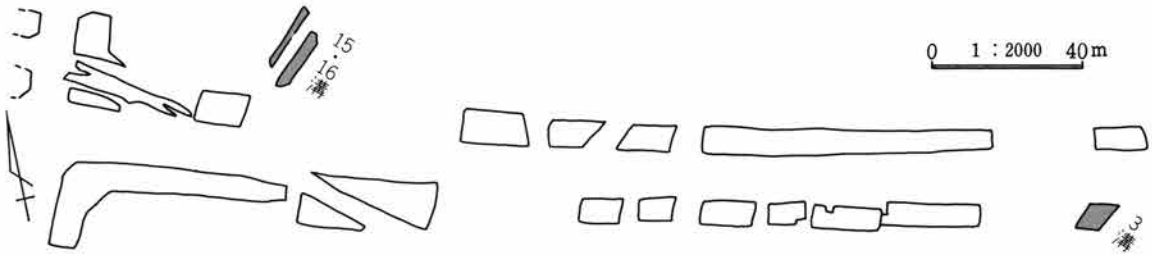
4



30　　20　　10

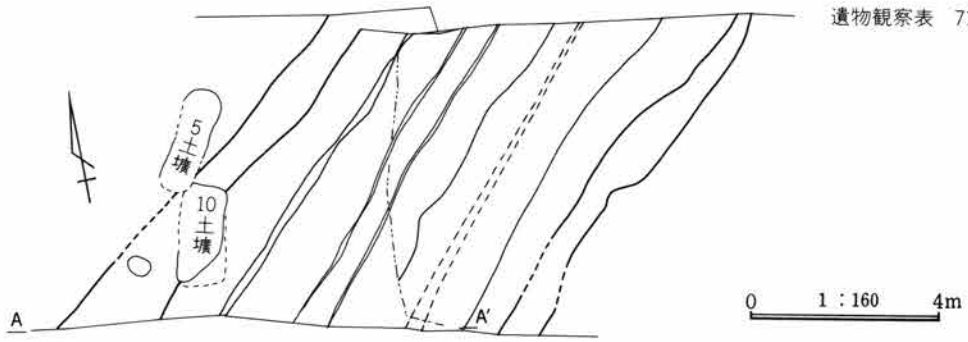
0　1：600　12m

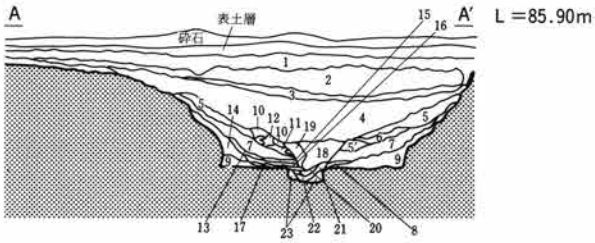
図1　笂井八日市遺跡方形区画遺構推定図

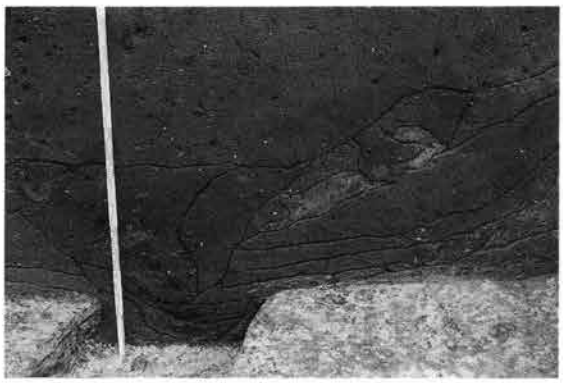


3 号 溝

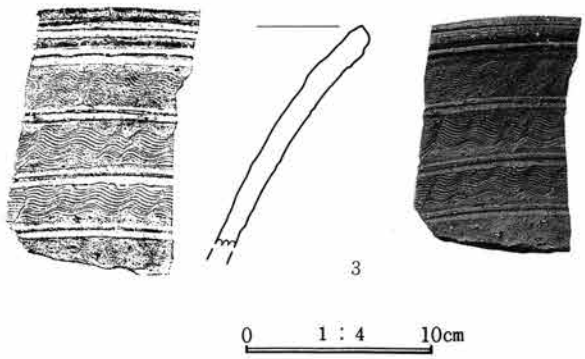
遺物観察表 71



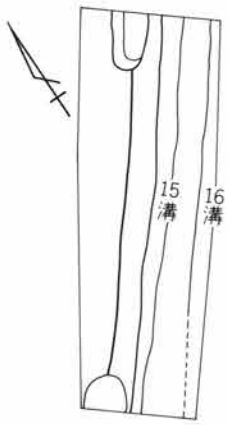


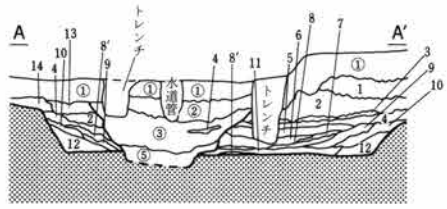


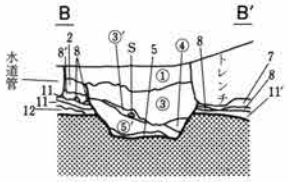
1 現耕作土。
2 暗褐色土。多量のAs-B含む。
3 As-B。
4 黒褐色土。小円礫含む。
5 暗茶褐色土。暗褐色土と茶褐色砂質土の混土層。
5′ 5より礫の混入が少量。
6 暗茶褐色土。5より暗い色調。
7 暗茶褐色土。多量の黒褐色土含む。
8 暗褐色土。
9 茶褐色土。地山の茶褐色土と小礫からなる。
10 暗褐色土。
11 Hr-FA。降下後攪乱を受けている。
12 黒褐色土。
13 暗茶褐色土。茶褐色砂質土混入。
14 茶褐色土。崩落した地山の黄褐色土。
15 暗灰褐色土。黄色の軽石粒含む。
16 暗灰褐色土。15より黒い色調。
17 暗灰褐色土。乳白色土ブロック含む。
18 黒褐色土。茶褐色土ブロック含む。
19 黒褐色土。18より灰色味を帯びる。
20 黒褐色土。
21 暗褐色土。砂質。
22 黒褐色土。
23 暗灰褐色土。黒褐色土、乳白色土ブロック含む。



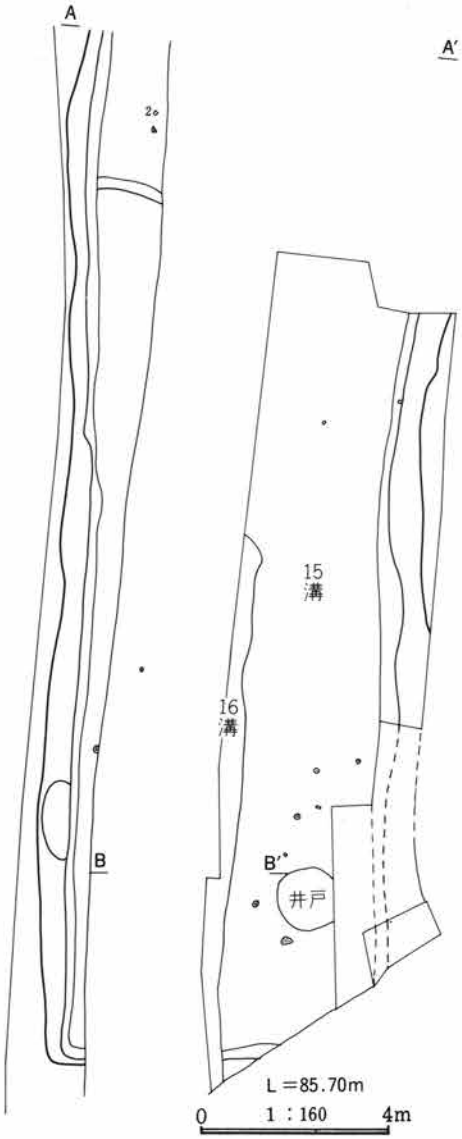
15・16号溝

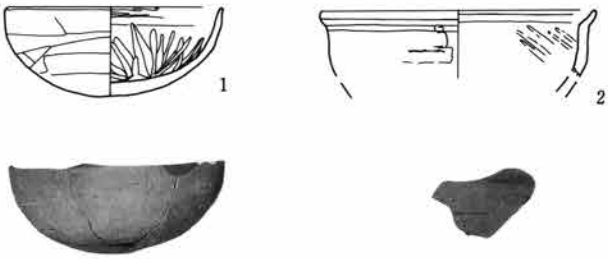






1 黒色土。細礫含む。
2 黒褐色土。
3 黒褐色土。灰白色粗粒砂ブロック含む。
4 黒色土。多量の細礫含む。
5 黒褐色土。多量の細礫含む。
6 黒色土。
7 黒褐色土。細礫含む。
8 黄褐色土。Hr-FA。
8′ 黒褐色土。Hr-FAの純層ブロックを含む層。
9 黒褐色土。細礫含む。
10 暗褐色土。褐色砂含む。
11 黒褐色土。
12 暗褐色砂。
13 黒褐色土。細礫含む。
14 黒褐色土。多量の細礫、褐色砂含む。
① 現表土。
② 黒褐色土。
③ 黒褐色土。
③′ 黒褐色土。
④ 黒褐色土。褐色砂が集中。
⑤ 黒褐色土。小礫、シルトブロック含む。
⑤′ 黒褐色土。





15号溝出土遺物

0 1：4 10cm

V　水　田

遺物観察表　74

概　要　笂井八日市遺跡では、天仁元(1108)年に降下した浅間B軽石層(以下As-B)の直下より水田が検出されている(以下As-B水田)。当遺跡におけるAs-Bの堆積は1cm前後と薄く、遺構の残存状態は後世の耕作の影響を受けて、あまり良好とは言えない。また、道路の拡幅に伴う東西方向の幅の狭い調査区域であるために、遺構の東西方向の広がりはある程度把握することができたが、面的な広がりは把握できなかった。

検出された畦は、上層の圧力による偏平化が進み、高さが0.5～1cmと、非常に判別しにくい状況であった。As-B水田は調査区域に一部かかっているものを含めて228枚が確認されている。多くは調査区外にはみ出しており、全体像がわかり面積を測定できるのはそのうち37枚に過ぎない。

As-B水田は、桃の木川の左岸で小島田交差点付近の西に広がる低地に展開している。この低地は、桃の木川と荒砥川に挟まれ、旧利根川沿いに広がる広大な低湿地と、赤城山の裾の複雑な谷地形が交差する部分に存在し、現在の小島田町の集落が立地する台地からは、西に向かってその全貌を見下ろすことができる。

水田面の標高は、最高点が82.95m、最低点が81.15mで、比高差は1.8mである。北西から南東に向かって緩やかに傾斜しながら広がっている。

耕作土の状況　遺跡の周辺は、台地部分を除いて現在も水田地帯となっている。基本土層をみると、表土以下に現在の耕作土層が見られる。As-Bの一次堆積層は、現地表面より40～60cm下に存在し、1～5cmの厚さで断続的に堆積している。As-Bより下層には、As-B下水田の耕作土が5～20cmの厚さでみられ、その下位には榛名山二ツ岳降下軽石(Hr-FP)、浅間C軽石(As-C)を一部に含むややシルト質の褐色土、さらに灰黄褐色土のシルトが続いている。Hr-FP下、榛名山二ツ岳降下火山灰層(Hr-FA)下、As-C下の水田は確認できなかった。

畦の走行と区画　畦は、クロ的な小畦と作業道を兼ねる大畦に分類される。大畦沿いには、水路と考えられる溝が確認されている(33・34・35・36・37号溝)。畦の規模は、大畦と考えられる部分で幅50～80cm、小畦の部分で幅30～50cm、高さは0.5～1cmである。畦の方向は、水路と考えられる溝で区切られた区画で変化をみせる。

33号溝より西(A区画)では、33号溝沿いの大畦である水田番号71の東の畦は溝に沿って北東から南西方向に伸び、小畦はそれにほぼ平行・直交するように展開している(付図4参照)。

33号溝と34号溝に囲まれた部分(B区画)では、畦は概ね東西・南北方向に展開している。大畦である33号溝沿いの畦は、北西から南東に伸びる溝に沿っており、同じく大畦である34号溝沿いの畦も、33号溝沿いの畦と直交するように北東から南西に伸びている。すなわちB区画では、2本の溝と大畦によって作り出された、方形の区画の中に水田が配置されている。

34号溝と35号溝に囲まれた部分(C区画)でも、B区画と同様に小畦はほぼ東西・南北方向に展開している。しかし北東から南西に向かって伸びる34号溝沿いの大畦とそのすぐ東の小畦は、溝に平行・直交して展開している。このA区画からC区画までは、畦と溝の関係を比較的良好にとらえることができる。

ほぼ北から南に向かって伸びる35号溝と36号溝に囲まれた部分(D区画)では、畦を良好に検出することができなかった。調査区北半では、小畦はほぼ溝に沿うように展開している(付図4・5参照)。

36号溝と37号溝に囲まれた部分(E区画)では、36号溝がほぼ南北方向に伸びているのに対し、37号溝は北西から南東に伸びているため、36号溝沿いの畦の走行と37号溝沿いの畦の走行に若干の食い違いを見せている。従って、E区画の水田は東西に連続したものではなく、調査区の北半で水田が検出できなかった部分(B

Q－131グリッド周辺)で一旦途切れているものと推定される。

37号溝より東の部分(F区画)は、水田の検出が、特に調査区の南半において困難になる。畦はほぼ東西・南北方向に展開するようである。

小島田交差点のすぐ西側では、水田は全く見られない。ここは微高地となっており、1号墳が存在する。小島田交差点の東側（G区画）では、台地に沿うように、東西方向の軸をやや南に向けながら展開している（付図6参照)。このG区画より東からは水田は検出されていない。

水田の形と規模　水田の形は長方形を基本とし、地形や水路との兼合いで、一部に方形、三角形、台形などがみられる。全体の大きさが確認できた37枚についてその規模をみると、長軸・短軸の長さで最大のものは№233の12.0m×3.2mであるが、平面形が三角形であり一般的な形とは言えないので、検出状態があまり良くない№61・№227と共に考察から除外することとする。これらを除いた内で最大のものは№46の7.0m×3.4mで最小のものは№103の2.0m×1.9mである。平均すると長軸3.9m、短軸2.6mである。先に面積を述べた№233が30.2m²で最大であるが、これを除外すると№102の23.8m²が最大であり、次いで№78の23.0m²が広い。最小のものは№144の3.2m²である。平均すると9.95m²になる。

長軸の方向に注目してみると、A区画では北東・南西方向に、B区画では南北方向に、C区画北半では南北方向と東西方向が混在し、南半では東西方向に、D区画では東西方向に、E区画では北東・南西方向に、F区画では南北方向に、G区画では北西から南東方向にそれぞれ長軸を持つ。

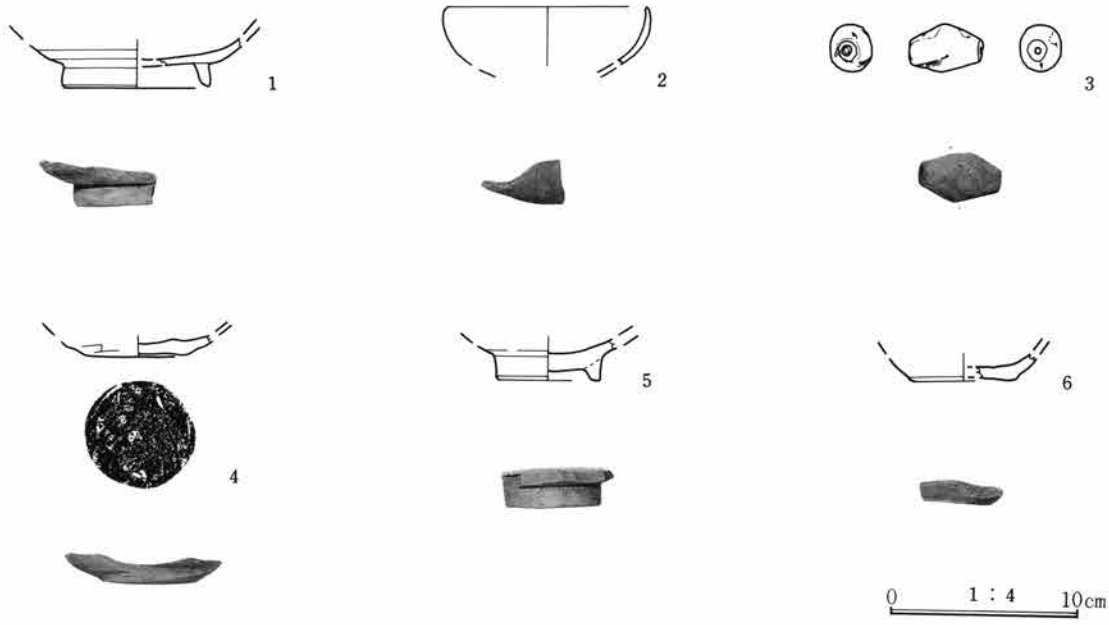
取排水の方法　笂井八日市遺跡では、顕著な水口は検出できなかった。他の遺跡の例を見ると、同道遺跡I期水田(As-C直下)では、長軸を等高線に沿わせて配置し、水口は長軸上に存在する[(1)]。しかし、III期(Hr-FP直下)になると長軸は等高線と直交あるいはやや角度を持って交差し、水口は短軸上に存在する。またIV期(As-B直下)になると、長軸は再び等高線と沿うようになり、水口は長軸上の隅に存在する。笂井八日市遺跡の水田も、等高線と溝、水田の配置からすれば、おそらく水田の北方に水源があり、北から南へ水を引いて、基本的には短軸上から取水して、長軸の方向に水を流していったものと推定されるが、C区画では、水田の方向が不規則の部分があり、長軸、短軸の両方から取水・排水が行われていたものと考えられる。

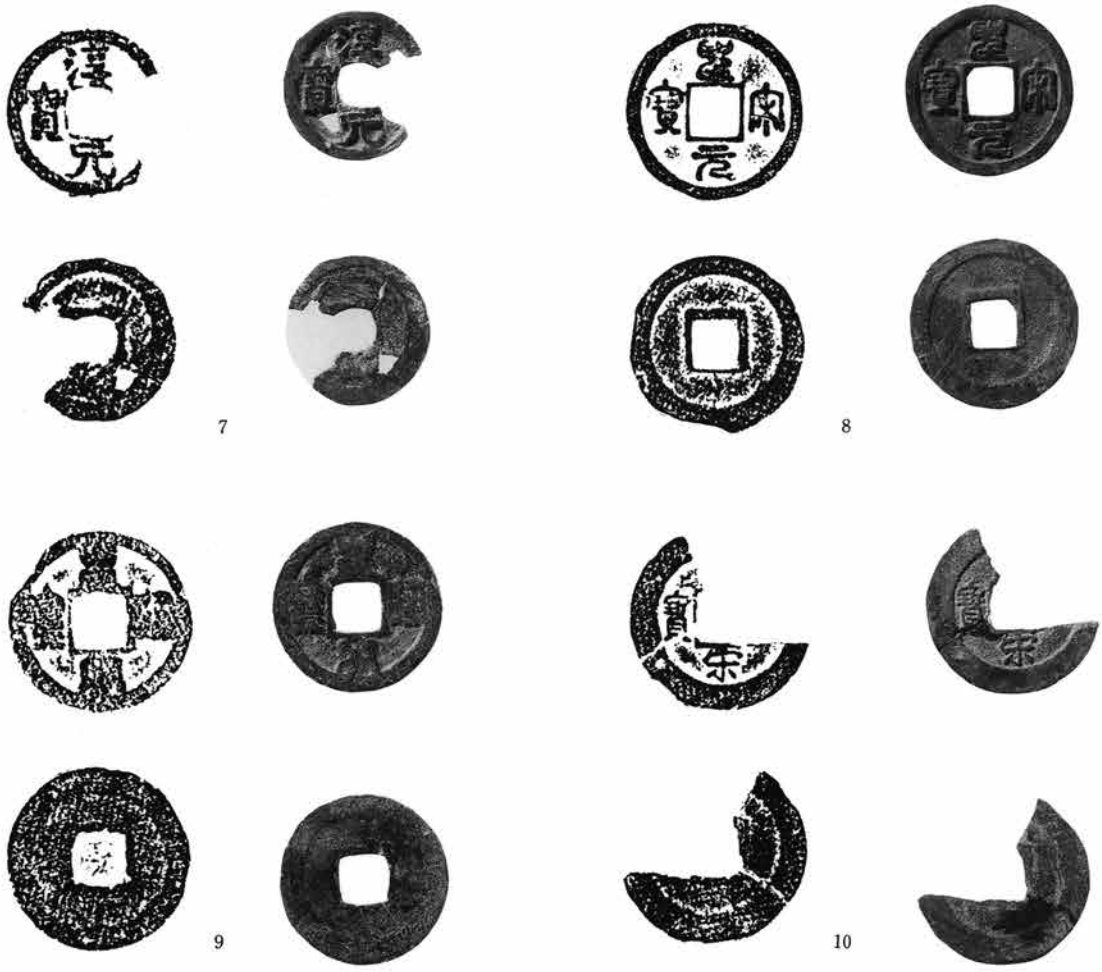
出土遺物　水田面からの出土遺物はごく僅かで、土器が4点、土製品(土錘)が1点、貨幣4枚が出土するのみである。5は江戸時代の瀬戸・美濃産の陶器であり、明らかに後世の混入であるためここでは扱わない。1は灰釉陶器の椀で、高台部分のみの出土である。As-B直下から出土し、美濃における灰釉陶器編年の虎渓山1号窯式に比定することができる。4は須恵器の坏で、水田の耕作土から出土している。摩滅が著しいため細部の技法を観察することはできないが、底部は回転糸切り未調整である。6は須恵器の坏で、底部は回転糸切り未調整である。3は土錘で、水田面から出土した。古銭は水田面及び耕作土から4枚が出土している。8は年代的にAs-Bの降下時期よりも新しく、上位の層からの混入であると考えられる。

植物珪酸体分析　プラント・オパール分析の結果、この水田での稲作の可能性は高いという結果が出ている。なお、As-C直下とHr-FA直下の水田は検出できなかったが、A地点(付図1)とB地点の同分析では、As-C直下では稲作の可能性がなく、Hr-FAの直下では稲作の可能性があり、Hr-FAの直上では稲作の可能性が高いという結果を得ている。

注

(1) 石坂　茂　『同道遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983

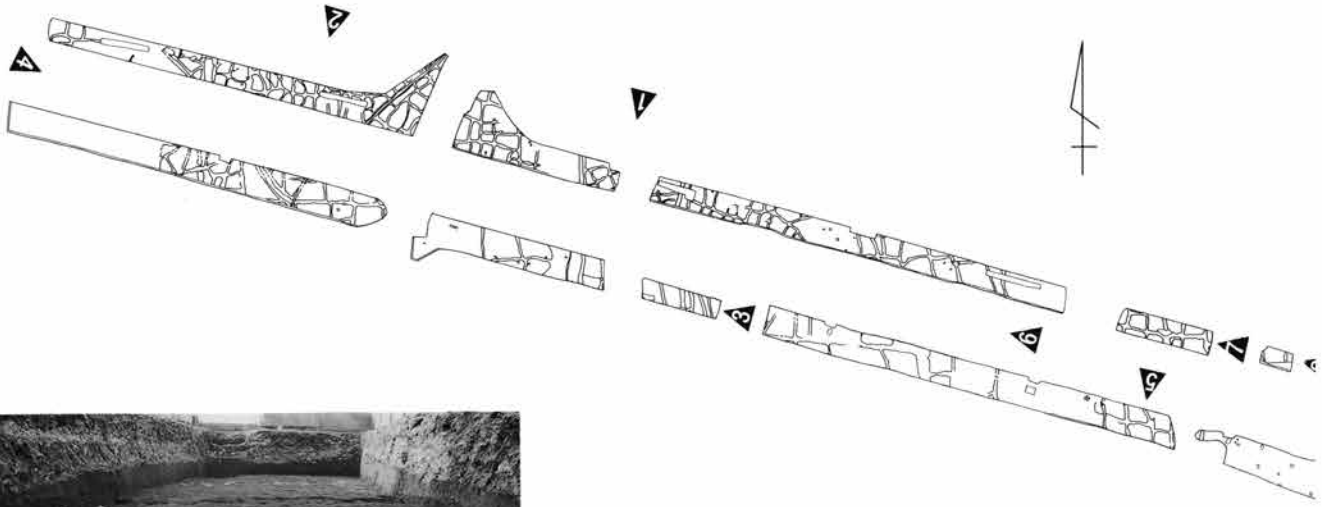




水田出土遺物

1

2



0 1 : 1600 40m

3

4

5

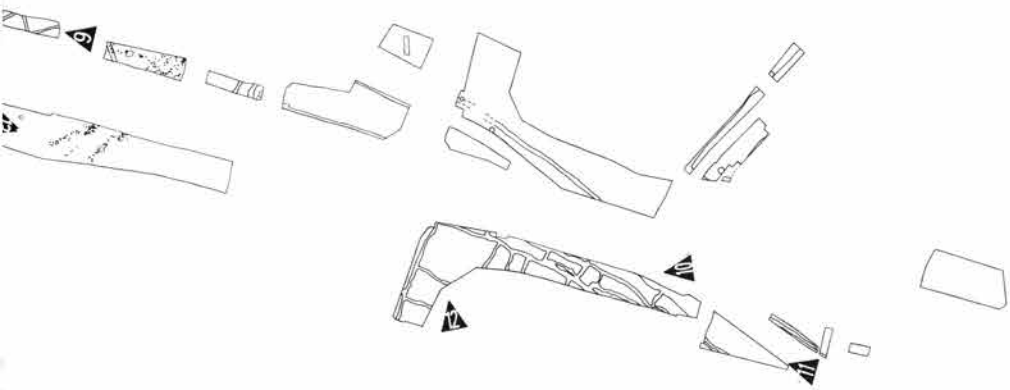
7

8

10

9

11



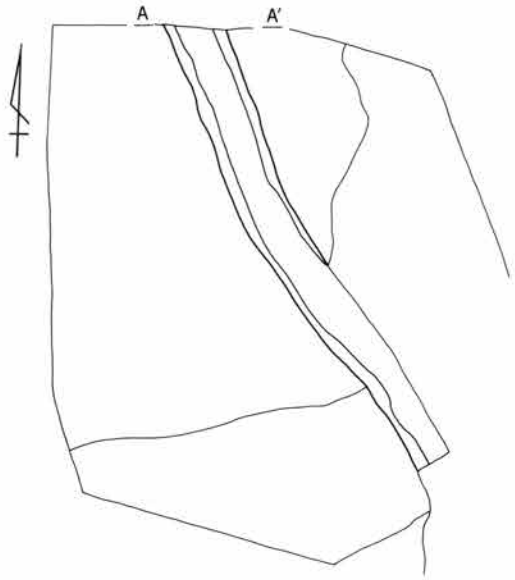
6

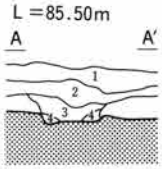
13

12

Ⅵ　その他の遺構

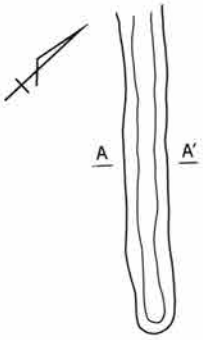
1 号 溝

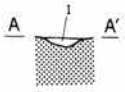




1　暗褐色土。客土か。
2　暗褐色土。1より黒味が強い。
3　暗褐色土。小礫混入。
4　暗褐色土。地山の黄茶色砂粒含む。

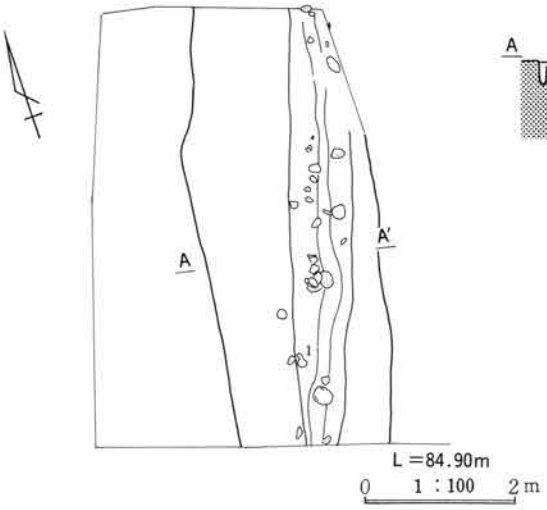
2 号 溝

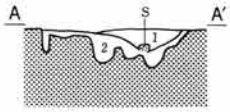




1　暗灰褐色土。

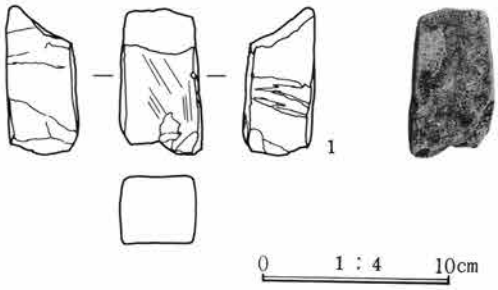
4 号 溝



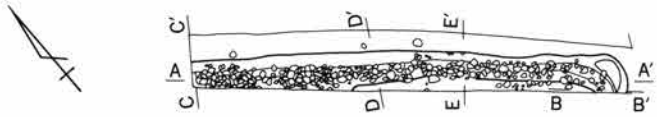


遺物観察表　75

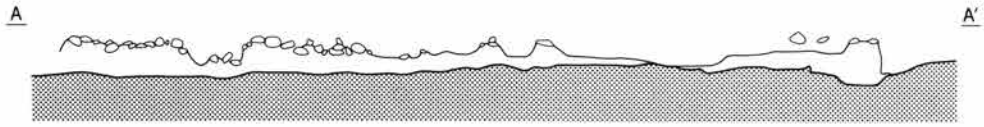
1　黒褐色土。5㎜未満の礫含む。
2　黒褐色土。10㎜未満の礫含む。

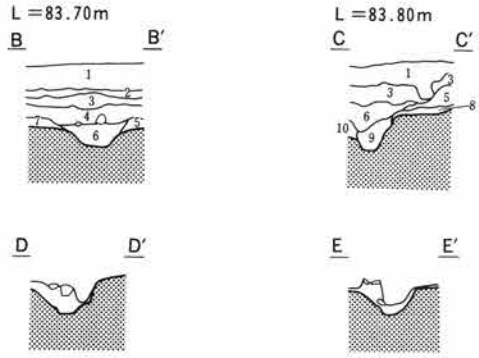


5 号 溝



0　1：200　4m

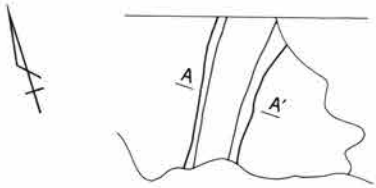


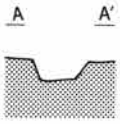


1　暗褐色砂質土。
2　灰褐色砂質土。5～10㎜の円礫含む。
3　黒褐色土。灰褐色砂質土ブロック含む。
4　茶褐色砂質土。2～5㎜の円礫、白色軽石粒含む。
5　黄褐色砂質土。
6　暗褐色土。黄褐色砂含む。
7　黒褐色土。茶褐色砂質土ブロック含む。
8　黄褐色土。
9　灰褐色土。褐色土粒、黄色土粒含む。
10　灰褐色粘土。

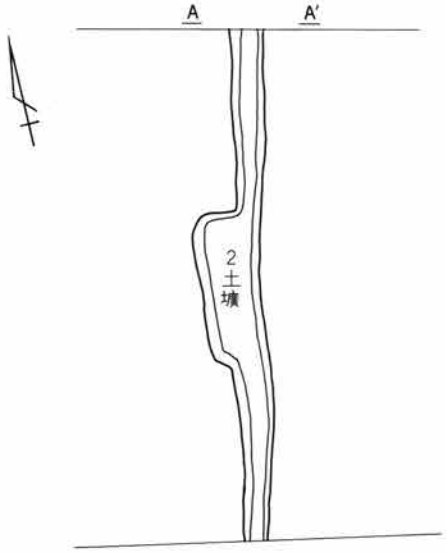
L＝83.20m
0　1：100　2m

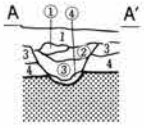
6 号 溝





12 号 溝

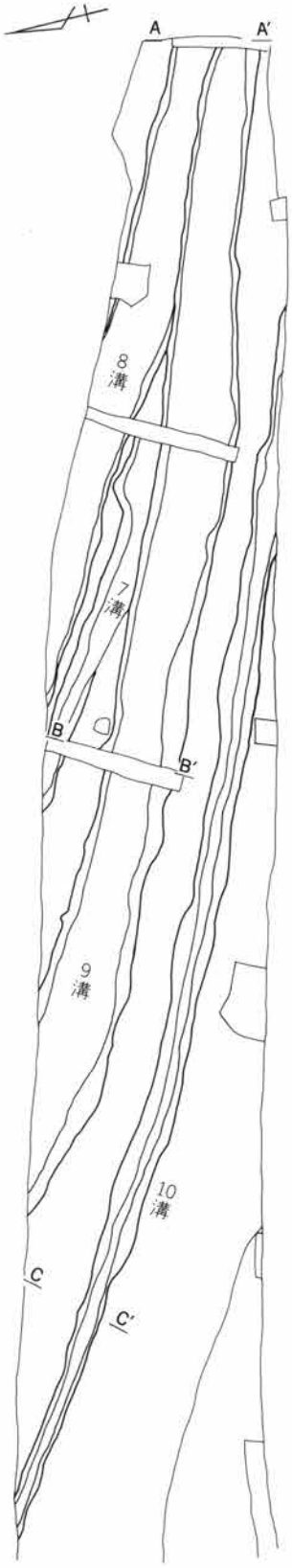


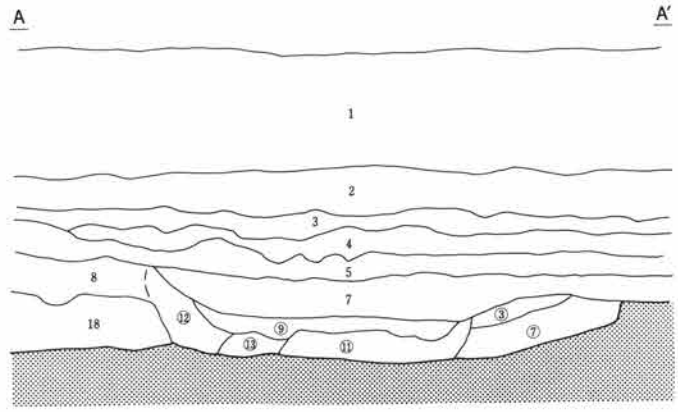


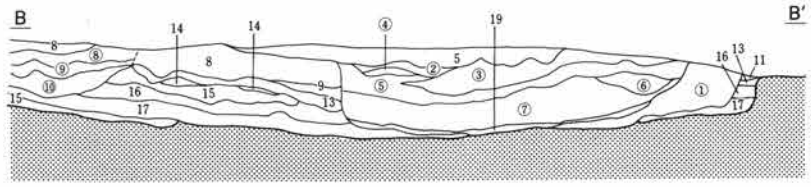
1　盛土。
2　黒褐色砂質土。細礫含む。
3　褐色砂質土。細礫含む。
4　暗褐色土。褐色土粒、黒褐色土粒含む。
①　暗褐色砂質土。
②　暗褐色土。黒褐色土粒、白色軽石粒含む。
③　暗褐色土。多量の黒褐色土粒含む。
④　暗褐色土。黒褐色土粒含む。

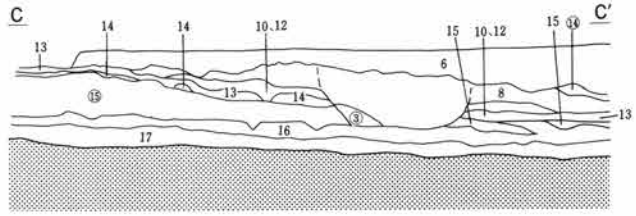
0　1：100　2m

7～10号溝









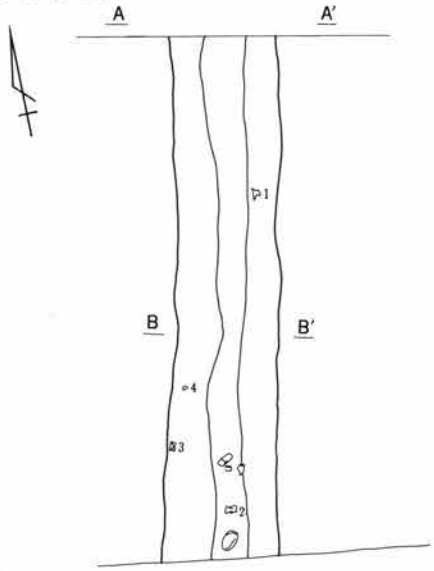
1　現耕作土。
2　黒褐色土。細礫、白色軽石粒含む。
3　暗褐色土。
4　暗褐色土。小礫含む。
5　暗褐色土。小礫、ローム粒、白色軽石粒含む。
6　暗褐色土。白色軽石粒含む。
7　暗褐色土。礫、砂のブロックを多く含む。
8　暗褐色土。小礫、白色軽石粒（Hr-FP）含む。
9　黒色土。褐色砂ブロック含む。
10　黒色土。粘性。粒子細かい。均質。
11　黒色土。
12　にぶい黄褐色土。中粒～細粒砂。
13　にぶい黄褐色土。火山灰層。細～中粒白色軽石粒含む。
14　黒褐色中粒砂。
15　灰褐色シルト。洪水の堆積物 or 有馬火山灰。
16　10層と同じ。
17　暗褐色軽石層。
18　黒褐色シルト。
19　灰褐色土。極細粒火山灰層。

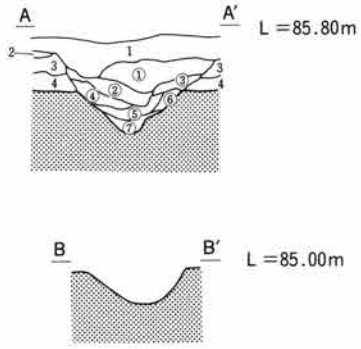
①　黒色土。Hr-FAのブロック含む。
②　褐灰色シルト。黄褐色シルトのラミナ明瞭。
③　黄褐色砂。中～粗砂粒。
④　黄褐色砂。細砂粒。
⑤　黒色土。
⑥　褐灰色砂。粗砂粒。ラミナ明瞭。
⑦　黄褐色砂。褐灰色シルトとのクロスラミナ明瞭。
⑧　黒褐色土。
⑨　黒褐色土。粘性。均質。
⑩　黒褐色土。やや砂質。Hr-FA、砂のブロック含む。
⑪　褐色粗砂。褐灰色シルトのラミナあり。
⑫　8層と同じ。
⑬　8層と同じ。
⑭　中粒砂。
⑮　中～粗粒砂。

L＝81.10m　0　1：40　1m

11号溝

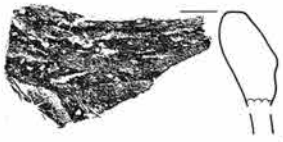
遺物観察表 75

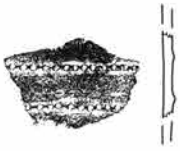


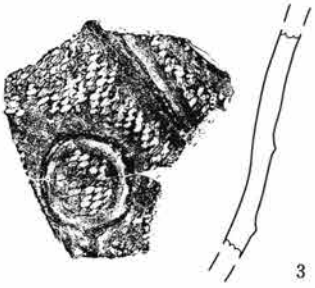


0　1：100　2m

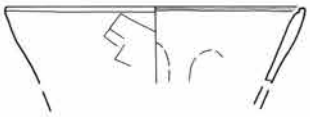
1　現耕作土。
2　黒褐色土。小礫含む。
3　灰黄褐色土。硬く締まる。
4　黒褐色土。硬く締まり、細礫含む。
①　暗褐色土。褐色土粒、白色軽石粒含む。
②　黒褐色土。暗褐色土粒含む。
③　黒褐色土。白色軽石粒、多量の暗褐色土粒含む。
④　暗褐色土。黒褐色土粒含む。
⑤　黒褐色土。暗褐色土粒含む。
⑥　黒褐色土。③と同じ。
⑦　黒褐色砂質土。小礫含む。


1


2


3

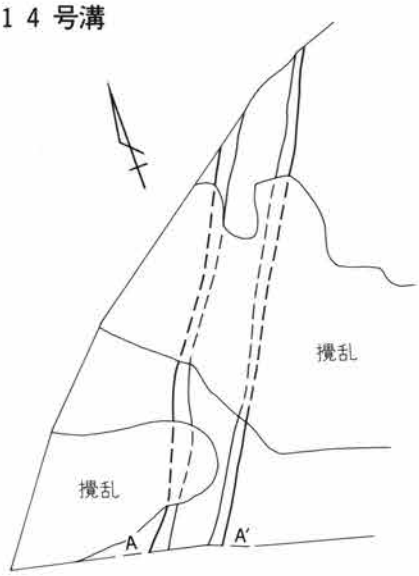
4

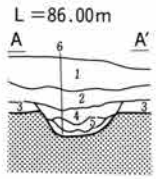

5

6

0　1：4　10cm

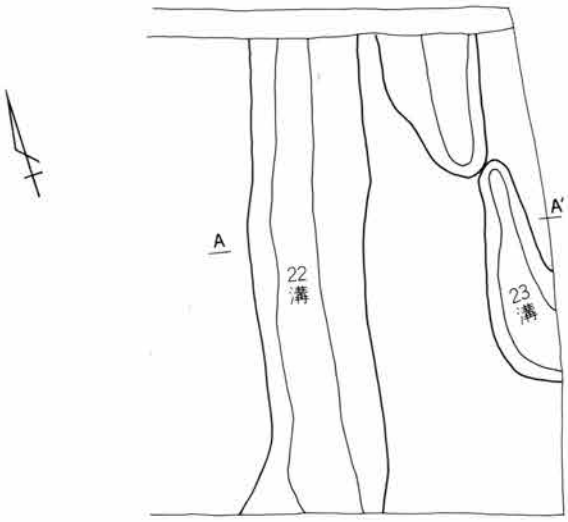
14号溝

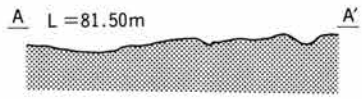




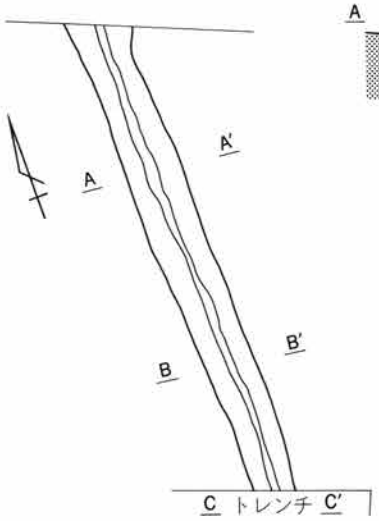
1　盛土。
2　暗褐色土。白色軽石粒含む。
3　暗褐色土。
4　黒褐色土。
5　黒褐色土。地山の砂質ロームブロック含む。
6　暗褐色土。地山の砂質ロームブロックを多量に含む。

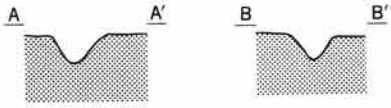
22・23号溝



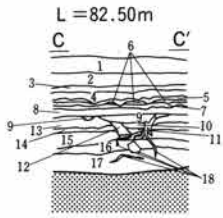


24号溝





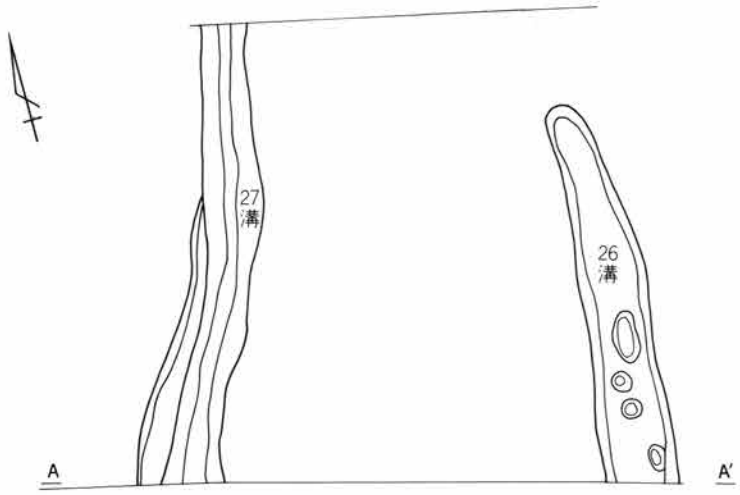
L＝81.70m

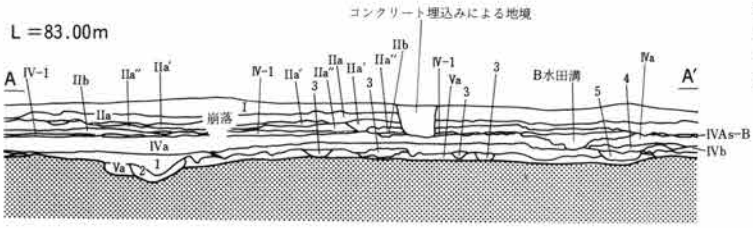


0　1：100　2m

1　暗褐色土。現耕作土。
2　黒褐色土。As-C粒含む。
3　黒褐色土。褐色土ブロック含む。
4　暗褐色土。As-C粒含む。
5　黒褐色土。As-Bに伴う火山灰含む。
6　褐灰色砂。As-B。
7　黒褐色土。As-C粒含む。
8　暗褐色土。As-C粒、FP粒含む。
9　黒色土。As-C粒含む。
10　黒褐色土。As-C粒含む。
11　暗褐色土。As-C粒含む。
12　暗褐色土。黄橙色土ブロック含む。
13　黄橙色土。　16　黄褐色土。
14　黄褐色土。　17　黄橙色土。
15　暗褐色土。　18　黄褐色土。噴砂。

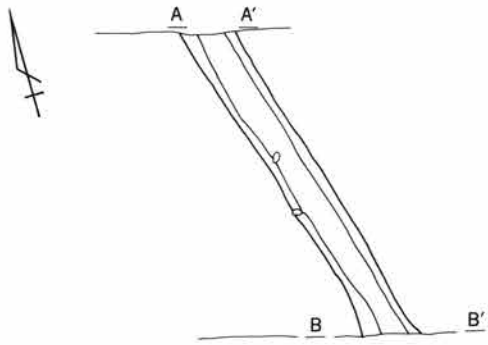
26・27号溝

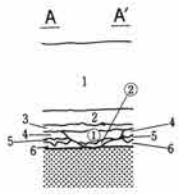


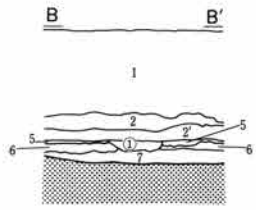


Ⅰ　現耕作土。
Ⅱa　暗褐色土。
Ⅱa′　暗褐色土。Ⅱaより灰色味を帯びる。
Ⅱa″　暗灰褐色土。Ⅱaに類似し、灰色砂質土含む。
Ⅳ-1　As-B下水田面の鉄分沈殿層。
1　暗褐色土。As-C含む。
2　暗褐色土。
3　暗褐色土。
4　暗褐色土。As-C含む。
5　暗褐色土。

30号溝





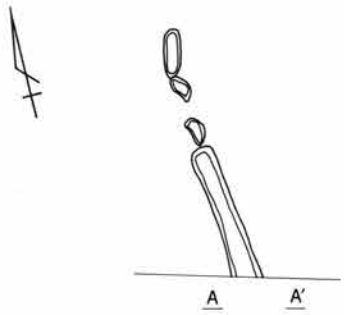


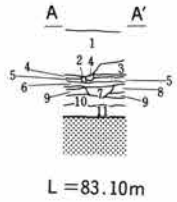
1　盛土。
2　暗黄褐色土。小礫、褐色土粒含む。
2′　暗黄褐色土。2より多量の褐色土粒含む。
3　暗黄褐色土。やや砂質。
4　黒褐色土。As-Bを含むため、やや砂質。
5　黒褐色土。多量のAs-B含む。
6　暗褐色土。Hr-FPと思われる白色軽石粒含む。
7　暗褐色土。

①　黒褐色土。As-B混じり。
②　黒褐色土。やや砂質。

L＝83.70m
0　1：100　2m

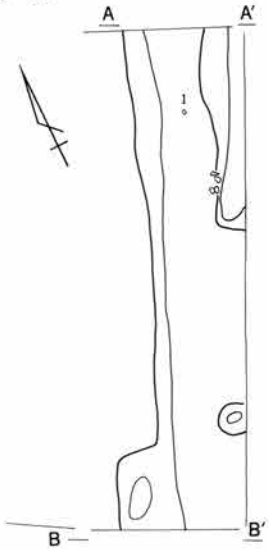
31号溝

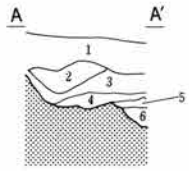


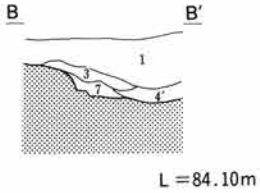


1　暗褐色土。現耕作土。
2　青灰色土。客土か。
3　黒褐色土。白色軽石粒含む。
4　暗褐色土。As-B主体。
5　褐色土。白色軽石粒、ＦＰ粒含む。
6　褐色土。
7　暗褐色土。As-Bを全く含まない。
8　暗褐色土。
9　黒色土。多量のAs-C含む。
10　黄褐色土。
11　黄褐色土。

32号溝

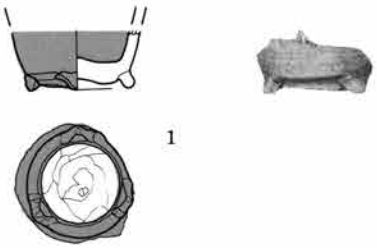






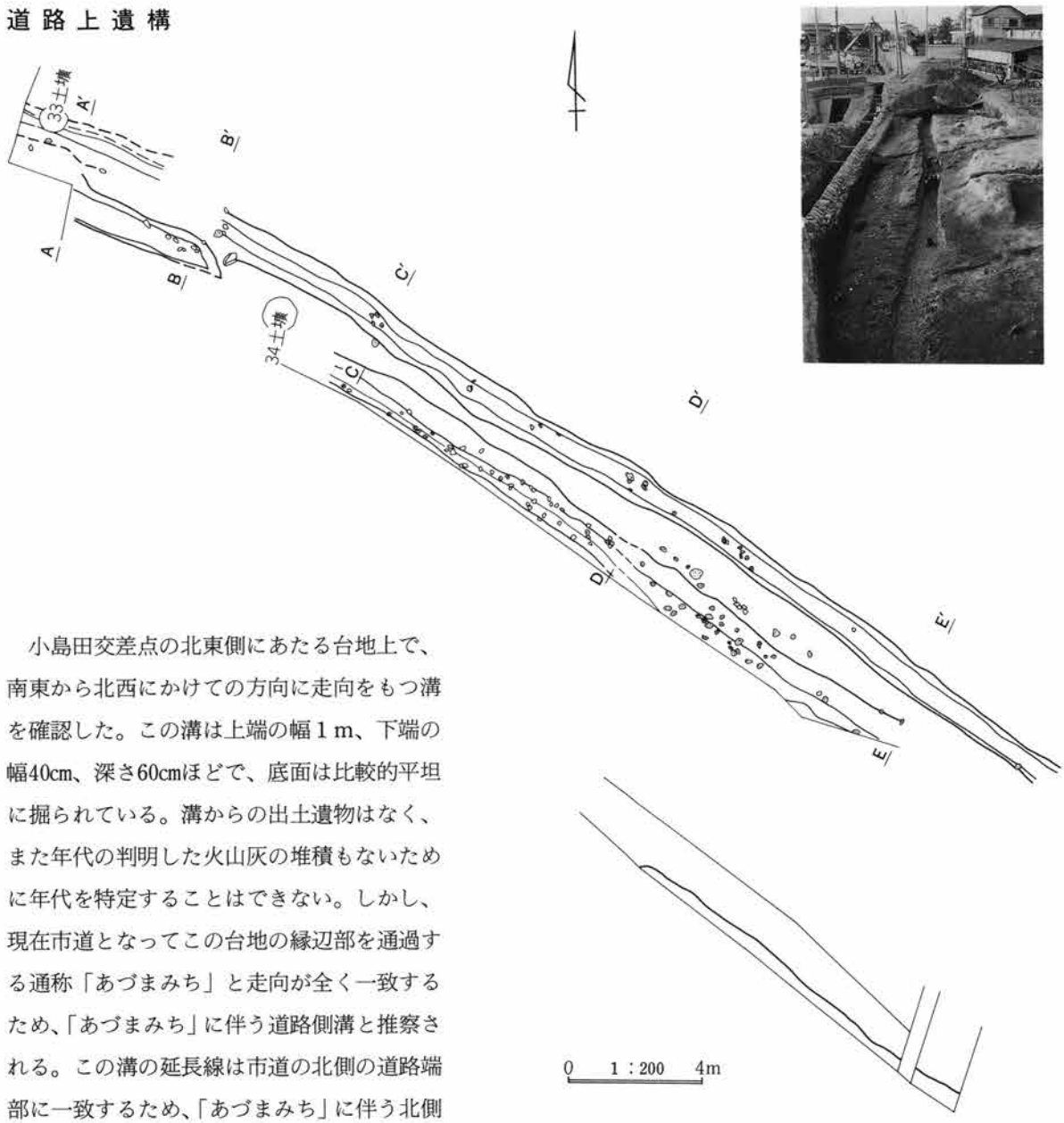
1　黒褐色土。現表土。
2　褐色砂。黒褐色土ブロック含む。
3　黒褐色土。小礫含む。
4　灰黄褐色土。シルト、砂ブロック含む。
4′　灰黄褐色土。シルト、砂ブロック含まない。
5　黒褐色土。シルトブロック含む。
6　黒褐色土。シルト粒含む。
7　灰黄褐色土。

0　1：100　2m

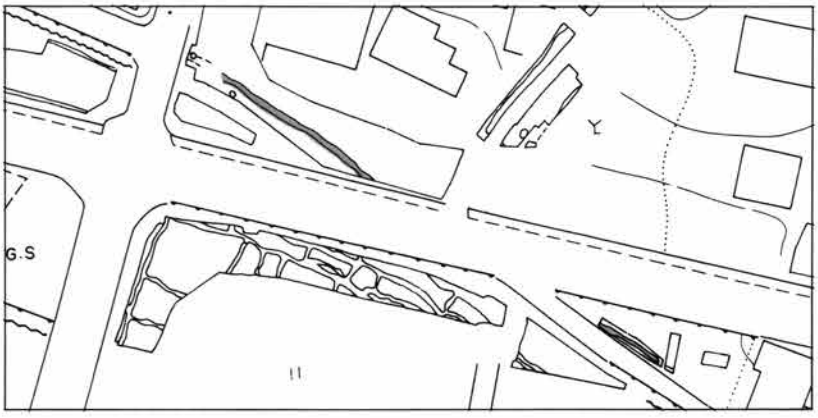


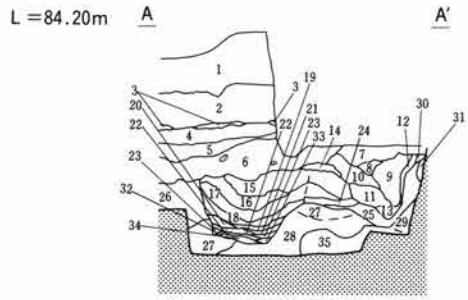
0　1：4　10cm

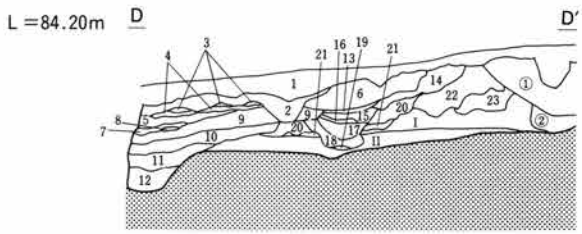
道路上遺構

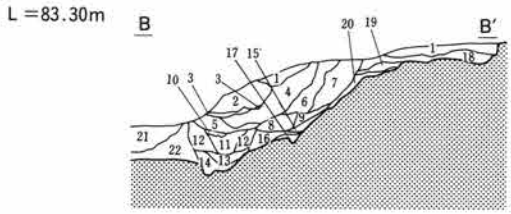


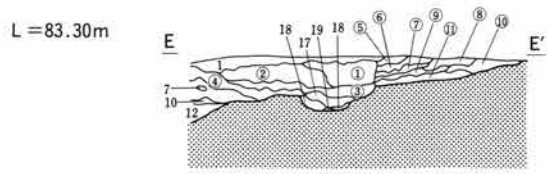
小島田交差点の北東側にあたる台地上で、南東から北西にかけての方向に走向をもつ溝を確認した。この溝は上端の幅1m、下端の幅40cm、深さ60cmほどで、底面は比較的平坦に掘られている。溝からの出土遺物はなく、また年代の判明した火山灰の堆積もないために年代を特定することはできない。しかし、現在市道となってこの台地の縁辺部を通過する通称「あづまみち」と走向が全く一致するため、「あづまみち」に伴う道路側溝と推察される。この溝の延長線は市道の北側の道路端部に一致するため、「あづまみち」に伴う北側の側溝の可能性がある。道路の南側の側溝は確認できないが、この区域の台地は南側から削られているため、当初から存在したか否かの確認ができない。なお、この溝の上位には溝に平行する走向を示す合計4面の硬化した面が検出されたことから、この道は近代まで機能していたと考えられる。

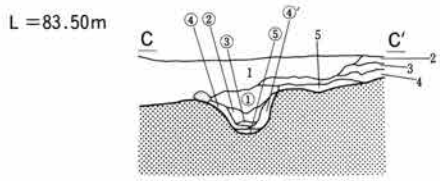












0　1 : 100　2 m

◀　道路側溝（手前の溝）の延長線は、現在市道となっている「あづまみち」（写真上の舗装道路）の走向と全く一致し、さらに詳細にみるとその位置は、市道の道幅の北側（写真向かって右側）に合致するように見える。

セクションA－A′
1　盛土。
2　現表土。
3　暗褐色土。硬化面。
4　暗褐色土。小礫含む。
5　暗褐色土。砂、礫含む。
6　暗褐色土。多量の小礫含む。
7　暗褐色土。褐色～灰黄褐色砂のブロック含む。
8　黒褐色土。
9　褐色砂。崩壊した地山。
10　黒褐色土。シルト粒、軽石粒含む。
11　黒褐色土。多量のシルト粒含む。
12　黒褐色土。多量のシルト粒含む。
13　灰黄褐色土。シルトブロック含む。
14　暗褐色土。シルト粒含む。
15　黒色土。シルト粒、軽石粒含む。
16　黒褐色土。
17　黒褐色土。
18　黒褐色土。
19　黒色土。
20　暗灰黄色土。多量のシルト粒含む。
21　暗灰黄色土。
22　黒褐色土。シルト粒含む。
23　暗灰黄色土。
24　黒褐色土。砂、シルトブロック含む。
25　黄褐色土。地山の二次堆積。
26　黒褐色土。軽石粒、シルト粒含む。
27　黒褐色土。シルト粒、軽石粒含む。
28　黄褐色土。シルト粒、軽石粒含む。
29　黄褐色土。
30　暗褐色土。
31　黄褐色土。シルトブロック含む。
32　黄褐色シルト。
33　黄褐色土。
34　黒褐色土。鉄分凝集層。
35　黄橙色シルト。

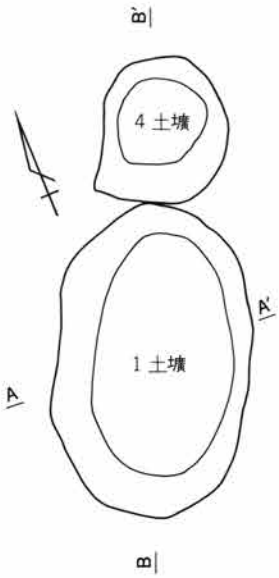
セクションB－B′
1　暗褐色土。地山の褐色～黄褐色シルトブロック含む。
2　褐色土。地山の二次堆積。
3　黄褐色土。
4　黒色土。小礫含む。
5　黒色土。
6　黒褐色土。軽石粒含む。
7　黒褐色土。小礫、軽石粒含む。
8　黒褐色土。地山のシルト、砂ブロック含む。
9　黒褐色土。地山のシルト、砂ブロック含む。
10　灰黄褐色土。地山のシルト粒含む。
11　黒色土。小礫含む。
12　黒褐色土。シルト粒含む。
13　黒色土。
14　黒褐色土。多量のシルト粒含む。
15　黒褐色土。地山のブロックを多量に含む。
16　灰黄褐色土。地山の黒色土粒含む。
17　黒褐色土。
18　黒褐色土。黒色土粒、地山のブロック含む。
19　黒褐色土。多量の褐色砂含む。
20　暗褐色土。
21　黒褐色土。小礫、黄橙色軽石含む。
22　黒褐色土。鉄分凝集。

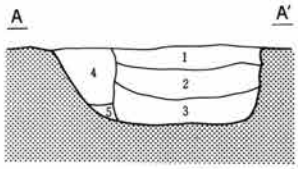
セクションC－C′
1　暗褐色土。小礫含む。
2　灰褐色土。暗褐色土粒含む。
3　黒褐色土。シルト粒、軽石粒含む。
4　灰黄褐色土。シルト粒、軽石粒含む。
5　暗灰黄色土。
①　黒色土。小礫、シルト粒、軽石粒含む。
②　黒色土。シルト粒含む。
③　黒色土。
④　黒褐色土。シルト粒含む。
④　黒褐色土。多量のシルト粒含む。
⑤　黒褐色土。砂質。

セクションD－D′
1　黒褐色土。小礫含む。
2　黒褐色土。小礫含む。
3　灰黄褐色土。硬く締まる。
4　黒褐色土。硬く締まり、細礫含む。※3，4第2硬化面
5　黒褐色土。
6　黒褐色土。黒色土ブロック含む。
7　灰黄褐色土。硬く締まる。
8　黒褐色土。硬く締まり、細礫含む。※7，8第3硬化面
9　黒褐色土。多量の小礫含む。
10　黒褐色土。硬く締まり、小礫含む。※第4硬化面
11　黒褐色土。小礫含む。
12　黄灰色土。
13　暗褐色土。多量の褐色砂含む。
14　黒褐色土。小礫、地山砂、シルトブロック含む。
15　黒色土。褐色砂ブロック含む。
16　灰黄褐色土。地山のシルト粒含む。
17　黒色土。地山のシルト粒含む。
18　黒褐色土。小礫、シルト粒含む。
19　黒褐色中粒砂。
20　黒褐色土。地山のシルト粒、小礫含む。
21　灰黄褐色土。黒褐色土ブロック含む。
22　褐色粗粒砂。地山の砂層の二次堆積。
23　黒褐色土。地山の白色シルトブロックを多量に含む。
①　黒褐色土と砂層の互層。
②　灰黄褐色粗粒砂。
I　灰黄褐色シルト。
II　黄褐色土。前橋泥流。

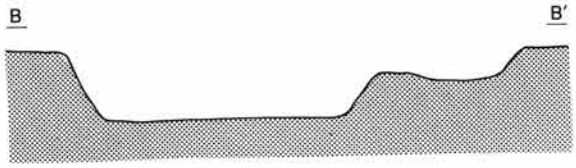
セクションE－E′
1　黒褐色土。小礫含む。
7　灰黄褐色土。硬く締まる。
10　黒褐色土。硬く締まり、小礫含む。
12　黄灰色土。
17　黒色土。地山のシルト粒含む。
18　黒褐色土。小礫、シルト粒含む。
19　黒褐色中粒砂。
①　黒褐色土。黒色土塊、褐色土塊含む。
②　黒褐色土。
③　暗褐色土。黒色土粒、小礫含む。
④　黒褐色土。小礫含む。
⑤　黒褐色土。多量の小礫含む。
⑥　黒褐色土。多量の小礫、軽石含む。
⑦　黄褐色土。暗褐色土塊含む。
⑧　暗褐色土。多量の小礫含む。
⑨　黒褐色土。
⑩　暗褐色土。砂質。
⑪　褐色中～粗砂。

1・4号土壙



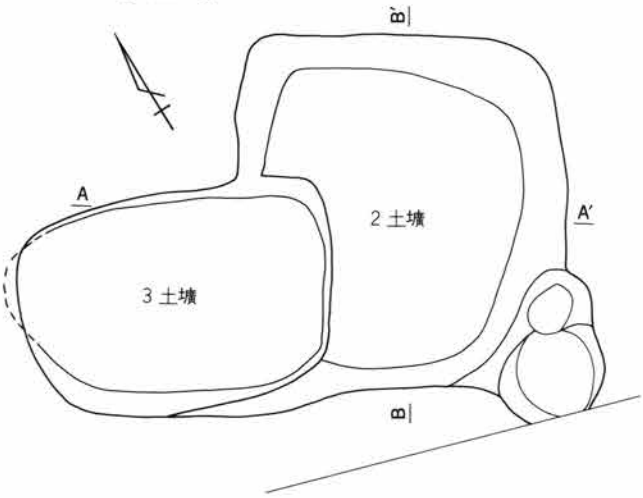


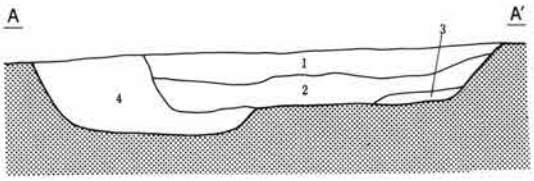
1　暗褐色土。茶褐色土・黒褐色土ブロック混入。
2　暗褐色土。多量の灰褐色砂質土混入。
3　暗褐色土。4より黒味が強い。
4　黒褐色土。茶褐色土ブロック、黄色軽石含む。
5　暗褐色土と茶褐色土の混土層。

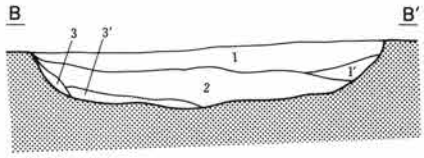


2・3号土壙

遺物観察表　76

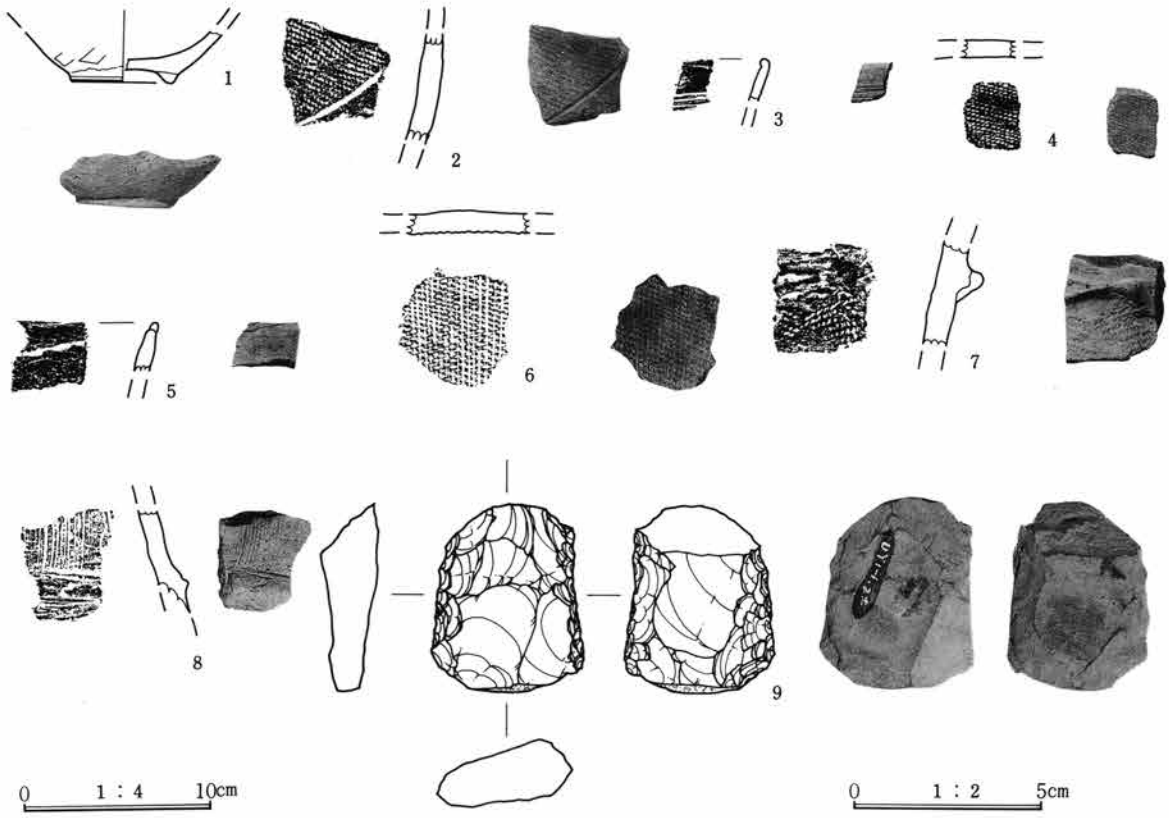






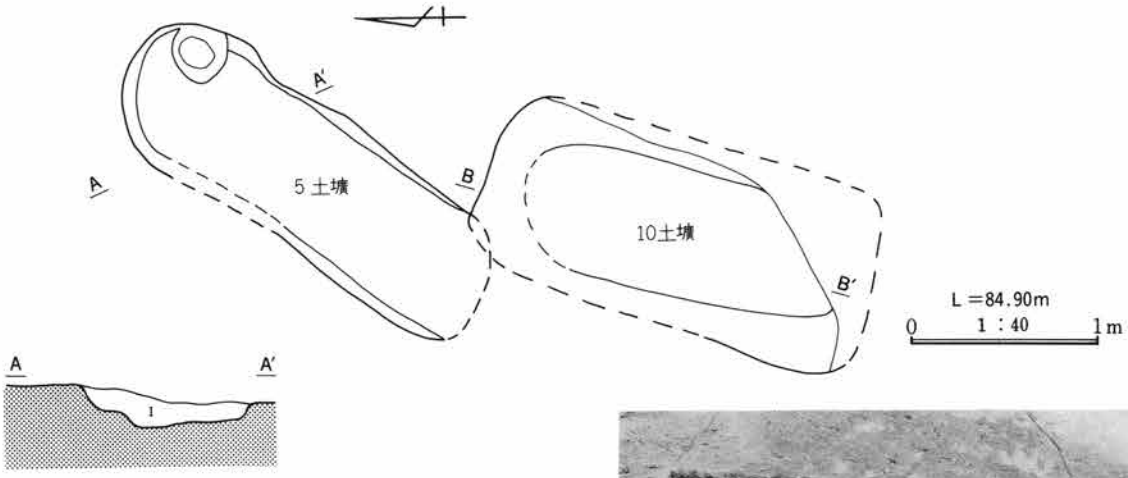
1　暗灰褐色土。軽石粒含む。
1′　1より黒味が強い。
2　暗褐色土。小円礫混入。
3　茶褐色土。壁面の崩落土。
3′　茶褐色土。
4　暗褐色土。砂質。

L＝84.90m
0　1：40　1m

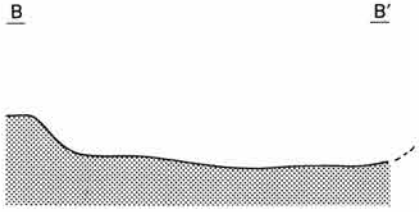


2号土壙出土遺物

5・10号土壙

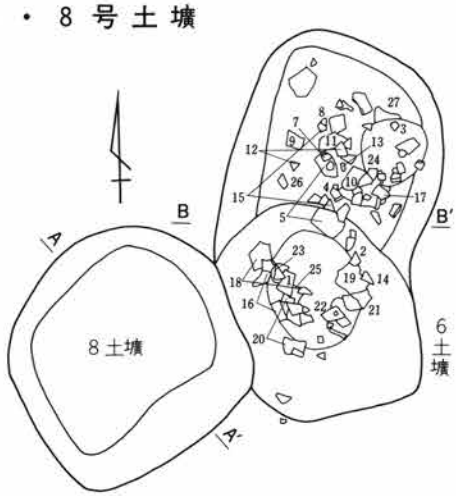


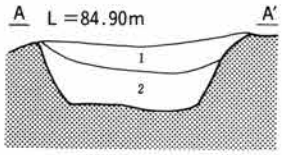
1　暗褐色土。茶褐色土との混土層。

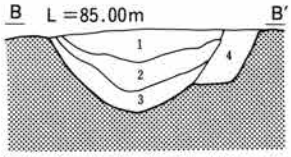


6・8号土壙

遺物観察表 76



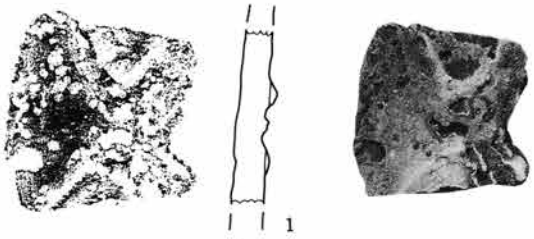


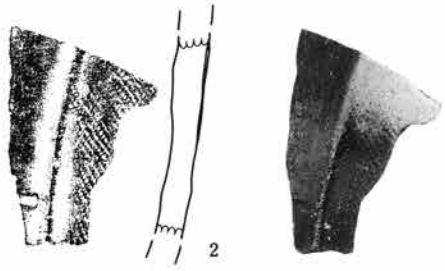


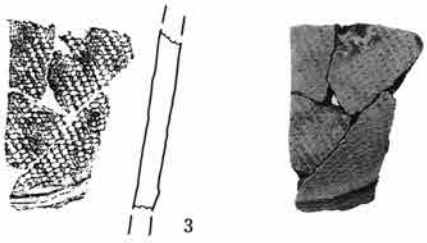
1 暗褐色土。黄茶褐色土粒含む。
2 暗褐色土。1より黒味が強い。

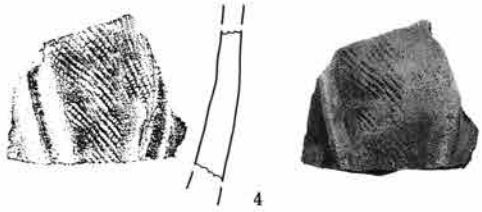
1 黒褐色土。黄色軽石含む。
2 黒褐色土。1より黒い色調。
3 茶褐色土。黄茶褐色土含む。
4 茶褐色土。

0 1：40 1m



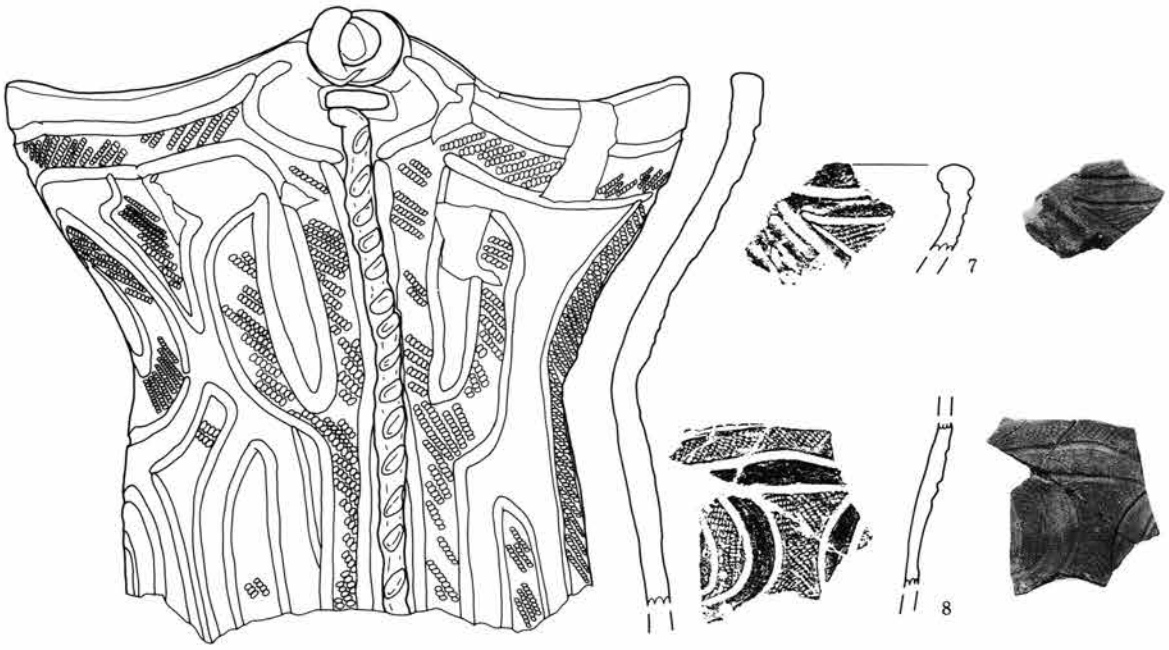


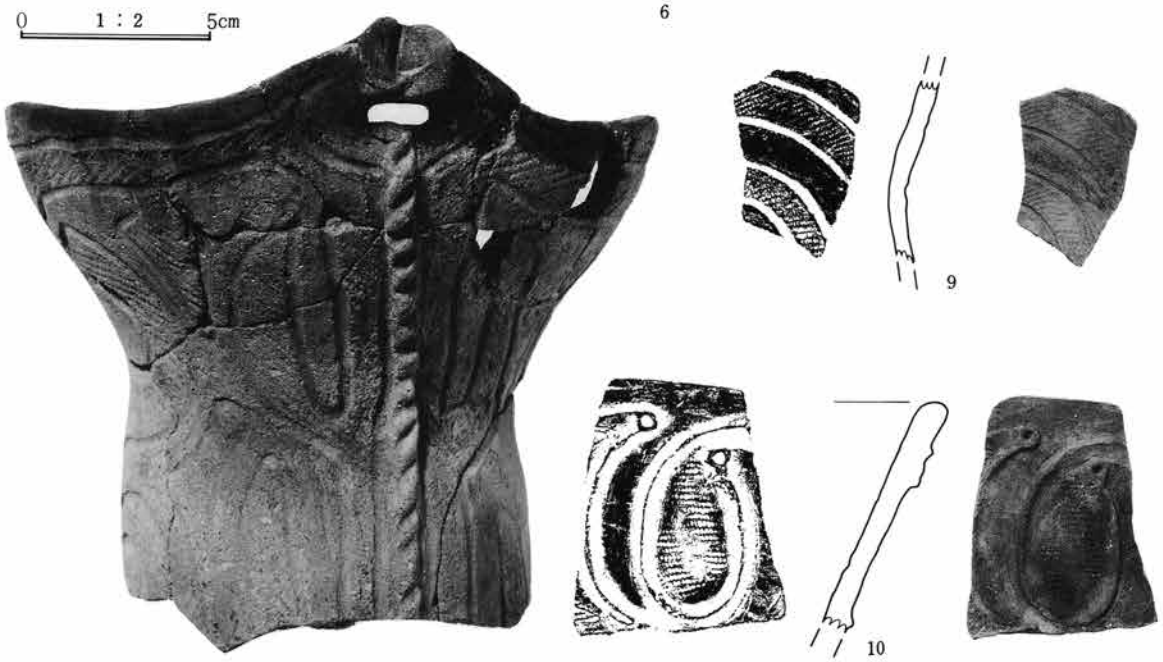


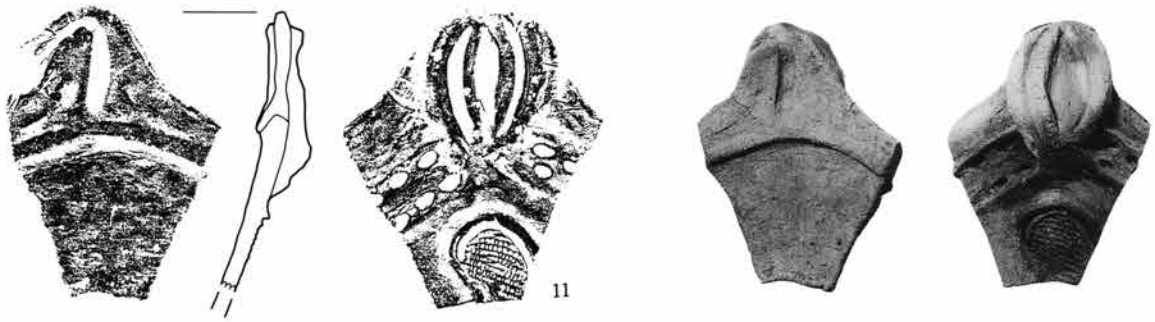


6号土壙出土遺物

0 1：4 10cm

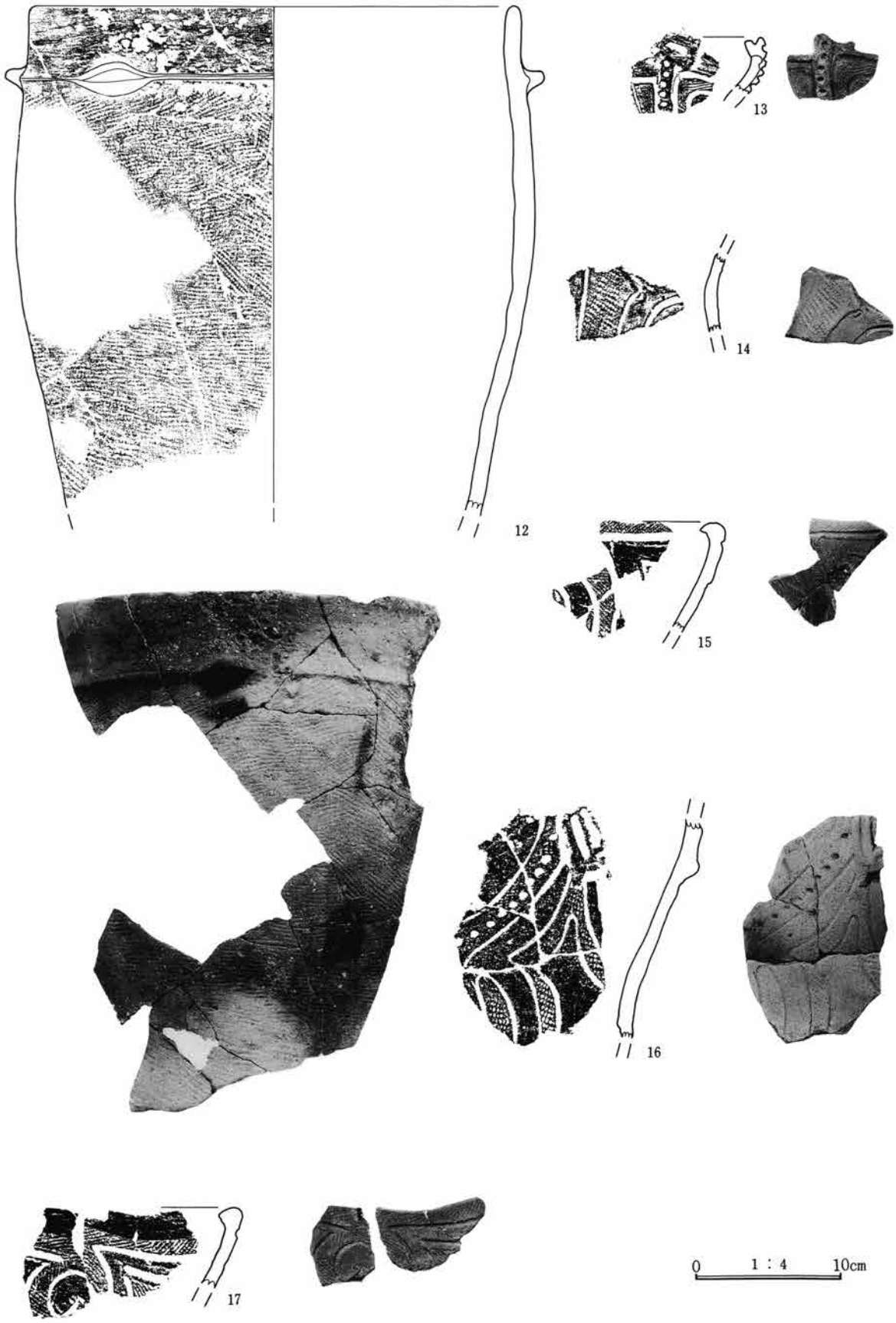




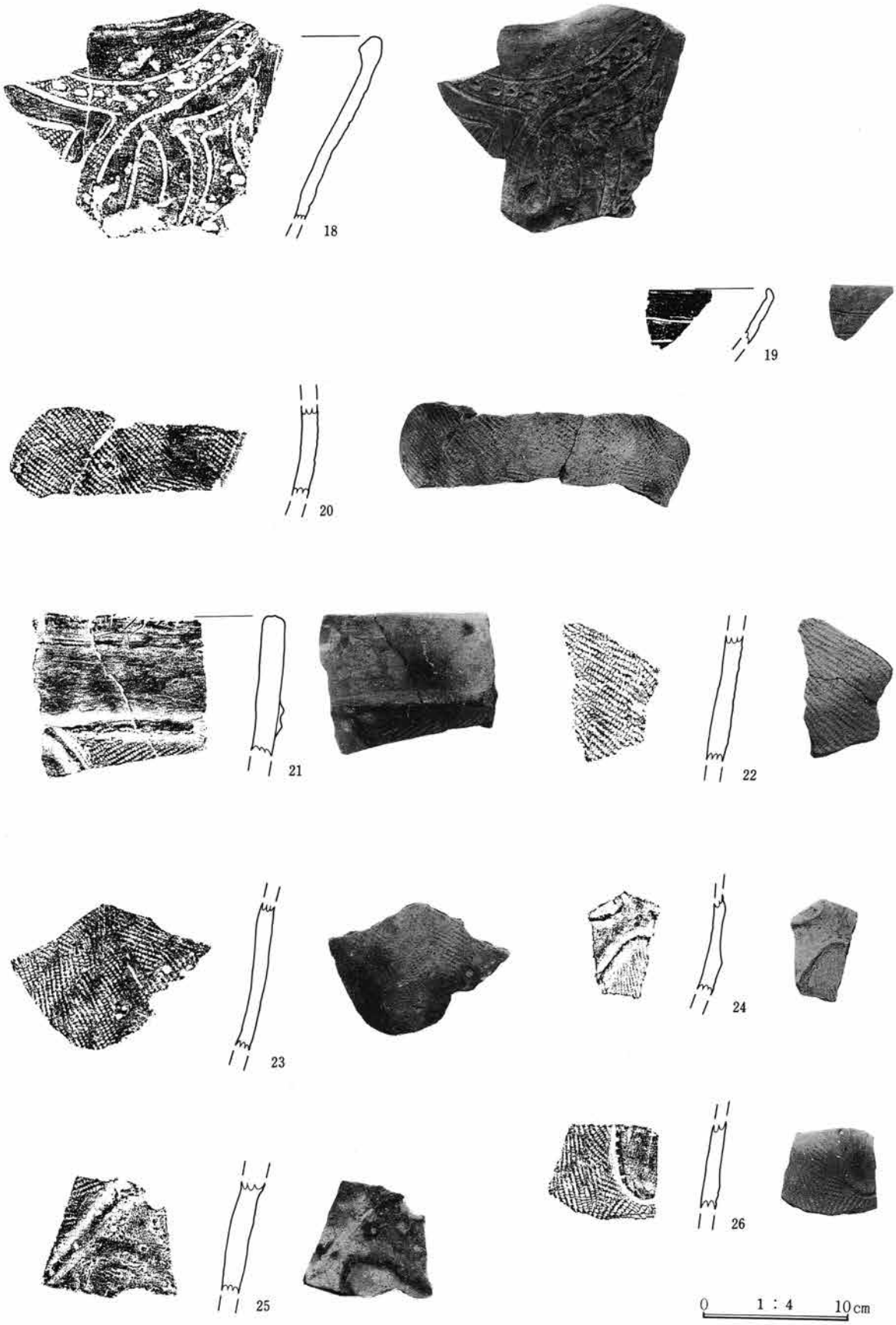


6号土壙出土遺物

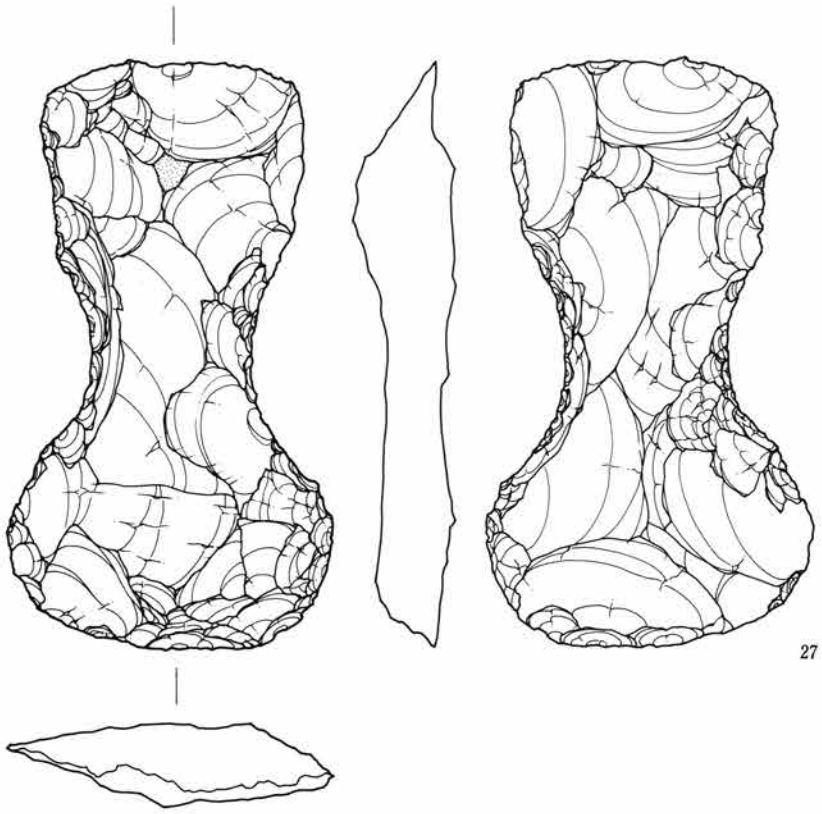
0 1：4 10cm

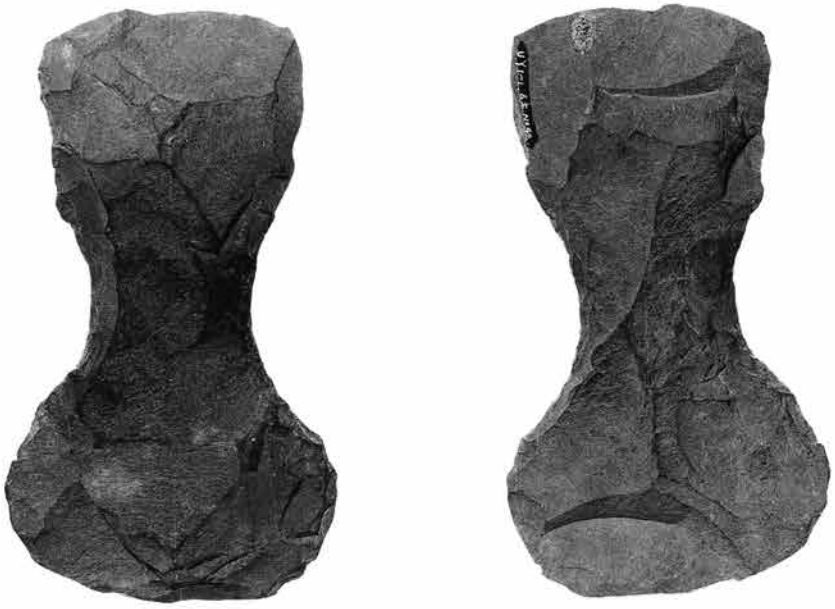


6号土壙出土遺物



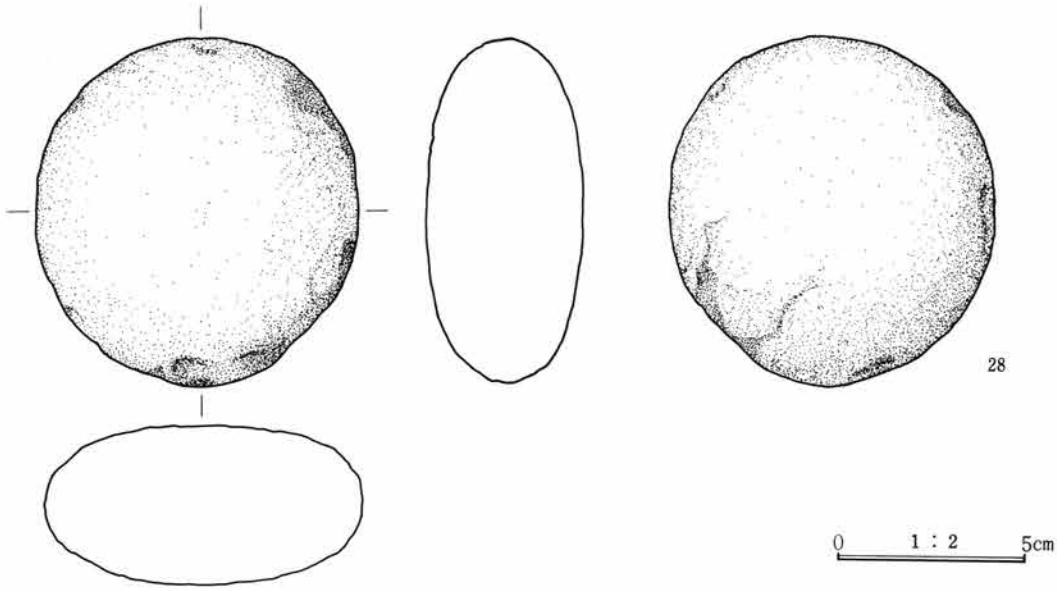
6号土壙出土遺物





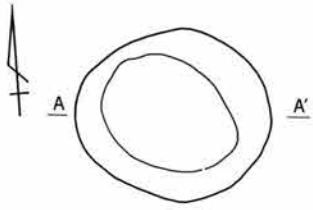
0　1：2　5cm

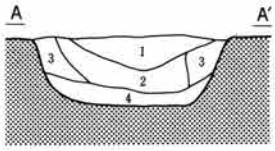
6号土壙出土遺物



6号土壙出土遺物

7 号 土 壙

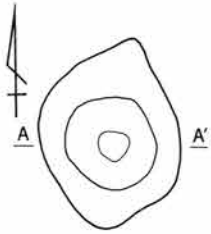


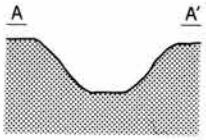


1 暗褐色土。白色軽石粒含む。
2 暗褐色土。黄茶褐色土含む。
3 黄茶褐色土。黄色軽石含む。
4 黒褐色土。黄茶褐色土粒含む。

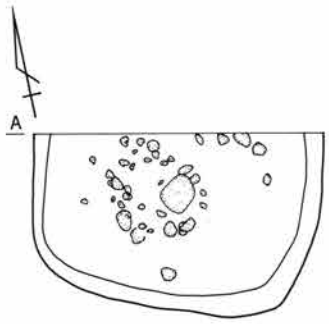
L＝84.90m
0 1：40 1m

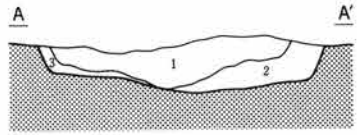
9 号 土 壙





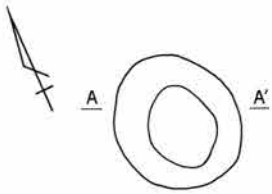
11号土壙

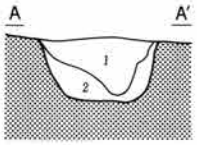




1　暗褐色土。
2　暗褐色土。
3　暗黄褐色土。ローム主体。

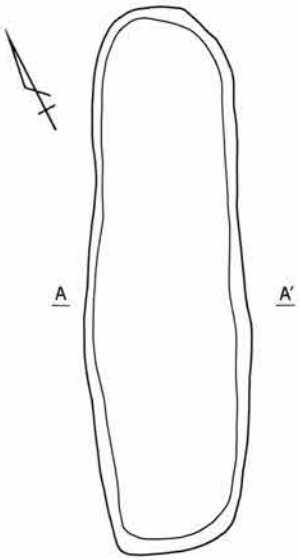
12号土壙

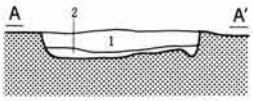




1　暗褐色土。
2　黄褐色土。ローム主体。

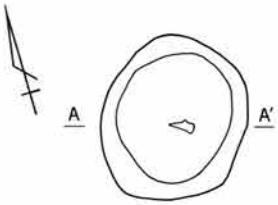
14号土壙

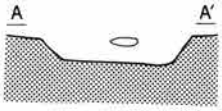




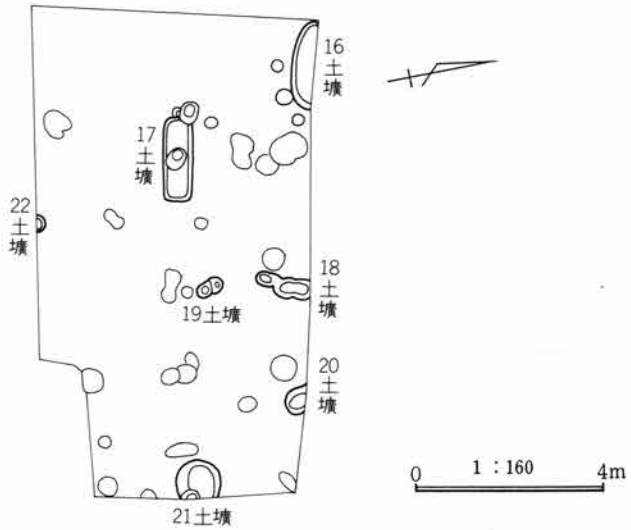
1　黒褐色土。ロームブロック含む。
2　黄褐色土。ローム主体。

15号土壙

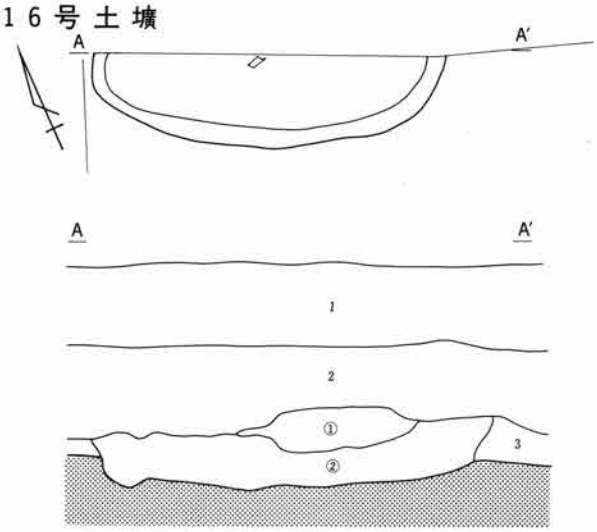




L＝85.00m
0　1：40　1m

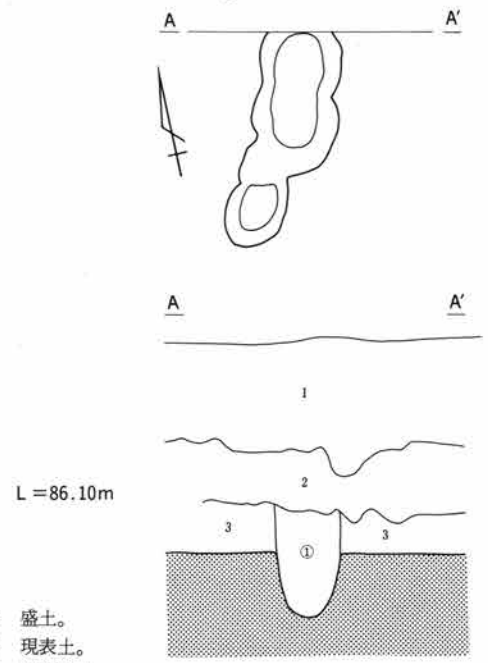


16号土壙



1　盛土。　　①　暗褐色土。
2　現表土。　②　暗褐色土。褐色土粒含む。
3　暗褐色土。

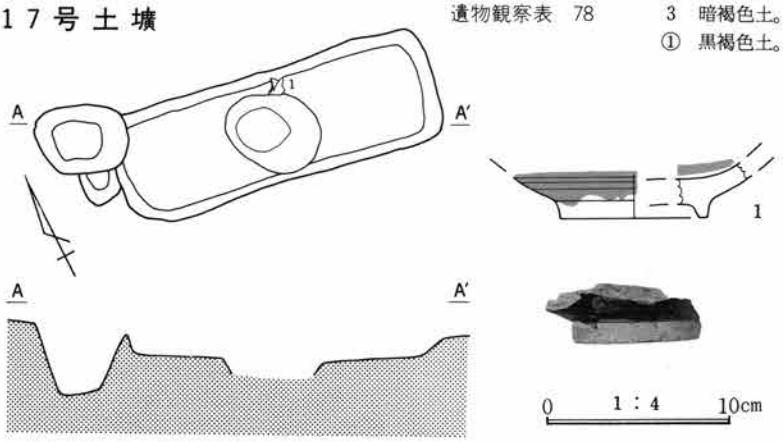
18号土壙



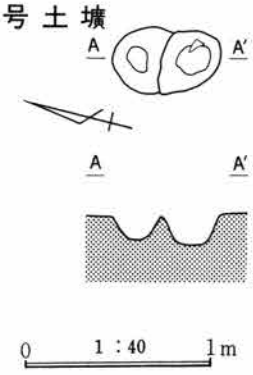
1　盛土。
2　現表土。
3　暗褐色土。
①　黒褐色土。暗褐色土、砂ブロック含む。

17号土壙

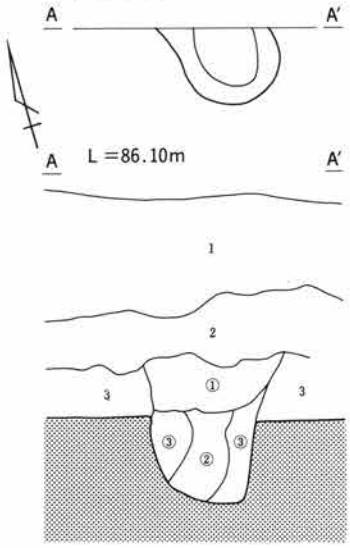
遺物観察表　78



19号土壙

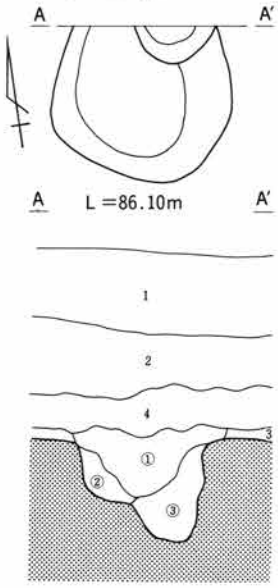


20号土壙



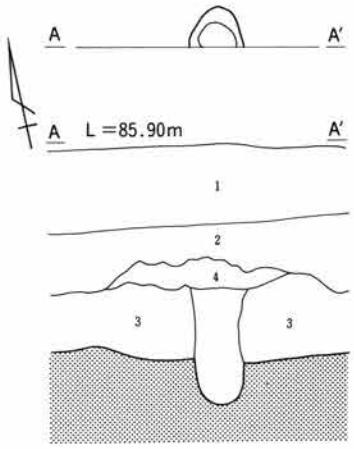
1　盛土。　　①　暗褐色土。
2　現表土。　②　暗褐色土。
3　暗褐色土。　③　砂ブロック。

21号土壙



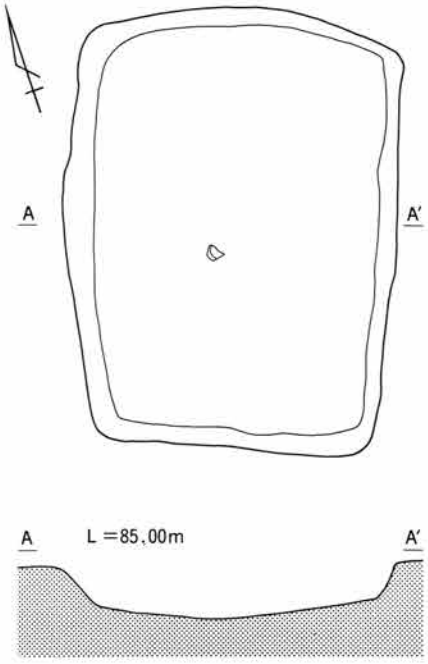
1　盛土。　　①　黒褐色土。
2　現表土。　②　黒褐色土。
3　暗褐色土。　③　黒褐色土。
4　暗褐色土。褐色土粒含む。

22号土壙

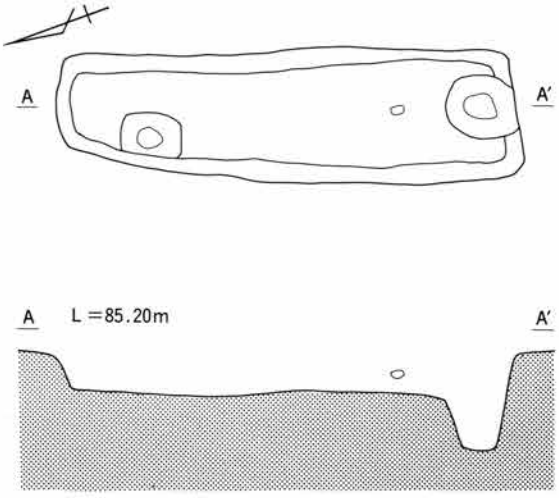


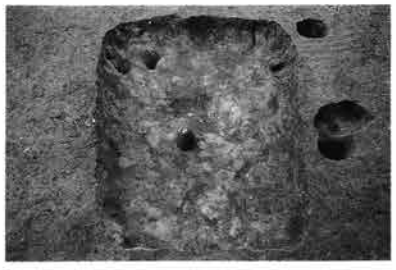
1　盛土。
2　現表土。
3　暗褐色土。
4　暗褐色土。褐色土粒含む。

23号土壙

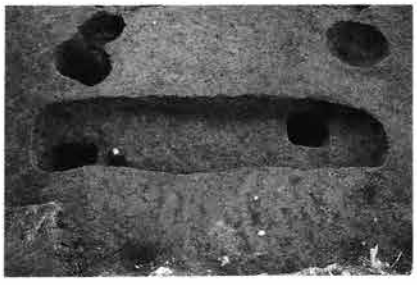


24号土壙



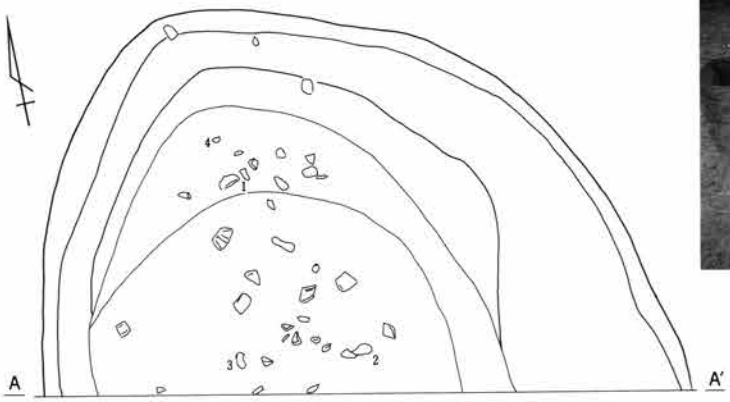


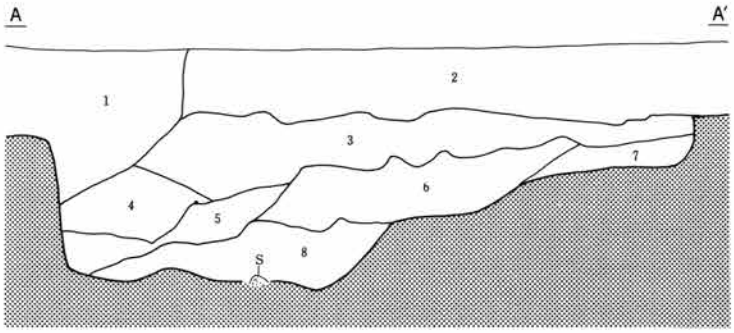
0　1：40　1m



25号土壙

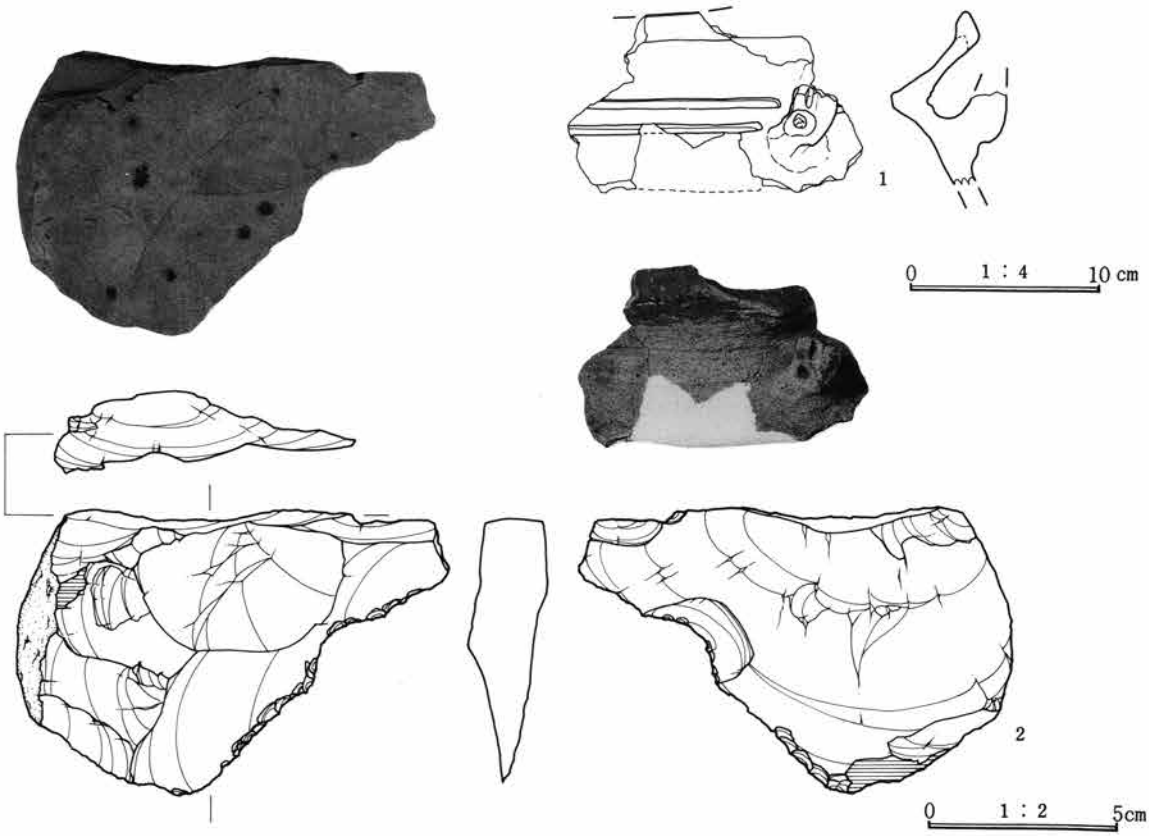
遺物観察表 78

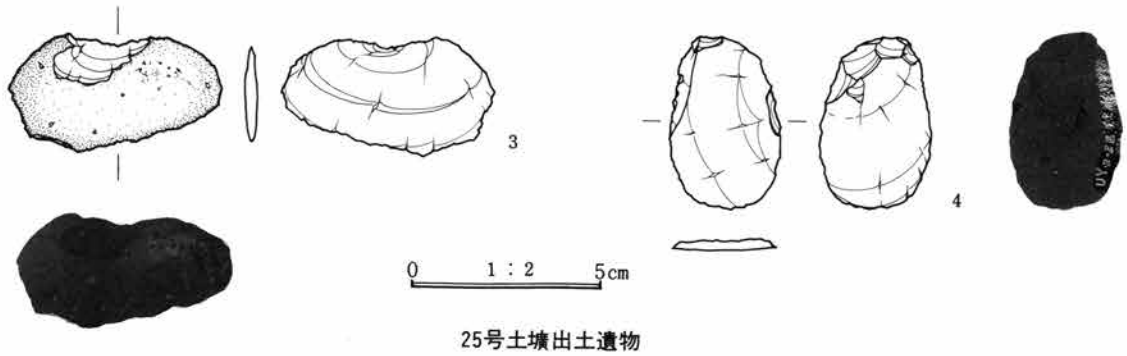




1 攪乱。
2 盛土。
3 黒褐色土。暗褐色土粒含む。
4 黒褐色土。
5 黒褐色土。暗褐色土粒含む。
6 暗褐色土。黒褐色土粒、褐色土粒含む。
7 暗褐色土。褐色土粒含む。
8 暗褐色土。

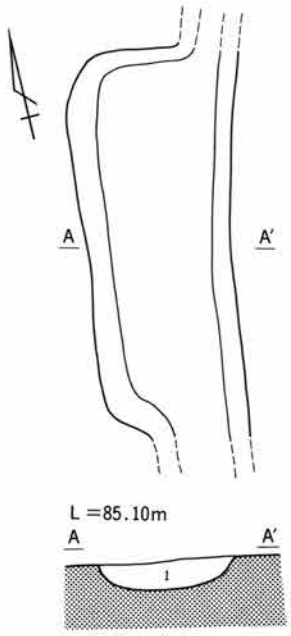
L＝85.80m
0 1：40 1m





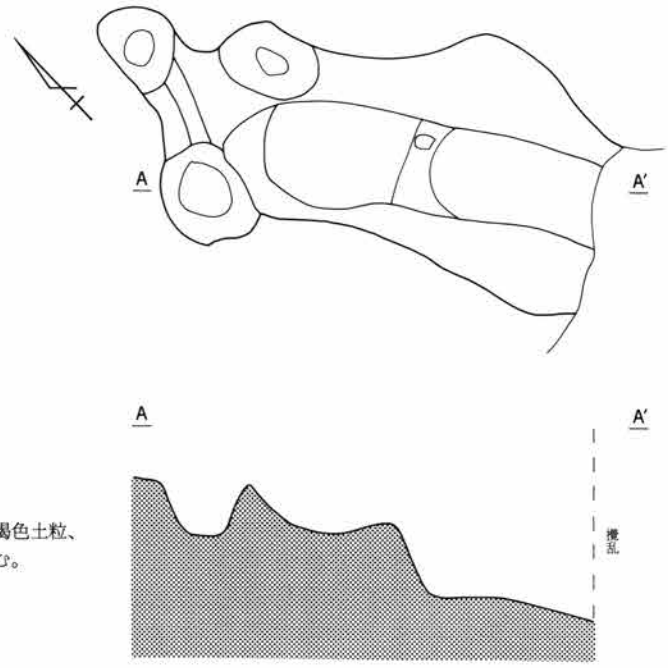
25号土壙出土遺物

26号土壙

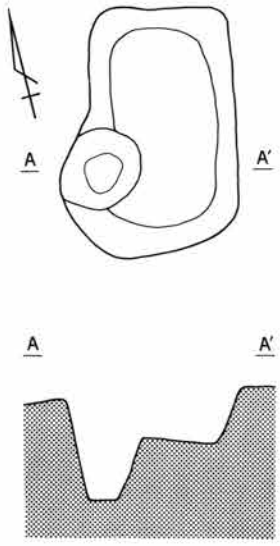


1　黒褐色土。暗褐色土粒、白色軽石粒含む。

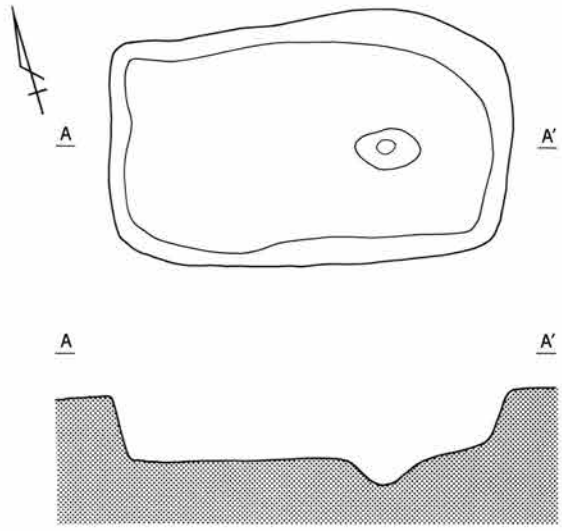
27号土壙



28号土壙



29号土壙

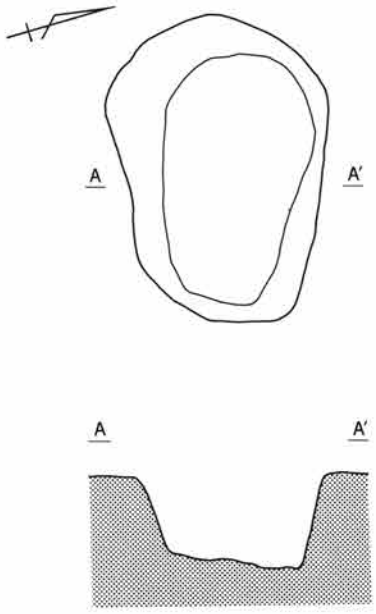


L＝85.50m
0 1：4 1m

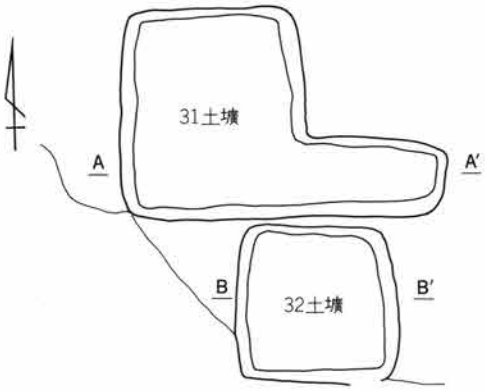
27・28・29・30号土壙

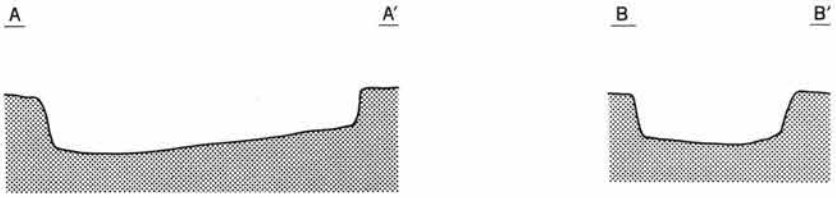
0　1：80　2m

30号土壙



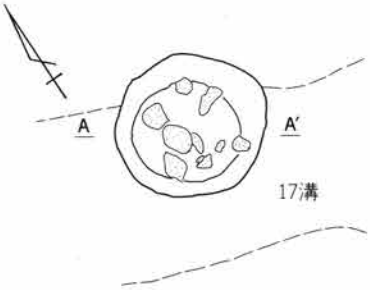
31・32号土壙

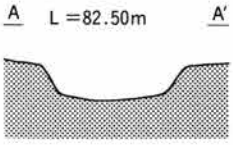




L＝85.50m
0　1：40　1m

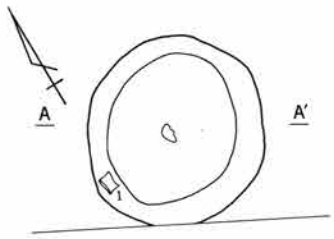
33号土壙

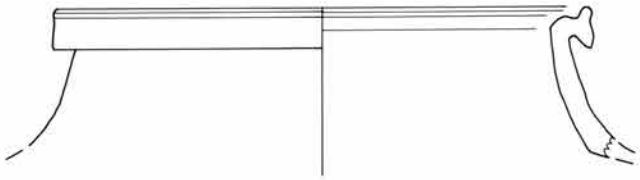


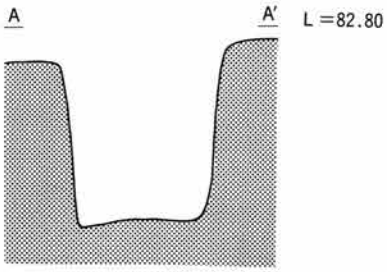


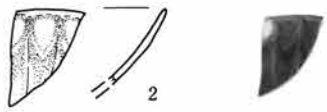
34号土壙

遺物観察表 78





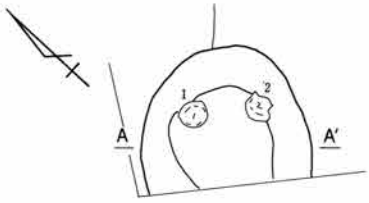


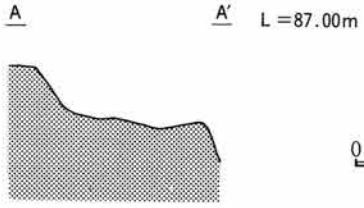


0　1：4　10cm

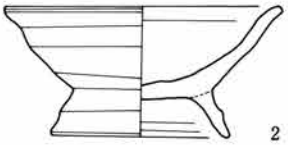
35号土壙

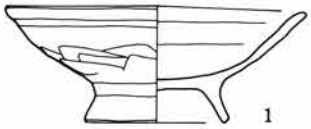
遺物観察表 78





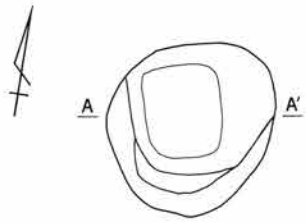
0　1：40　1m

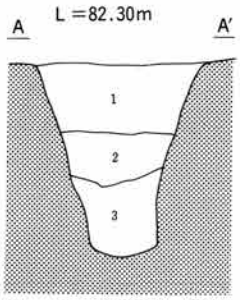




0　1：4　10cm

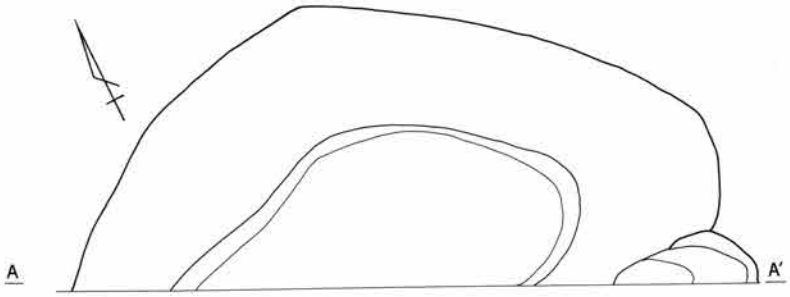
45号土壙

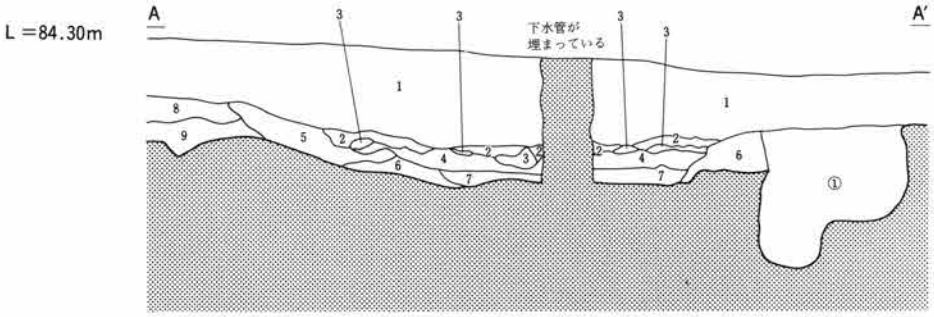




1　褐色シルトブロック。
2　黒褐色土。黄褐色シルトブロック含む。
3　1に近似し、As-B含む。

47号土壙

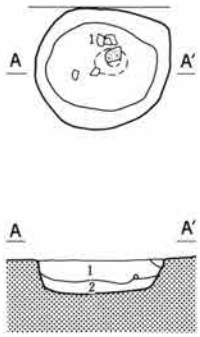


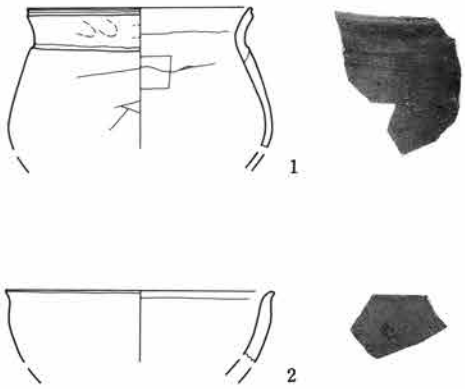


1　現表土。
2　黒褐色土。As-B含む。
3　灰赤色土。細流火山灰（As-B）。
4　黄褐色土。軽石（As-B）。
5　黒色土。
6　黒褐色土。
7　黒色土。
8　黒色土。
9　黒褐色土。砂塊含む。
①　黒褐色土。礫含む。

0　1：40　1m

46号土壙

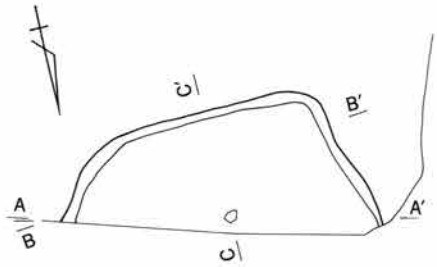


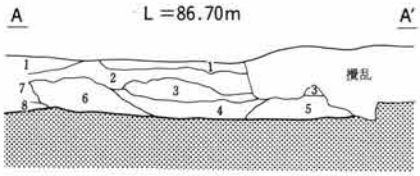


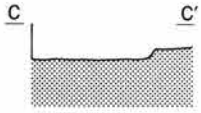
1　暗灰褐色土。白色軽石粒含む。
2　暗灰褐色土。炭化物含む。

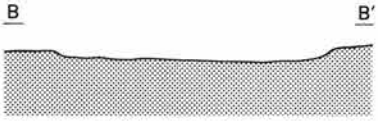
0　1：4　10cm

48号土壙





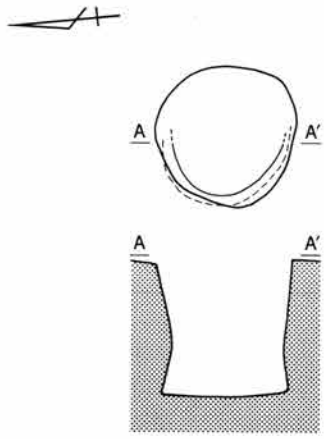




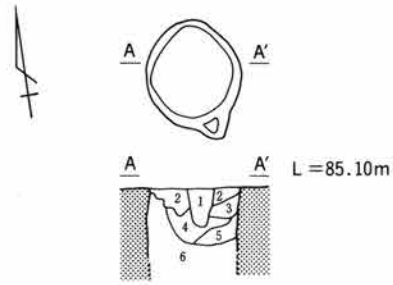
1　盛土。
2　現耕作土。
3　暗褐色砂質土。黒褐色土粒含む。
4　黒褐色土。黒褐色土粒含む。
5　暗褐色土。褐色土粒、黒褐色土粒含む。
6　黒褐色土。褐色土粒、暗褐色土粒含む。
7　暗褐色土。黒褐色土粒、褐色土粒含む。
8　暗褐色土。黒褐色土粒含む。

L＝85.20m
0　1：40　1m

1 号井戸



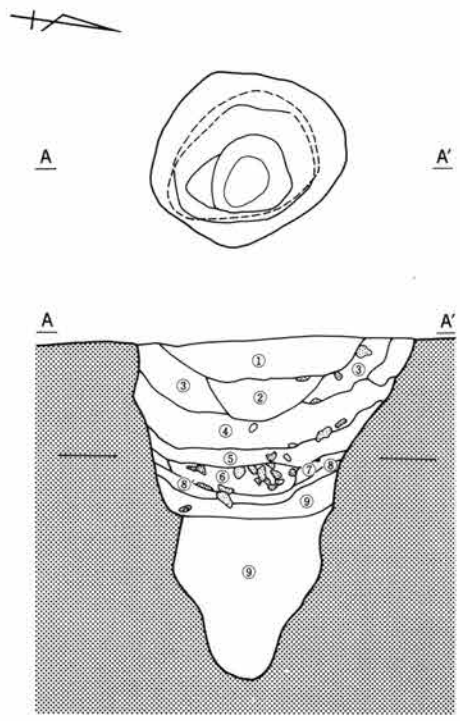
2 号井戸



1　黒褐色土。白色シルト粒含む。
2　灰黄褐色土。多量の小礫、シルト粒含む。
3　黒褐色土。地山の砂、シルト粒含む。
4　黒色土。地山の砂、シルト粒含む。
5　黒褐色土。
6　黒色土。

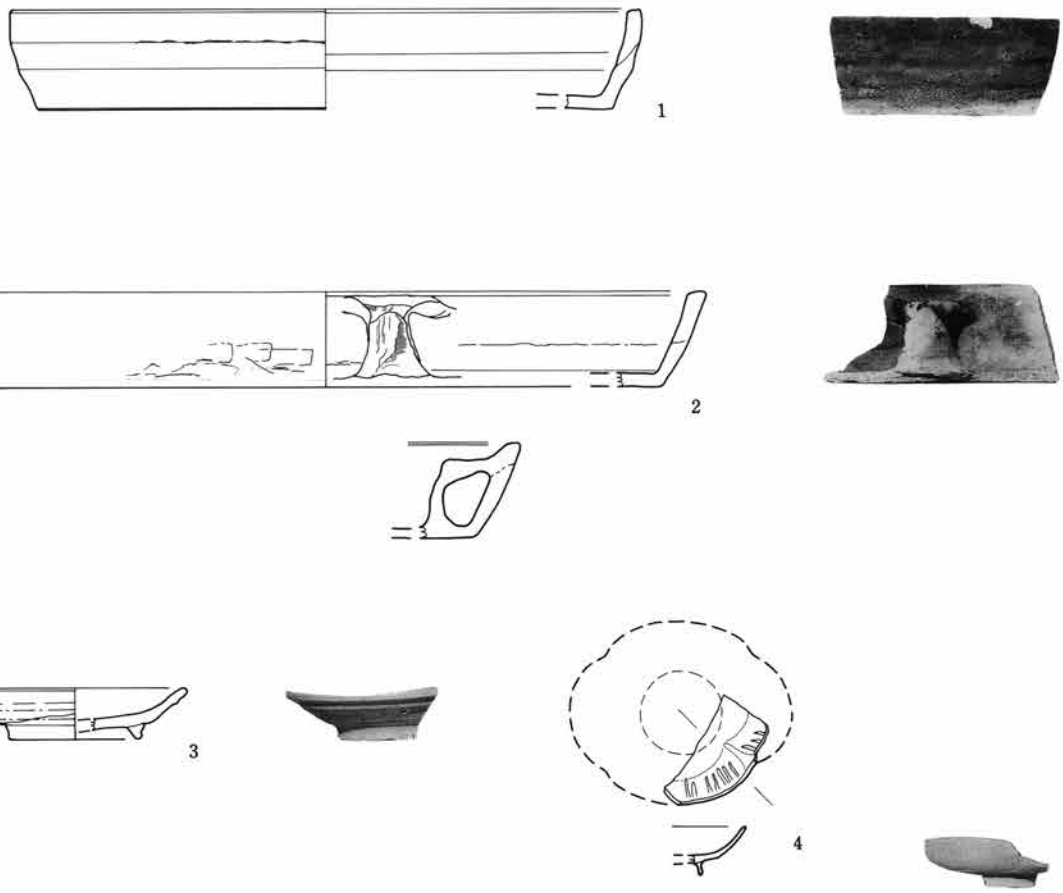
3 号井戸

遺物観察表　79

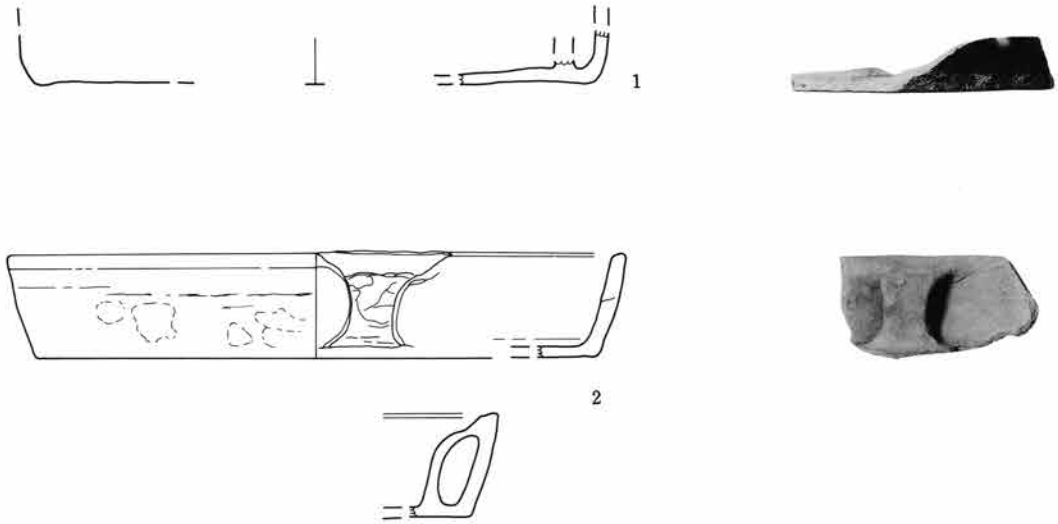


L =85.00m
0　1 : 80　2m

① 暗褐色土。褐色土粒、黒褐色土粒含む。
② 黒褐色土。暗褐色土粒、白色軽石粒含む。
③ 暗褐色土。黒褐色土粒含む。
④ 黒褐色土。暗褐色土粒含む。
⑤ 黒褐色土。
⑥ 黒褐色土。大きな礫が集中。
⑦ 黒褐色土。
⑧ 黒褐色中粒砂。黒褐色土含む。
⑧′ 黒褐色土。地山の白色軽石粒含む。
⑨ 黒色土。暗褐色土粒含む。



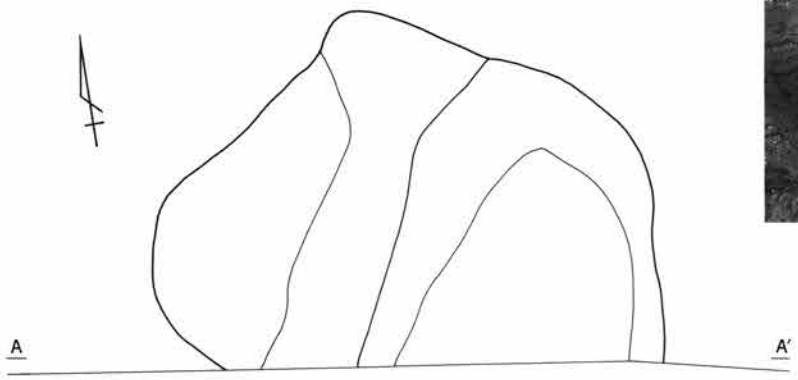
3号井戸出土遺物

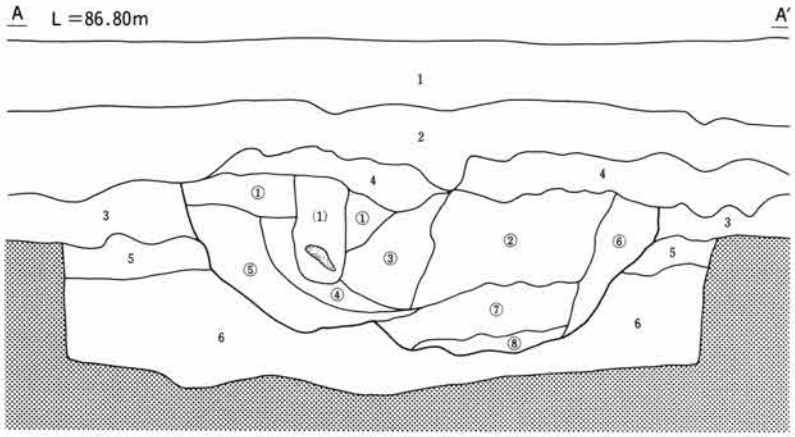


4号井戸出土遺物

0　1：4　10cm

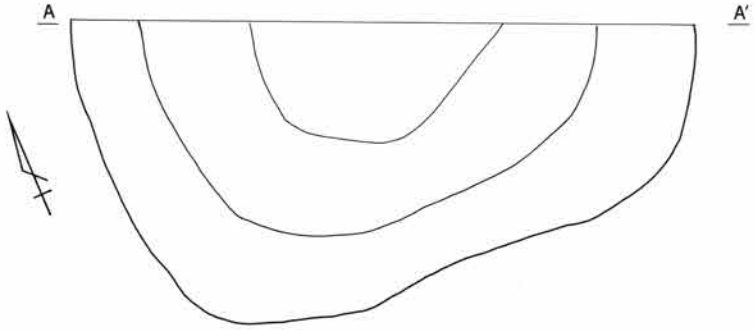
1 号風倒木

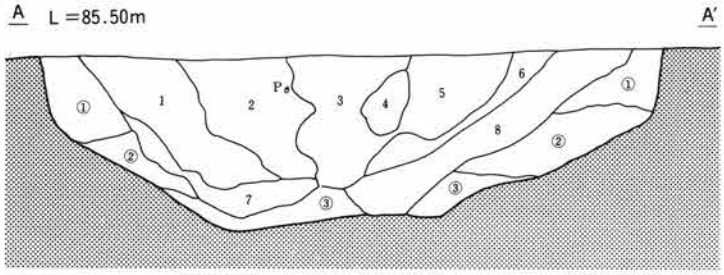




1　盛土。
2　現表土。
3　暗褐色土。
4　暗褐色土。褐色土粒含む。
5　砂質褐色土。小礫、明黄褐色軽石含む。
6　砂層。円礫、軽石含む。
①　暗褐色土。黒褐色土塊含む。
②　黒褐色土。黒褐色土ブロック含む。
③　暗褐色土。
④　褐色砂。持ち上げられた地山。
⑤　暗褐色土。小礫、砂塊含む。
⑥　暗褐色土。小礫、砂塊含む。
⑦　黒褐色土。地山の砂粒、軽石粒含む。
⑧　黒褐色土。地山の砂粒、軽石粒含む。
(1)　黒褐色土。

3 号風倒木



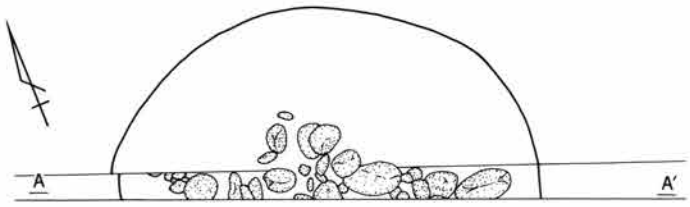


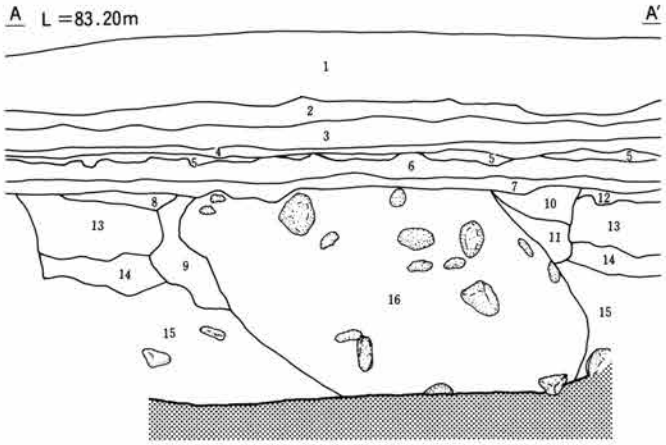
① 暗褐色土。
② 褐色土。砂質。
③ 褐色土。
} 地山。

1　黒色土。
2　黒褐色土。細礫、白色軽石粒含む。
3　暗褐色土。細礫含む。地山①と対応。
4　地山②と対応。
5　地山③と対応。
6　暗褐色土。小礫、砂層ブロック含む。
7　黒褐色土。砂層ブロック含む。
8　黒褐色土。①、②のブロック含む。

0　1：80　2m

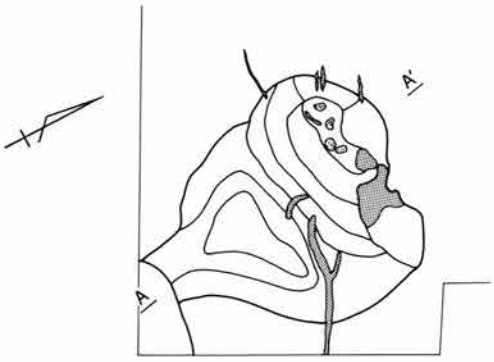
4 号 風 倒 木

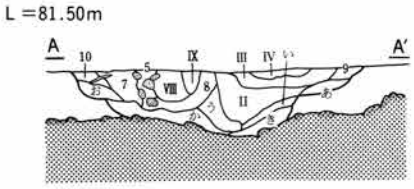




1 暗褐色土。
2 茶褐色土。
3 暗褐色土。As-B含む。
4 極暗褐色土。多量のAs-B含む。
5 褐灰色砂層。
6 暗褐色土。
7 暗褐色土。
8 黄橙色土。
9 黄褐色土。
10 暗灰黄褐色土。
11 暗褐色土。
12 褐色土。
13 褐色土。
14 黄橙色土。
15 灰黄褐色土。
16 褐色砂礫層。

5 号 風 倒 木

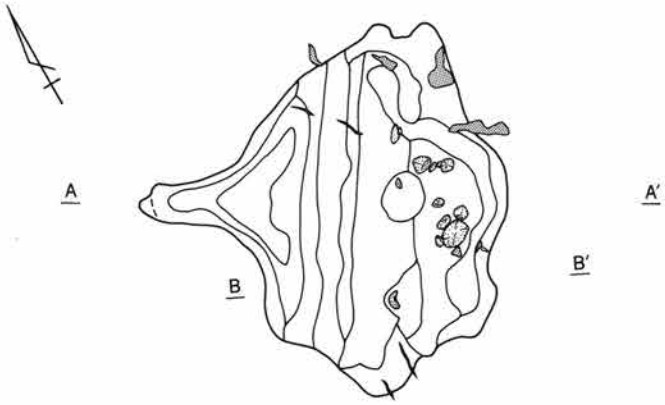


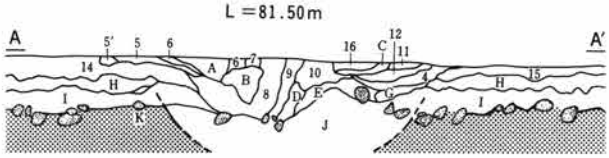


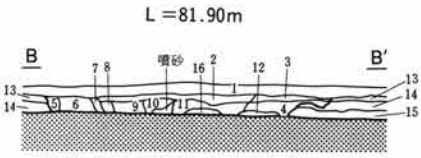
I 黄褐色土。暗褐色シルトブロック、砂ブロック含む噴砂。
II 黄褐色砂礫。φ2～50㎜の砂礫層。
III 黄橙色土。暗褐色土ブロック含む。
IV 黄褐色土。暗褐色土ブロック含む。
V 黄橙色土。褐色土ブロック含む。
VI 黄褐色土。暗褐色土ブロック含む。
VII 黄褐色土。暗褐色土ブロック含む。
VIII 黄褐色土。暗褐色土ブロック含む。
IX 黄褐色土。暗褐色土ブロック含む。
あ 黄褐色土。黄橙色シルトブロック含む。
い 黄橙色土。多量の暗褐色シルトブロック含む。
う 黄橙色土。暗褐色シルトブロック含む。
え 黄褐色土。暗褐色シルトブロック含む。
お 黄橙色土。暗褐色シルトブロック含む。
か 黄橙色土。多量の暗褐色シルトブロック含む。
き 黄褐色土。暗褐色シルトブロック含む。
く 黄褐色土。少量の暗褐色シルトブロック含む。
け 黄褐色土。
こ 黄橙色土。
さ 黄褐色砂礫層。φ0.5～5㎝の円礫含む。

0 1：80 2m

6 号風倒木

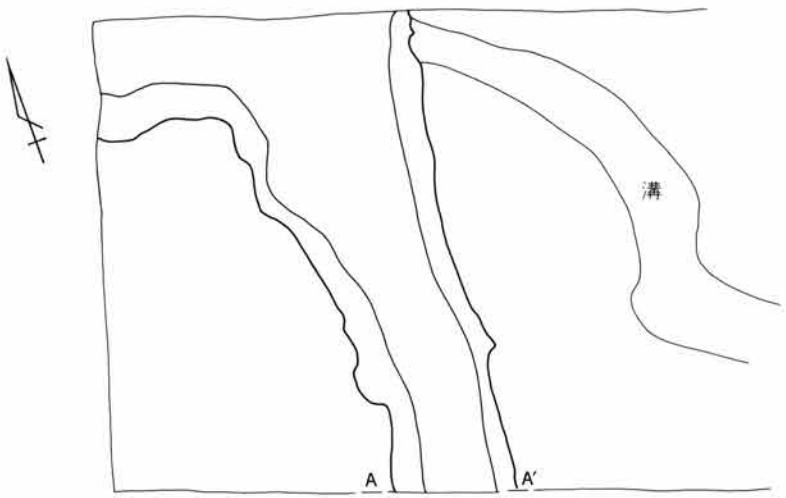


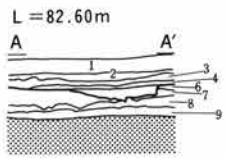




1　暗褐色土。As-C粒、Hr-FP粒含む。
2　暗褐色土。As-C粒、Hr-FP粒含む。
3　黒褐色土。As-C粒含む。
4　黒褐色土。As-C粒をブロック状に含む。
5　黄褐色土。黄橙色シルトブロック含む。
5′　暗褐色土。黄橙色土ブロック含む。
6　褐色土。黒褐色シルトブロック、As-C粒含む。
7　黄褐色土。褐色シルトブロック含む。
8　黄褐色土。
9　暗褐色土。黄褐色シルトブロック含む。
10　黄褐色土。褐色シルトブロック、Hr-FP粒、As-C粒含む。
11　黄橙色土。褐色シルトブロック含む。
12　灰黄褐色砂。As-Cの純層か。
13　黄褐色土。黄橙色土ブロック含む。
14　暗褐色土。褐色シルトブロック、As-C粒含む。
15　黄褐色土。暗褐色シルトブロック含む。
16　黄橙色土。褐色シルトブロック含む。
A　黒褐色土。As-C粒含む。
B　暗褐色土。黒褐色土ブロック、黄橙色土ブロック含む。
C　褐色土。黄橙色土ブロック、As-C粒含む。
D　黄褐色土。褐色土ブロック含む。
E　黄褐色土。小円礫含む。
F　黄褐色土。暗褐色シルトブロック含む。
G　暗褐色土。黄褐色シルトブロック含む。
H　褐色土。
I　黄褐色土。
J　黄褐色土。
K　灰黄褐色砂礫。φ5～200㎜の円礫含む。

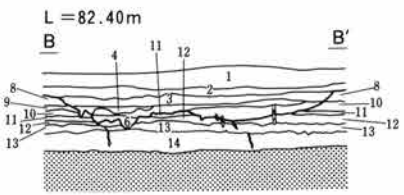
0　1：80　2m





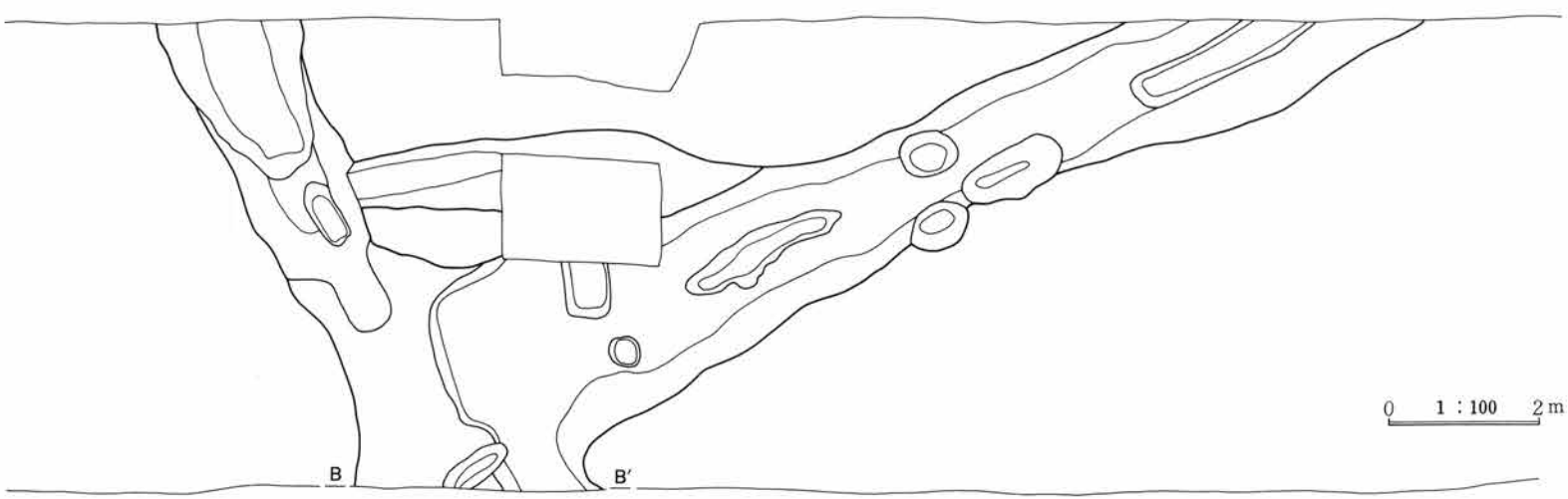
A－A′　1号沢　西部南壁

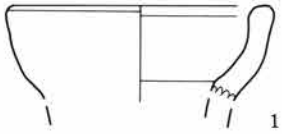
1　褐色土。
2　黒褐色土。
3　暗褐色土。明黄褐色パミス含む。
4　黒褐色土。
5　暗褐色土。砂、小円礫含む。
6　灰黄褐色砂。As-B主体。
7　黒褐色土。As-C含む。
8　黄褐色土。褐色シルトブロック含む。
9　黄褐色土。シルトブロック含まない。



B－B′　2号沢　南壁

1　暗褐色土。現耕作土。
2　黒褐色土。
3　黒褐色土。砂質暗褐色土ブロック、円礫含む。
4　黄褐色砂。円礫含む。
5　黄褐色土。褐色土ブロック含む。
6　褐灰色砂。
7　褐灰色砂。円礫含む。
8　灰黄褐色土。黒褐色土ブロック含む。
9　黒褐色土。As-C粒含む。
10　暗褐色土。As-C粒含む。
11　黒褐色土。As-C粒含む。
12　暗褐色土。As-C粒含む。
13　黄褐色土。
14　黒褐色土。
15　黄橙色土。





1

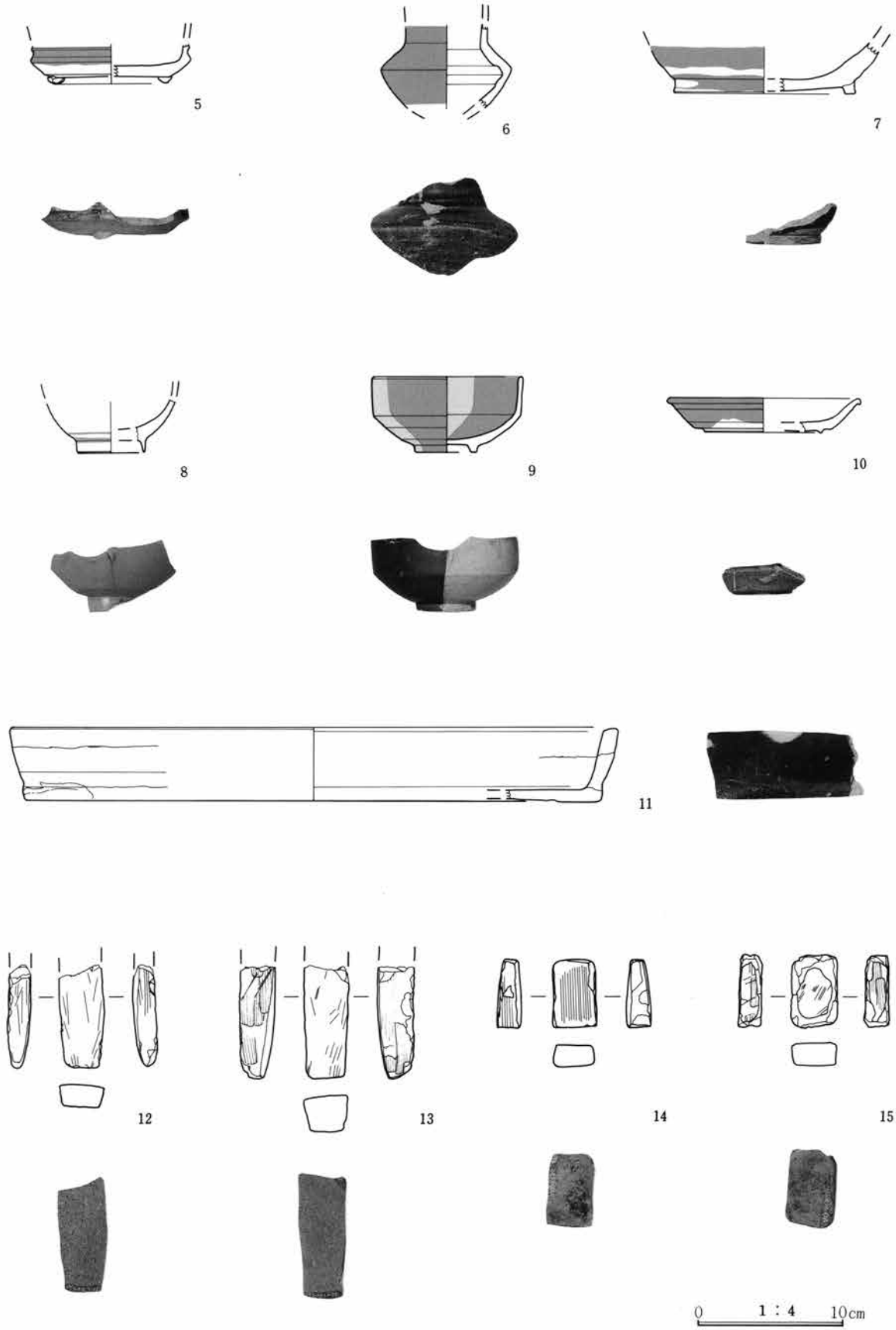
2

3

4

0　1：4　10cm

川跡出土遺物



川跡出土遺物

Ⅶ 考 察

笂井八日市遺跡の方形区画遺構について
—— 方形区画遺構と周辺集落の動向 ——

坂 口 一

1 はじめに

笂井八日市遺跡では、約200mの間隔をおいて東西に平行する古墳時代の２条の堀を検出した(図１)。これは、道路の拡幅に伴う発掘調査という事業上の制約から、確認し得た部分は極めてわずかでしかなかった。しかし、①両方の堀の形状や規模が近似していること、②軸線の傾きがほぼ一致して両者が平行していること、③堀の覆土内に堆積した火山灰の堆積状況に共通性が認められること、④西側の堀の南端部にコーナーと考えられる屈曲部が検出できたことなどの理由から、両者は単独で機能した２条の堀というより、例えば居館を巡る堀などのように、一定の範囲を区画するための堀である可能性が高い。

前述のように、調査範囲がこの遺構の全体からみて極一部であるため、遺構そのものの性格について詳しく言及することは不可能である。したがって、ここでは周辺の遺跡で発掘調査されている集落の動向などから、この遺構の性格の一端を検討してみたい。

2 遺構の概要

この方形区画遺構は、広瀬川低地帯と貴船川低地に挟まれた台地の先端部に位置している。西辺の堀は上端の幅が８m、下端の幅が6.5m、深さ1.5mで、東辺の堀は上端の幅が7.6m、下端の幅が3.6m、深さ2.5mである。いずれも軸線を真北から約45°東側に傾けている。範囲確認調査の結果、西辺の堀は台地のほぼ南端から北端にかけて約160mにわたって掘られていることを確認した。一方東辺の堀も、発掘調査で検出した位置から少なくとも南側に約50mの長さまでは存在することを確認している。

西辺の堀の南端部は、東側にほぼ直角に折れ曲がっている。仮にこの遺構が方形の区画であるとすれば、ここは全体の南西の隅に相当する可能性がある。ただし、屈曲を確認できたのは堀の外側の部分のみで、内側については確認していない。

また、堀の底面は両者ともほぼ平坦で、堀の北端と南端に高低差がなく、ほぼ同一レベルである。底面の標高は西辺の堀が84m前後、東辺の堀が83m前後で、西辺の堀の底面が東辺より１m程高く、両方の堀ともに水が流れた痕跡が見当たらない。

この方形区画遺構に伴う可能性がある他の遺構は、今のところ６号住居のみである。この住居は伴出する土器の年代がこの遺構の年代に比較的近く、軸線の傾きも近似している。しかし、この住居を除いてこの方形区画遺構に伴う可能性のある遺構は一切検出できなかった。

以上、この２条の堀が同一の遺構で、北辺と南辺にも堀があったものと仮定するならば、その全体の規模は南北が160m、東西が200mの方形区画と想定される。また、仮に北辺と南辺の堀が存在しないとしても、200mの間隔を置いて２条の堀が台地を寸断していることになり、低地部のHr-FA面の標高が80m前後であることからみて、堀の内側に方形に区画された場所を得ることになる。

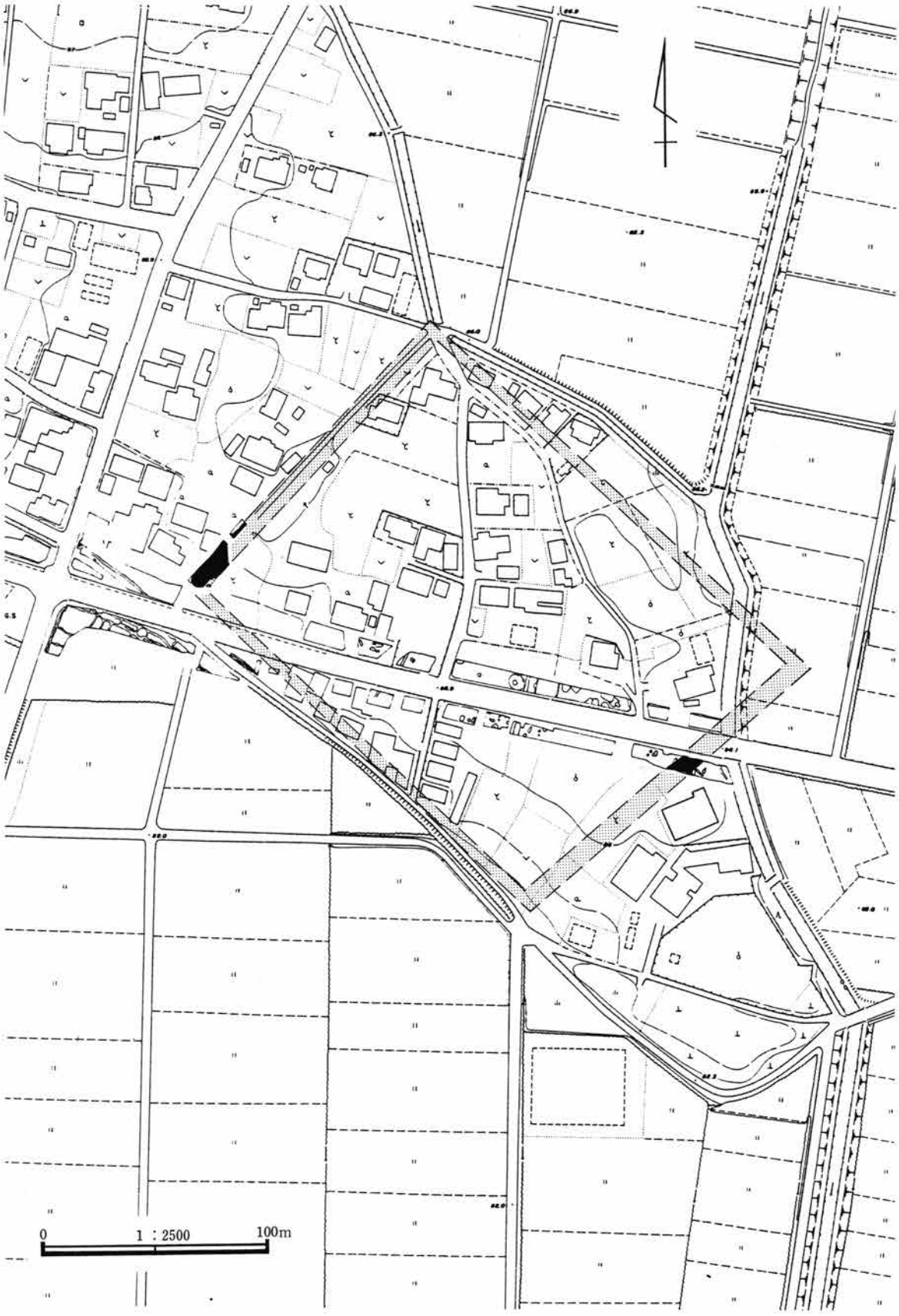


図1　笂井八日市遺跡方形区画遺構推定図

3　遺構の年代

この遺構の年代を判定する資料は、西辺の堀から出土した土師器坏２点と、堀の覆土内に堆積した火山灰層のみである。

西辺の堀から出土した土師器坏は（図２）、①体部が彎曲するもの、②彎曲した体部から口縁部が短く外反するものの２種類で、いずれも堀の底面に密着して出土した。両者とも口縁部に横撫で、体部外面に篦削りを施し、体部内面には①が放射状の篦研磨、②は斜横位の篦研磨をそれぞれ施している。これらの坏はその形状と整形技法が、筆者による古墳時代中期の土器の編年[1]（以下筆者の編年）のIII～IV段階に比定することができる。この段階は、須恵器型式のＴＫ-208～ＴＫ-47型式に平行し[2]、実年代は５世紀後半に位置付けることができる。

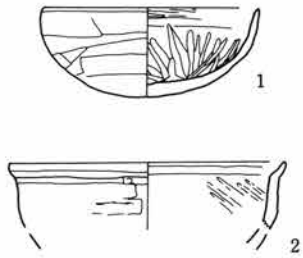
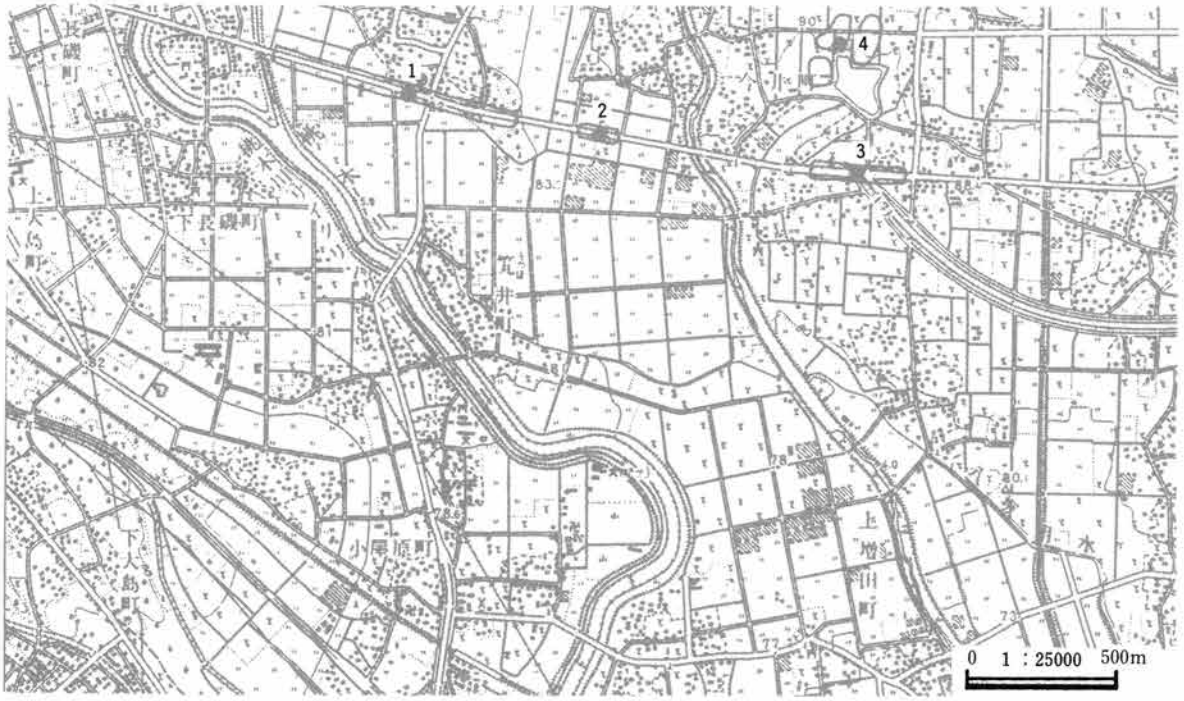


図２　西辺の堀出土土器（1//4）

一方、堀の覆土内に堆積した火山灰は、榛名山二ツ岳降下火山灰層[3][4]（Hr-FA）に同定され、西辺の堀では底面上10cmの位置に、東辺の堀では底面上30cmの位置にそれぞれ一次堆積している（23頁参照）。Hr-FAは、群馬県における土師器と須恵器の編年から６世紀初頭に位置付けられていること[5]から[6]、これらの堀の構築年代は６世紀初頭以前ということになる。

堀の底面から出土した土師器坏の年代は、覆土内に堆積したHr-FAの年代との矛盾がない。したがって、この堀の年代は５世紀後半に位置付けるのが妥当と考えられる。

なお、この遺構に伴う可能性のある６号住居は、筆者の編年のIII段階に比定することができるが、住居の覆土内にHr-FAの堆積は認められない。



１：笂井八日市遺跡　２：今井白山遺跡　３：今井道上遺跡　４：荒砥北三木堂遺跡

図３　周辺遺跡位置図

4　周辺遺跡の動向

(1)　周辺の集落の状況

この遺跡の周辺では、方形区画遺構が立地する台地の東側を流れる貴船川を挟んで今井白山遺跡[7]、今井白山遺跡の東側を南流する荒砥川を挟んで今井道上遺跡[8]、今井道上遺跡の北側に沖積低地を挟んで荒砥北三木堂遺跡[9]がそれぞれ立地し、これらの遺跡では弥生時代から平安時代にかけての竪穴住居が合計で160軒以上も検出されている。また、今井道上遺跡などの南方500mで、笂井八日市遺跡の方形区画遺構の東方1㎞には、5世紀後半代に比定され、墳丘長72mの前方後円墳である今井神社古墳が立地している。

これらの3遺跡における竪穴住居の推移をみると(図4)、古墳時代以降では4世紀から10世紀にかけての竪穴住居が継続的に営まれているが、5世紀後半代は他の年代に比較して異常とも思える数の竪穴住居が立地していることが分かる[10]。そして、この年代は今井神社古墳の成立時期と全く一致しているのである。

(2)　周辺の古代水田の状況

笂井八日市遺跡で検出した水田遺構は、天仁元(1108)年の浅間B軽石層(As-B)に埋もれた平安時代の水田のみである。しかし、プラント・オパール分析の結果では、4世紀中葉に降下した浅間C軽石層(As-C)の直下では稲作の可能性がなく、6世紀初頭のHr-FAの直下では稲作の可能性があり、Hr-FAの直上では稲作の可能性が高いという結果を得ている。

また、荒砥北三木堂遺跡と今井道上遺跡の間に位置する沖積低地では、Hr-FAの直上から稲作が行われた可能性が指摘されている。

したがって、これらの遺跡群に接する沖積低地では古墳時代の水田遺構は検出できないものの、Hr-FAが降下した6世紀初頭前後の時期から水田耕作が行われた可能性が高いものと考えられる。

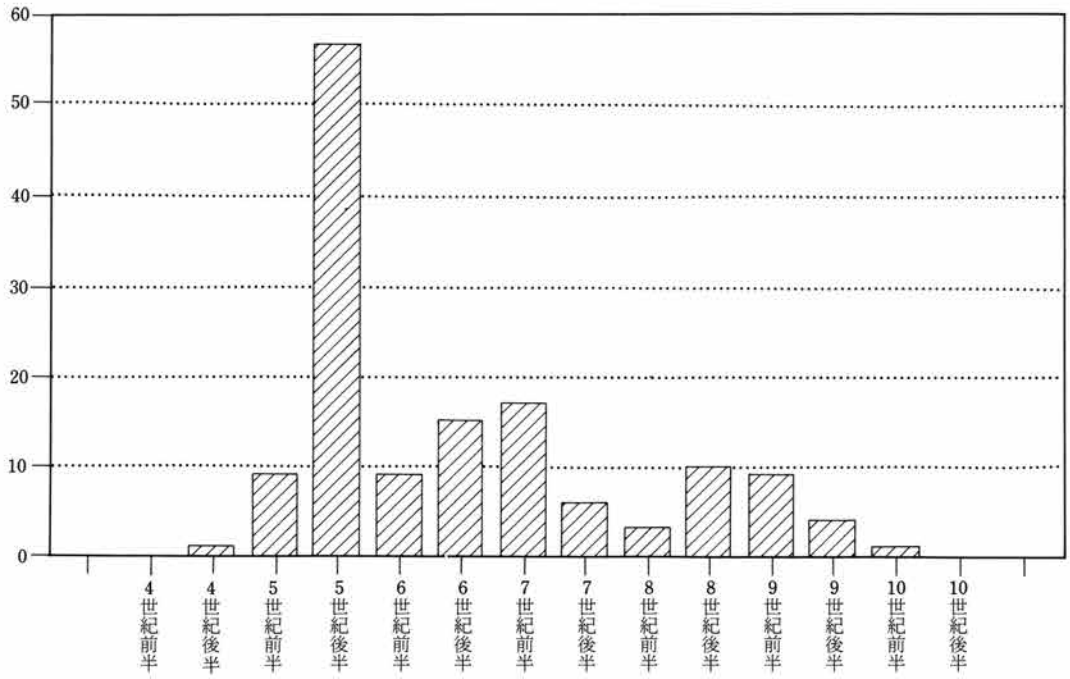


図4　北三木堂・今井白山・今井道上遺跡　住居数

5 まとめ

笂井八日市遺跡で検出した古墳時代の方形区画遺構の概要と、周辺の遺跡における竪穴住居及び水田の状況などについて述べてきた。ここで、この堀が構築された5世紀後半の時期に、この遺跡の周辺で認められる現象を整理すると次のように要約することができる。すなわち、①近接する集落遺跡群の竪穴住居が急激な増加傾向を示す、②72mの前方後円墳である今井神社古墳が、集落遺跡の至近距離に成立する、③集落遺跡に接する沖積低地で水田耕作が開始された可能性がある、の3点である。

また、このような現象を県下の他の地域と比較すると、群馬町に所在する三ツ寺Ⅰ遺跡の周辺地域と近似した様相を認めることができる。すなわち、この地域では三ツ寺Ⅰ遺跡の豪族居館の成立、周辺の集落における竪穴住居の急激な増加、100m級の前方後円墳で構成される保渡田古墳群の成立が、いずれも軌を一にしており、これらの現象も5世紀後半代に比定できるのである。(11)

以上、この遺跡で検出した方形区画遺構について検討してきたが、遺構の全体像や性格についてはいまひとつ明かにし得なかった。しかし、それまで集落が立地することのなかった台地に大規模な方形区画遺構が構築される背景は、近接する集落遺跡群の竪穴住居が急激な増加傾向を示し、前方後円墳が集落遺跡の至近距離に成立し、さらに集落遺跡に接する沖積低地で水田耕作が開始されるなどの、周辺地域で認められる集落変遷上の画期と決して無縁のものとは考え難いのである。

注

(1) 坂口　一　「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」—共伴関係による土器型式組列の検討—　『研究紀要』4　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1987
(2) 田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981
(3) 新井房夫　「関東平野北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」　『考古学ジャーナル』№157　ニュー・サイエンス社　1979
(4) 町田　洋・新井房夫　『火山灰アトラス』　東京大学出版会　1992
(5) 坂口　一　「榛名山二ツ岳テフラの降下年代」　第36回企画展『火山噴火と黒井峯むらのくらし』　群馬県立歴史博物館　1990
(6) 坂口　一　「火山噴火の年代と季節の推定法」　『火山灰考古学』　古今書院　1993
(7) 飯島義雄　『今井白山遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993
(8) 坂口　一　『今井道上遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
(9) 石坂　茂　『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991
(10) この地域では、ここに掲げた3遺跡の他に今井道上道下遺跡などの集落遺跡が発掘調査され、この遺跡は今井道上遺跡と同一の遺跡である。したがって、この地域の集落変遷についてはこれらの報告を待って、稿を改めて再考したいと考えている。
(11) 坂口　一　「5世紀代における集落の拡大現象」—三ツ寺Ⅰ遺跡居館の消長と集落の動向—　『古代文化』第42巻第2号　古代学協会　1990

笂井八日市遺跡における地震の痕跡

通商産業省工業技術院　地質調査所
寒　川　　旭

笂井八日市遺跡の発掘調査において、激しい地震動に伴う液状化現象の痕跡が多く検出された。本稿では、この中で最も典型的な形態を示す３－２区17トレンチの液状化跡について詳しく説明したい。

図１(断面図)に示したように、液状化に伴って砂が上昇し、地震当時の地表面に噴砂として広がった状況が極めて良好に保存されていた。ここでは、地層をⅠ～Ⅺ層に区分して説明を行う。

Ⅰ層は耕作土で暗褐色(10YR3/3)を示すが、下部に黄褐色ブロックを含む。Ⅱ層は暗～黒褐色(10YR3/3～7.5YR2/2)の粗粒砂で、最大径1.5cmの礫や浅間Ｂ軽石層(As-B)テフラの粒も含んでいた。Ⅲ層はAs-Bテフラで灰黄褐色(10YR6/2)を示していた。Ⅳ層は暗褐色(10YR6/8)のシルト～粘土で、下位の浅間Ｃ軽石層(As-C)の粒子をわずかに含んでいた。

Ⅴ層は、液状化現象によって、地下から上昇して堆積した噴砂で、黄褐色(10YR6/8～5/8)を示す。Ⅵ層は黒褐色(10YR2/3)シルト層でAs-C軽石粒を多く含んでいた。Ⅶ層は黄褐色(10YR3/3～5/4)シルト層、Ⅷ層は黒褐色(10YR3/3)粘土層である。また、Ⅸ層は黄褐色(10YR6/4～5/4)シルト層である。

Ⅹ層は灰黄褐色(10YR6/2)砂層で、下部は中粒砂、上部は細粒砂から構成されていた。Ⅺ層は最大径2.5cmの礫を含む砂礫層で色調はⅩ層と同じである。

この図において、Ⅹ層中の中粒砂層で液状化が生じ、噴砂が最大幅２cmの砂脈内を、70cmの高さまで右斜め上方に向かって上昇していた。そして、ここから、約40cm垂直方向に上昇し、当時の地表に達していた。

さらに、図の右上方から左上方に向かって上昇し、前述の砂脈に合流するもう一つの砂脈がある。この砂脈内は粗粒砂で満たされているので、Ⅺ(砂礫)層でも液状化が生じ、この噴砂をもたらしたと考えられる。

地表に広がった噴砂の厚さは最大４cmで、幅は2.8mに及んでいる。噴砂を構成する粒子は、垂直方向および水平方向に向かって徐々に細粒化している。噴出口より東南東へ26cm、西北西へ35cmの区間では、噴砂の中～下部は中粒砂で構成され、最上部約１cmは細粒砂で構成されていた。さらに、それ以遠では、下部が細～中粒砂、上部がシルトで構成され、末端部付近は全体がシルトで構成されるようになる。

噴砂はAs-C軽石粒を含むⅥ層を覆っていた。さらに、Ⅵ層の上部には、榛名山二ツ岳降下火山灰層(Hr-FA)又は榛名山二ツ岳降下軽石層(Hr-FP)のいずれかに対比される白色軽石がわずかに認められた。As-C軽石は４世紀中葉に浅間火山から、Hr-FAは６世紀初頭、Hr-FPは６世紀中葉に榛名火山からもたらされたものである[(1)]。噴砂の上位にあるⅢ層は、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出したAs-Bで構成されている[(1)]。

噴砂と、その前後の火山噴出物の年代から、液状化を発生させた地震の年代は６世紀中頃より後で1108年より前に限定される。

この時期に当遺跡周辺に激しい地震動をもたらしたのは818年の大地震で、『類聚国史』に「弘仁九(818)年七月、相模、武蔵、下総、常陸、上野、下野等国、地震、山崩谷埋数里、圧死百姓不可勝計」という記述があり[(2)]、山崩れ、地割れ、泥流跡および液状化跡が多く検出されている[(3)]。この地震において、群馬県および埼玉県内の広範囲にわたって、激しい地震動が生じたことが確実であり、当遺跡の液状化跡はこの地震による可能性が大である。

この他にも、6世紀中頃、および、6世紀後半から7世紀前半にかけての地震跡が三ツ寺II遺跡で検出されており[4]、この時期の液状化跡の可能性もある。

笂井八日市遺跡で検出された液状化跡において、液状化した元の地層、上昇途中の噴砂、地震当時の地表に広がった噴砂がすべて観察される。また、噴砂の発生前後の火山噴出物を用いて地震の年代も限定できる。このように、情報量豊かな地震跡なので、今後研究を行う上で大変重要な資料と考えられる。

注

(1) 新井房夫　「関東盆地北西部地域の第四紀編年」　『群馬大学紀要』自然科学編10　p.1-79（1962年）
新井房夫　「関東平野北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」　『考古学ジャーナル』№157　p.41-52（1979年）
石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一　「火山堆積物と遺跡Ⅰ」　『考古学ジャーナル』№157　p.3-40（1979年）
坂口　一　「榛名山二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」　『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会編　p.103-119（1986年）による。火山噴出物の分析は古環境研究所に依頼した。

(2) 文部省震災予防評議会編　『増訂大日本地震史料』第1巻　p.943（1941年）
宇佐美龍夫　『新編日本被害地震綜覧』東京大学出版会　p.434（1987年）

(3) 堀口万吉・角田史雄・町田明夫・昼間　明　「埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された古代の〝噴砂〟について」　『埼玉大学紀要』自然科学編21　p.243-251（1985年）
堀口万吉　「埼玉県北部でみられる古代の〝噴砂〟について」　『歴史地震』№2　p.9-14（1986年）
能登　健　「弘仁九年地震災害についての覚書」　『群馬史研究』34　p.38-50（1991年）
能登　健・内田憲治・早田　勉　「赤城山南麓の歴史地震－弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析－」　『信濃』42　p.755-772（1990年）
群馬県新里村教育委員会　『赤城山南麓の歴史地震－弘仁九年に発生した地震とその災害－』　p.86（1991年）
寒川　旭　『地震考古学－遺跡が語る地震の歴史－』中央公論社　p.251（1992年）
寒川　旭・神谷佳明・飯島義雄　「今井白山遺跡における地震跡」　『今井白山遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団（1993年）

(4) 関　晴彦　「三ツ寺遺跡の地震跡」　『三ツ寺II遺跡』本文編　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書93　p.205-238（1991年）

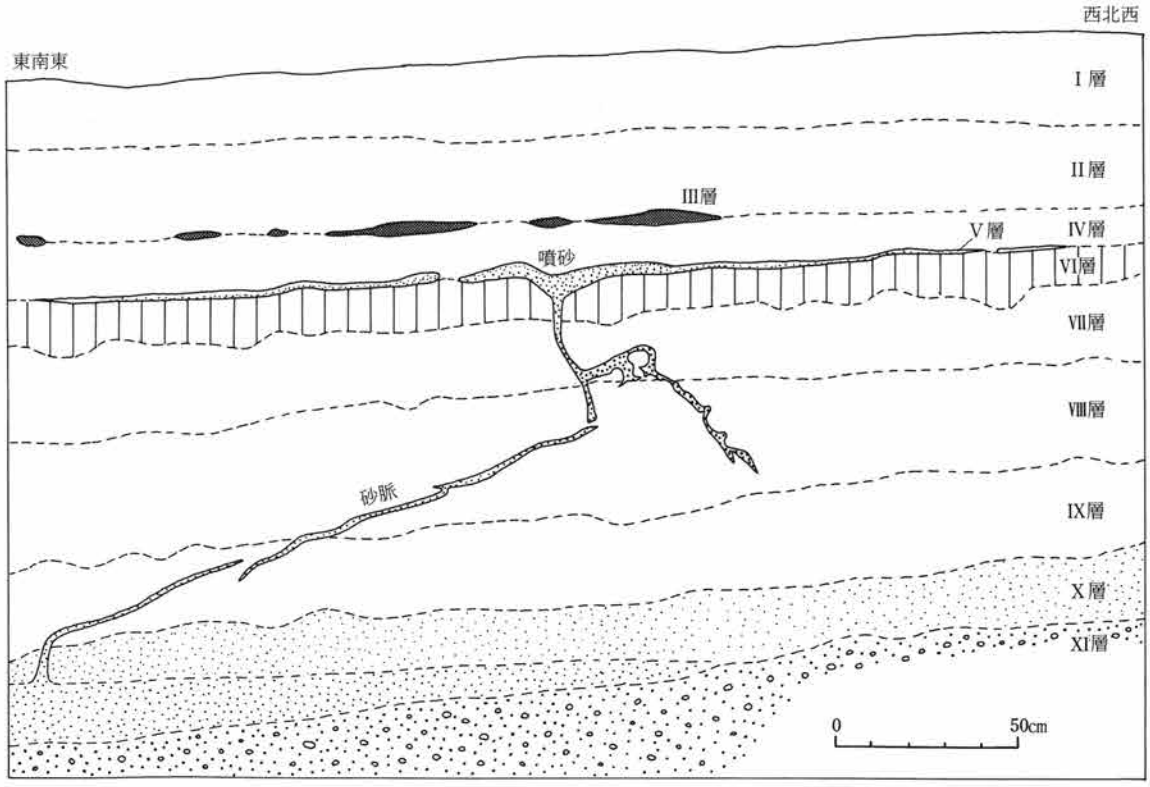
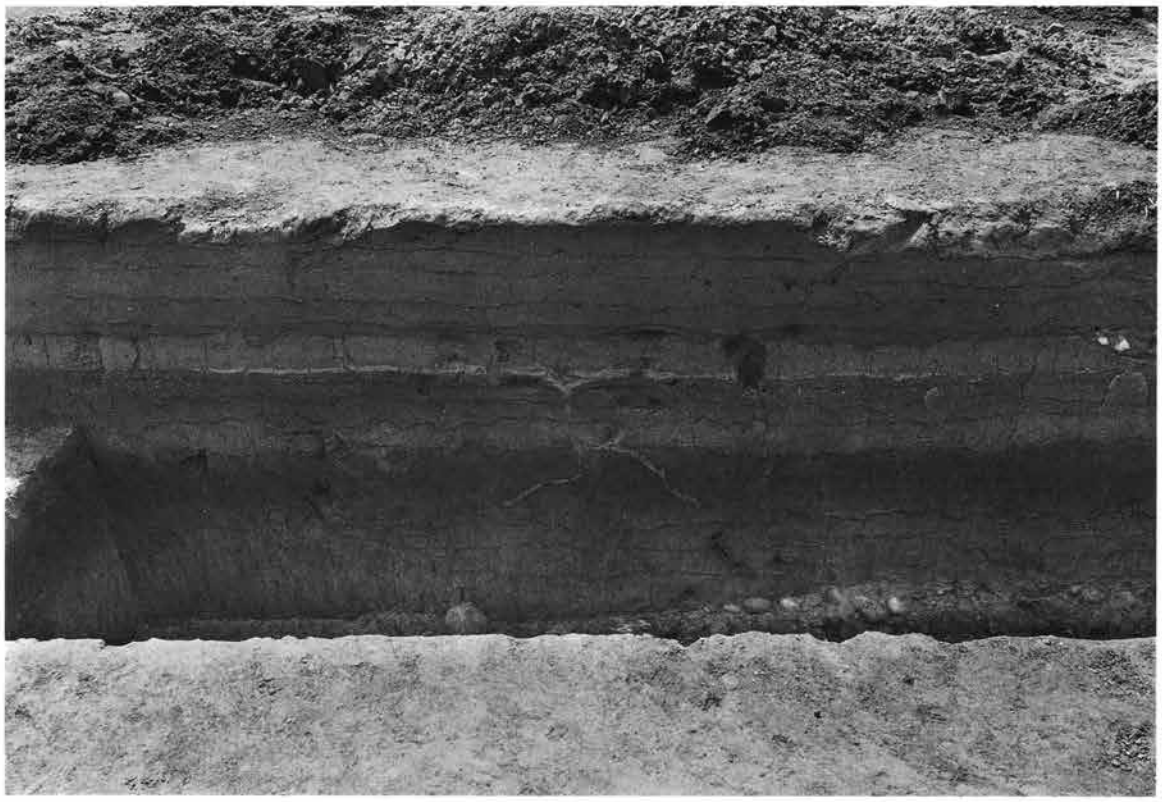
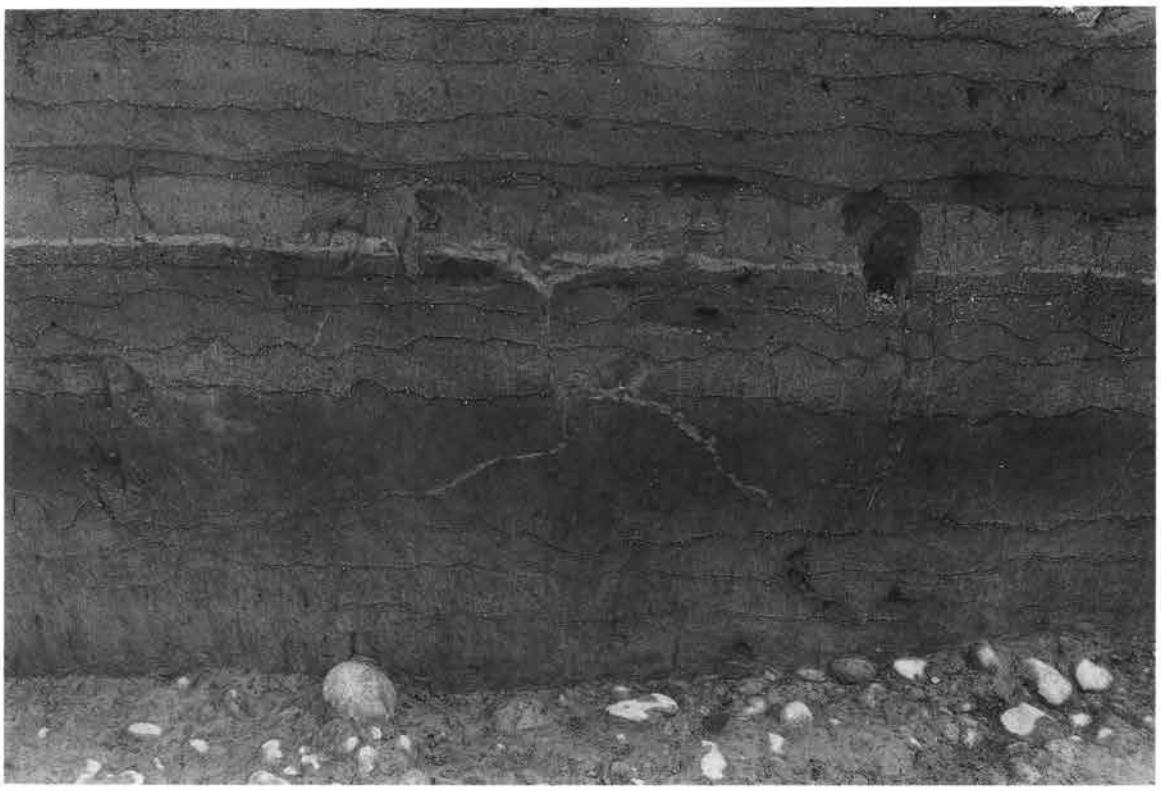


図1　笂井八日市遺跡の液状化跡断面図





竪穴住居

2号住居

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状態 備考
1	土師器 甕	不明	口 底 5.6 高	内面 篦撫で	粗砂粒 普通 にぶい赤褐色	底部破片

3号住居

1	土師器 甕	＋7cm	口 15.6 底 高	外面 口縁部横撫で、胴部縦位篦削り 内面 口縁部横撫で	細砂粒 堅緻 にぶい赤褐色	口～胴部上位 2/3

6号住居

1	土師器 甕	床面密着	口 (16.0) 底 高	外面 口縁部横撫で 内面 口縁部横撫で	粗砂粒 良好 橙色	口縁部1/2
2	土師器 坏	＋5cm	口 13.4 底 高 6.3	外面 口縁部横撫で、体部篦削り 内面 口縁部横撫で、体部撫で	細砂粒 不良 にぶい橙色	完形
3	土師器 甕	床面密着	口 底 4.7 高	外面 胴部斜縦位篦削り 内面 胴部斜縦位篦撫で後撫で	粗砂粒 普通 赤灰色	胴部下半1/4
4	土師器 坏	＋9cm	口 9.0 底 高 6.5	外面 口縁部横撫で、体部横位篦削り 内面 口縁部横撫で、体部横撫で後斜縦位篦研磨 黒色処理	細砂粒 良好 にぶい橙色	完形
5	土師器 坏	＋16cm	口 13.0 底 高 6.1	外面 口縁部横撫で、体部篦削り 内面 口縁部横撫で、体部撫で後縦位篦研磨	細礫 良好 にぶい橙色	完形
6	土師器 甕	＋19cm	口 (18.0) 底 高	外面 口縁部横撫で後縦位篦研磨 内面 口縁部横位篦撫で後、横位篦研磨	粗砂粒 良好 褐灰色	口縁部1/3
7	土師器 甕	床面密着	口 (17.0) 底 高	外面 口縁部横撫で、胴部撫で 内面 口縁部横撫で、胴部撫で	粗砂粒 普通 橙色	口～胴部中位
8	土師器 坏	床面密着	口 13.0 底 高 6.5	外面 口縁部横撫で、体部篦削り 内面 口縁部横撫で、体部横撫で	細砂粒 良好 橙色	完形
9	土師器 坏	覆土	口 (12.8) 底 高	外面 口縁部横撫で、体部篦削り 内面 口縁部横撫で、体部撫で	細砂粒 良好 橙色	体部1/8
10	土師器 坏	覆土	口 11.0 底 高	外面 口縁部横撫で、体部篦削り 内面 口縁部横撫で、体部撫で	細砂粒 堅緻 褐灰色	体部1/5
11	土師器 坏	覆土	口 11.4 底 高 3.5	外面 口縁部横撫で、体部横位篦削り 内面 口縁部横撫で、体部撫で	細砂粒、粗砂粒 良好 にぶい橙色	体部1/3
12	土師器 坏	覆土	口 (11.3) 底 (10.0) 高 (3.5)	外面 口縁部横撫で、体部篦削り 内面 口縁部横撫で、体部撫で	粗砂粒 普通 橙色	体部1/6
13	石製品 砥石	覆土				
14	石製品 砥石	覆土				

古　墳

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状態 備考
1	埴輪 円筒	不明	口 底 高	外面　一次調整縦刷毛 内面　撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	破片
2	埴輪 円筒	不明	口 底 高	外面　一次調整縦刷毛 内面　横位篦撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい橙色	破片
3	埴輪 円筒	不明	口 底 高	外面　一次調整縦刷毛 内面　撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい橙色	破片
4	埴輪 円筒	不明	口 底　16.4 高	外面　一次調整縦刷毛 内面　撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	基底部のみ
5	埴輪 円筒	不明	口 底 高	外面　一次調整縦刷毛 内面　撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	破片
6	埴輪 円筒	不明	口　23.5 底 高	外面　一次調整縦刷毛 内面　横位篦撫で後縦位指撫で	粗砂粒 普通 にぶい橙色	上半1/2
7	埴輪 円筒	不明	口 底 高	外面　一次調整縦刷毛 内面　横位篦撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 淡黄色	破片
8	埴輪 円筒	不明	口 底 高	外面　一次調整縦刷毛 内面　撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	破片
9	埴輪 円筒	不明	口 底 高	摩滅が著しく技法不明	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	破片
10	土師器 甕	不明	口 底　6.6 高	外面　胴部篦削り後撫で 内面　胴部撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい橙色	底部のみ

方形区画遺構

3号溝

3	須恵器 甕	不明	口 底 高	外面　轆轤整形 内面　轆轤整形	細砂粒、粗砂粒 普通 黒色	破片

15号溝

1	土師器 坏	覆土	口　11.7 底 高　4.7	外面　口縁部横撫で、体部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部放射状篦研磨	細砂粒～細礫 普通 にぶい橙色	4/5
2	土師器 坏	床面密着	口 (14.8) 底 高	外面　口縁部横撫で、体部篦削り 内面　口縁部横撫で、体部斜横位篦研磨	細砂粒 堅緻 橙色	破片

水　田

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状態 備考
1	灰釉陶器 椀	不明	口 底 (7.6) 高	外面　体部轆轤整形、同下半右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	細砂粒 良好 灰白色	底部1/3 施釉不明
2	土師器 坏	不明	口 (11.0) 底 高	外面　口縁部横撫で、体部撫で 内面　口縁部横撫で、体部撫で	細砂粒 堅緻 にぶい橙色	破片
3	土製品 土錘	不明	長　3.9 幅　2.5 厚　2.2		粗砂粒 普通 灰白色	完形
4	須恵器 坏	床面密着	口 底　5.3 高	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	粗砂粒 普通 灰色	底部のみ
5	陶器 碗	不明	口 底　5.6 高	外面　体部轆轤整形、高台部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	細砂粒 堅緻 オリーブ褐色	底部のみ
6	須恵器 坏	不明	口 底 (5.2) 高	外面　体部轆轤整形、底部右回転糸切り未調整 内面　体部轆轤整形	粗砂粒 普通 灰白色	底部破片
7	古銭 淳□元寶	不明	径　2.2			1241年初鋳？ 淳祐元寶(？)
8	古銭 皇宋元寶	不明	径　2.4			1253年初鋳
9	古銭 皇宋通寶	不明	径　2.5			1039年初鋳
10	古銭 □宋□寶	不明				1039年初鋳？ 皇宋通寶(？)

溝

4号溝

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状態 備考
1	石製品 砥石	+22cm	幅 4.1 長 厚 3.5			

11号溝

1	縄文土器 深鉢	+13cm	口 底 高	口縁部文様は隆帯で区画	粗砂粒 普通 橙色	破片 加曽利E 3式
2	縄文土器 深鉢	+23cm	口 底 高	刻みをもつ隆線を2条巡らす	細砂粒 普通 橙色	破片 堀之内II式
3	縄文土器 深鉢	+28cm	口 底 高	文様区画は微隆帯。地紋は縄文RLの縦施文	粗砂粒 普通 灰黄褐色	破片 加曽利E 3式
4	須恵器 埦	+27cm	口 底 (10.9) 高	外面 轆轤整形 内面 轆轤整形	細砂粒 堅緻 褐灰色	底部1/3
5	土師器 坩	覆土	口 (16.0) 底 高	外面 口縁部横撫で、頸部撫で後斜横位箆削り 内面 口縁部横撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 赤褐色	口縁部1/8
6	軟質陶器 壺	不明	口 (14.0) 底 高	外面 轆轤整形後箆撫で 内面 轆轤整形後箆撫で	細砂粒 堅緻 褐灰色	口～胴部1/5

32号溝

1	磁器 青磁香炉	+3cm	口 底 4.2 高	外面 体部轆轤整形、底部箆削り 内面 轆轤整形	粗砂粒 良好 灰白色	底部のみ 竜泉窯系 内外面施釉

土　　壙

2号土壙

番号	種　類 器　種	出　土 レベル	法　量 (cm)	成・整　形　技　法　の　特　徴	①胎土　②焼成 ③色調	残存状態 備　　考
1	須　恵　器 高台付埦	不明	口 底　5.4 高	外面　体部下位篦撫で	粗砂粒 不良 にぶい黄橙色	底部1/3
2	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	沈線区画内にＲＬ縄文を充塡	細砂粒～細礫 普通 にぶい赤褐色	破片 加曽利Ｅ４式
3	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	口唇部下に半截竹管による併行沈線を数条巡らす	細砂粒～細礫 普通 にぶい黄橙色	破片 堀之内II式
4	縄文土器 不明	不明	口 底 高	底面に網代痕	細砂粒～細礫 普通 にぶい黄橙色	破片 後期
5	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	内外面に削り痕を残す。粗製土器か？	細砂粒、粗砂粒 普通 灰黄褐色	破片 後期
6	縄文土器 不明	不明	口 底 高	底面に網代痕	細砂粒、粗砂粒 普通 橙色	破片 後期
7	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	口縁部無文下に微隆帯を巡らし、胴部の微隆帯区画内にＬＲ縄文を充塡	細砂粒、粗砂粒 普通 浅黄色	破片 加曽利Ｅ４式
8	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	口縁部無文下に隆帯を巡らし、胴部には条線文を施す	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	破片 後期前半
9	石　製　品	不明	幅　4.0 長　5.0 厚　1.5			黒色頁岩

6号土壙

1	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	微隆帯区画内に縄文を充塡	粗砂粒 普通 浅黄色	破片 加曽利Ｅ４式
2	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	微隆帯による逆Ｕ字状にＲＬ縄文を充塡	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄褐色	破片 加曽利Ｅ４式
3	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	２号土壙７と同一個体		
4	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	２と同一個体		
5	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	胴部に隆帯を垂下	細砂粒、粗砂粒 普通 橙色	破片
6	縄文土器 深鉢	不明	口（18.4） 底 高	２単位波状口縁下に刻みの付く隆帯を垂下。波頂部にＪ字の貼付けと円孔有り。体部はＪ字文と矢印文で構成。縄文はＬＲ	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	口～胴部1/2 称名寺Ｉ式
7	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	口縁部波頂下に２本の隆帯を垂下させて文様帯を区画	細礫 良好 黒褐色	破片 称名寺Ｉ式
8	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	帯状の縄文帯と無文帯で文様を構成する。縄文はＬＲ	粗砂粒 良好 にぶい黄褐色	破片 称名寺Ｉ式
9	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	帯状の縄文帯と無文帯で文様を構成する。縄文はＬＲ	細砂粒 良好 灰黄褐色	破片 称名寺Ｉ式

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状態 備考
10	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	微隆帯区画のＪ字状文を縦位に２段施し、区画外を縄文ＬＲで充填する。微隆帯交点には円形の刺突を伴う貼付け文が付く	粗砂粒 良好 褐灰色	破片 称名寺Ｉ式
11	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	口縁部波頂部にＪ字状貼付け文を施す。口縁部無文下の微隆帯区画内に列点状刺突。胴部のＪ字区画内の縄文はＬＲ	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	口縁部破片 称名寺Ｉ式
12	縄文土器 深鉢	不明	口（34.2） 底 高	口縁部無文下に微隆帯を巡らし、以下は全面にＬＲ縄文を施す。微隆帯上に山形の突起有り	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい褐色	口～胴部1/4 加曽利Ｅ４式
13	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	口唇部突起下に、刺突を施した隆帯を垂下させて文様を区画。文様は帯状縄文帯で構成される。縄文はＬＲ	細砂粒 良好 灰褐色	破片 称名寺Ｉ式
14	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	帯状の縄文帯と無文帯で文様を構成する。縄文はＬＲ	細砂粒 良好 灰黄色	破片 称名寺Ｉ式
15	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	７と同一個体		
16	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	帯状の縄文帯と無文帯で文様を構成する。縄文はＬＲ 口縁部波頂下にＪ字貼付け文を施す。口縁部下の縄文帯に１列の刺突文を施す	細砂粒 良好 灰白色	破片 称名寺II式
17	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	帯状縄文帯でＪ字状等の文様を構成する。沈線内を充填する縄文はＬＲ	粗砂粒 良好 にぶい黄橙色	破片 称名寺Ｉ式
18	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	16と同一個体		
19	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	ＬＲ縄文を地文に、口縁部に数本の沈線を巡らす。口唇部内面にも１状の沈線が巡る	細砂粒、粗砂粒 普通 褐灰色	破片 堀之内II式
20	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	全面にＬＲ縄文を縦位に施文	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい橙色	破片 加曽利Ｅ４式
21	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	口縁部無文下に断面三角形の微隆帯を巡らす。胴部にはＬＲ縄文	細砂粒、粗砂粒 普通 灰褐色	破片 加曽利Ｅ４式
22	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	21と同一個体		
23	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	20と同一個体		
24	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	微隆帯区画内にＲＬ縄文を充填	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	破片 加曽利Ｅ４式
25	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	１と同一個体		
26	縄文土器 深鉢	不明	口 底 高	微隆帯区画を沈線で縁取り、区画内を研磨。区画外にはＬＲ縄文を不規則に施す	細砂粒、粗砂粒 普通 灰黄褐色	破片 称名寺Ｉ式？
27	石製品	不明	幅 18.7 長 15.5 厚 2.7			黒色頁岩
28	石製品	不明	幅 9.6 長 9.3 厚 4.2			

17号土壙

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状態 備考
1	陶器 鉢	＋9cm	口 底（7.8） 高	外面　轆轤整形後回転篦削り 内面　轆轤整形	細砂粒 堅緻 浅黄橙色	底部のみ 内外面鉄釉

25号土壙

1	縄文土器 深鉢	＋25cm	口 底 高	頸部に2条の併行沈線を巡らす。口辺部に橋状把手を付す	細礫 普通 淡黄色	破片 堀之内Ⅰ式
2	石製品 削器	＋28cm	幅　11.5 長　7.6 厚　2.1			黒色頁岩
3	石製品 剝片	＋65cm	幅　5.6 長　3.1 厚　0.3			黒色頁岩
4	石製品 剝片	＋45cm	幅　3.0 長　4.6 厚　0.2			黒色頁岩

34号土壙

1	陶器 甕	＋38cm	口（28.3） 底 高	外面　口縁部横撫で、頸部外面撫で 内面　頸部横位篦撫で	粗砂粒、細礫 普通 にぶい赤褐色	破片 常滑
2	磁器 青磁小碗	＋71cm	口 底 高			破片 竜泉窯系

35号土壙

1	土師器 埦	＋3cm	口　16.1 底　7.8 高　6.1	外面　口縁部横撫で、体部横位篦削り後撫で 内面　口縁部横撫で、体部横位篦撫で	細礫、中礫 普通 にぶい黄橙色	ほぼ完形
2	須恵器 埦	＋4cm	口　14.6 底　9.4 高　6.9	外面　轆轤整形、底部切離し後撫で 内面　轆轤整形	細砂粒、粗砂粒 普通 褐灰色	完形

46号土壙

1	土師器 小型甕	＋14cm	口（12.0） 底 高	外面　口縁部横撫で、胴部横位篦削り 内面　口縁部横撫で、胴部横位篦撫で後撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 赤褐色	口～胴部1/8
2	土師器 坏	覆土	口（14.2） 底 高	外面　口縁部横撫で 内面　口縁部横撫で	細砂粒、粗砂粒 普通 にぶい橙色	破片 摩滅が顕著

井　戸

3号井戸

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状態 備考
1	軟質陶器 内耳	覆土	口 (33.5) 底 (31.0) 高 5.2	外面 体部横撫で 内面 体部横撫で	細砂粒 普通 灰黄色	体部1/8 接合痕あり
2	軟質陶器 内耳	覆土	口 (41.0) 底 (36.0) 高 5.0	外面 体部横撫で、同下位篦削り 内面 体部撫で	細砂粒 堅緻 にぶい褐色	体部1/8 内面に接合痕
3	陶器 皿	覆土	口 (12.0) 底 高	外面 体部轆轤整形、同下半右回転篦削り 内面 体部轆轤整形	細砂粒 良好 灰白色	体部1/4
4	陶器 手塩皿	覆土	口 底 高 2.6	外面 轆轤整形 内面 轆轤整形	細砂粒 普通 灰オリーブ	破片

4号井戸

1	軟質陶器 内耳	覆土	口 底 高	外面 体部横撫で 内面 体部横撫で	細砂粒 普通 褐灰色	底部1/5
2	軟質陶器 内耳	覆土	口 (33.0) 底 (30.0) 高 5.5	外面 体部横撫で 内面 体部横撫で	細砂粒 堅緻 にぶい黄橙色	体部1/8

川　跡

番号	種類 器種	出土 レベル	法量 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状態 備考
1	軟質陶器 不明	不明	口 (14.4) 底 高	外面　体部右回転轆轤整形 内面　体部右回転轆轤整形	粗砂粒、細礫 普通 明赤褐色	体部2/3
2	軟質陶器 植木鉢	不明	口 底 高		粗砂粒 普通 オリーブ黒色	2/3
3	軟質陶器 火鉢	不明	口 底 (12.6) 高	外面　ローラーによる圧痕	粗砂粒 普通 緑黒色	破片
4	軟質陶器 火鉢	不明	口 (24.0) 底 高	外面　体部轆轤整形 内面　体部轆轤整形	粗砂粒 普通 青黒色	破片
5	陶器 香炉	不明	口 底 (8.0) 高	外面　体部轆轤整形、同下半右回転篦削り、底部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	粗砂粒 普通 淡黄色	底部1/2
6	陶器	不明	口 底 高	外面　体部轆轤整形 内面　体部轆轤整形	細砂粒 普通 にぶい橙色	破片 外面施釉
7	陶器 徳利	不明	口 底 (12.4) 高	外面　体部轆轤整形、底部右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	細砂粒 普通 灰白色	底部破片
8	磁器 碗	不明	口 底 (4.6) 高	外面　体部轆轤整形 内面　体部轆轤整形	良好 灰白色	1/8
9	陶器 碗	不明	口 10.3 底 4.2 高 5.1	外面　体部轆轤整形 内面　体部轆轤整形	細砂粒 堅緻 暗赤褐色	ほぼ完形 掛け分け釉
10	陶器 皿	不明	口 底 (8.0) 高	外面　体部轆轤整形、同下半右回転篦削り 内面　体部轆轤整形	良好 にぶい黄色	1/8
11	軟質陶器 内耳	不明	口 (42.0) 底 (39.8) 高 5.0	外面　右回転轆轤整形 内面　右回転轆轤整形	細砂粒、粗砂粒 普通 黒褐色	破片
12	石製品 砥石	不明	長 幅 3.0 厚 1.5			
13	石製品 砥石	不明	長 幅 3.0 厚 2.5			
14	石製品 砥石	不明	長 幅 2.9 厚 1.5			
15	石製品 砥石	不明	長 4.8 幅 3.1 厚 1.6			

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第170集

笂井八日市遺跡

一般国道50号(東前橋拡幅)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

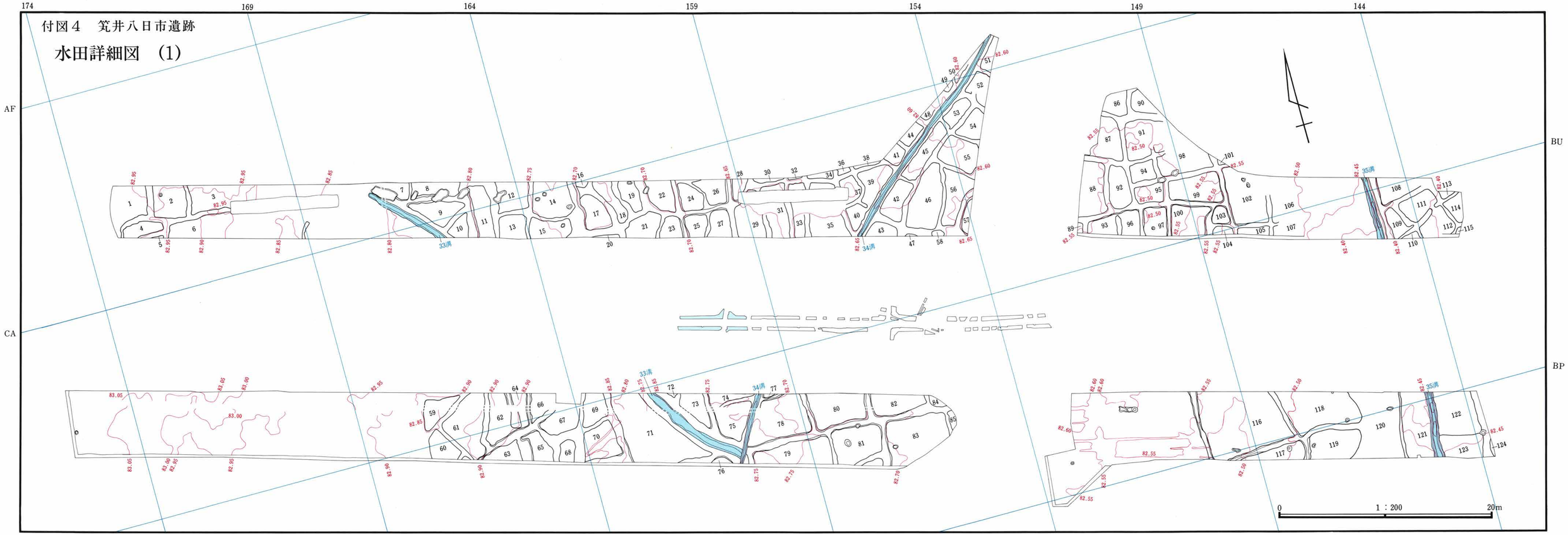
平成6年2月26日 印刷
平成6年2月28日 発行

編集・発行／㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52―2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社

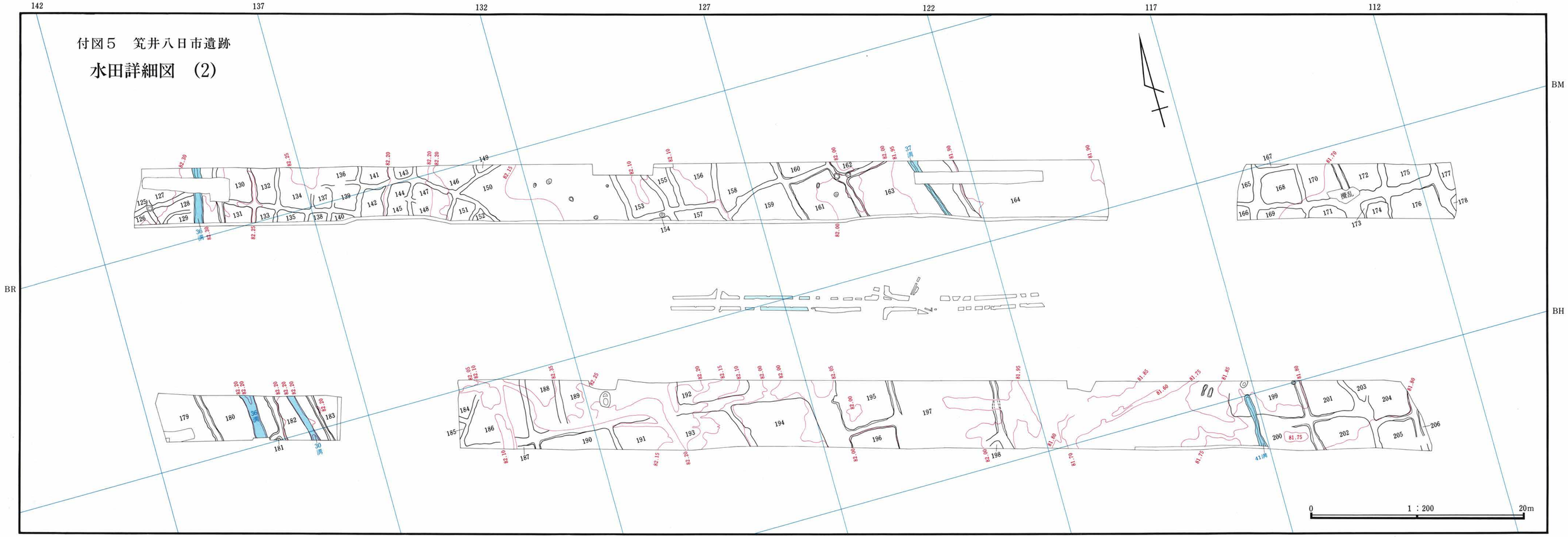
付図４　笂井八日市遺跡

水田詳細図　(1)



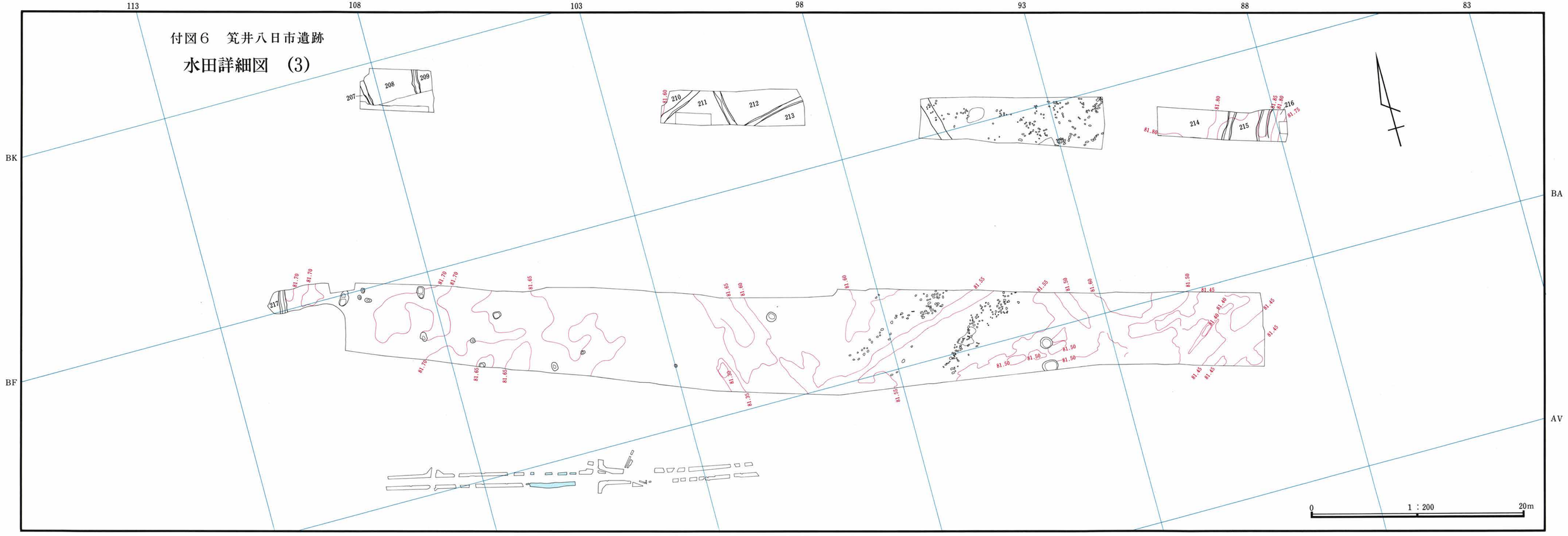
付図５　笂井八日市遺跡

水田詳細図　(2)



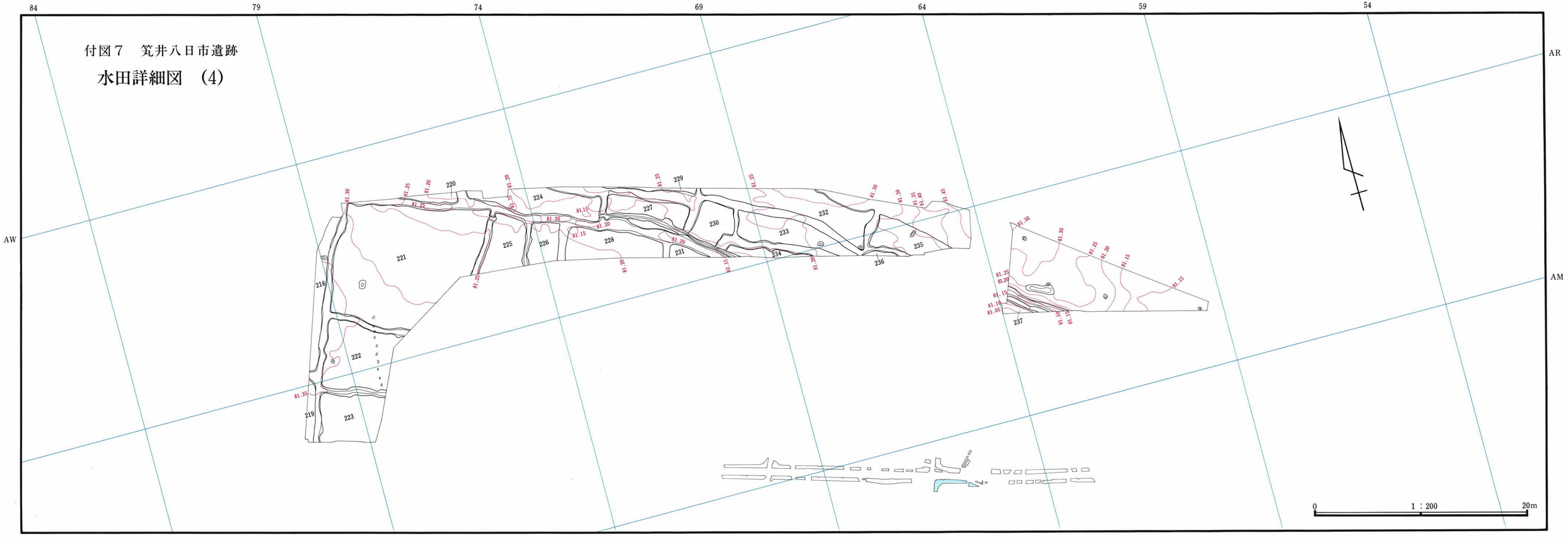
付図６　笂井八日市遺跡

水田詳細図　(3)



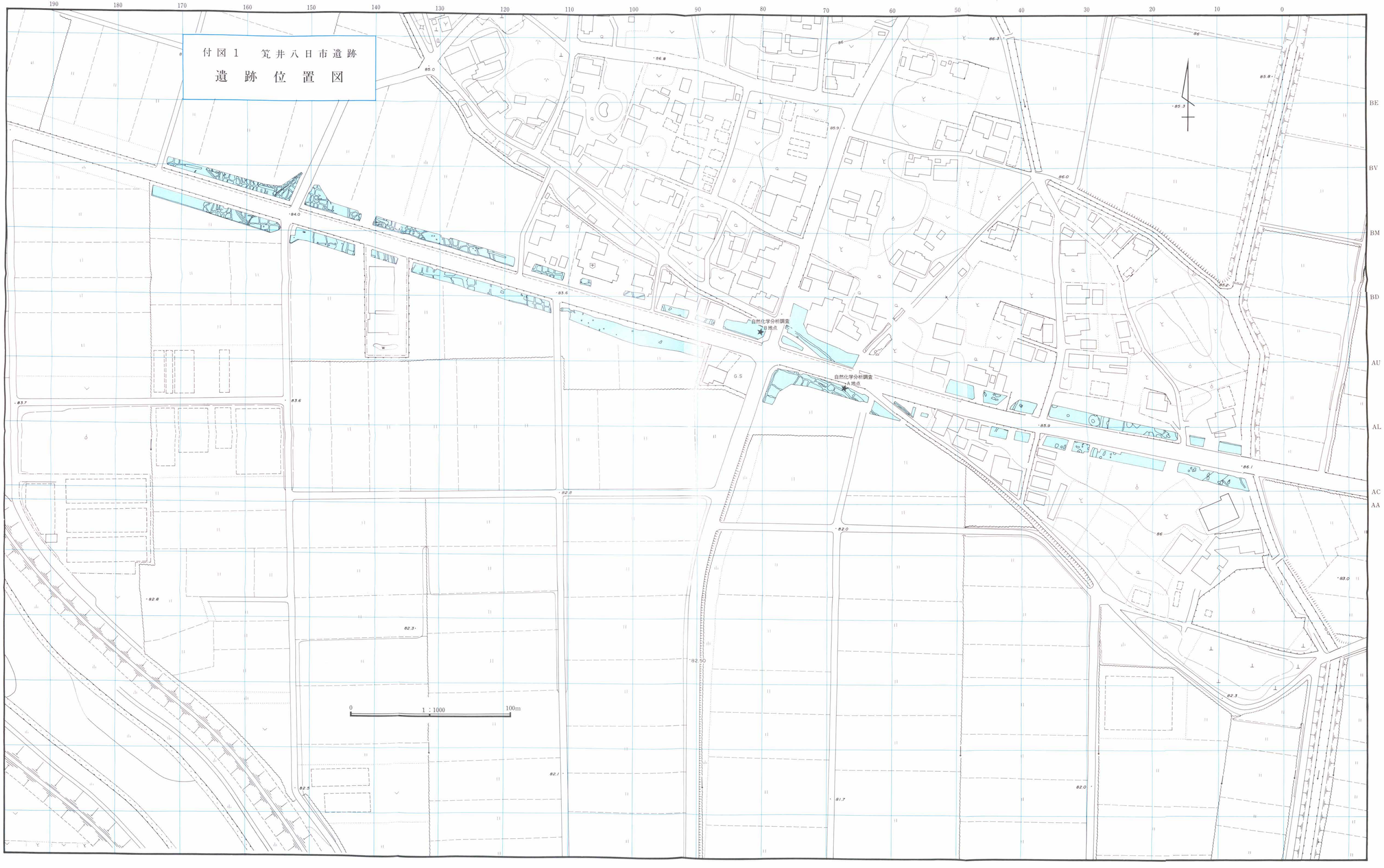
付図７　笂井八日市遺跡

水田詳細図　(4)



付図１　笂井八日市遺跡

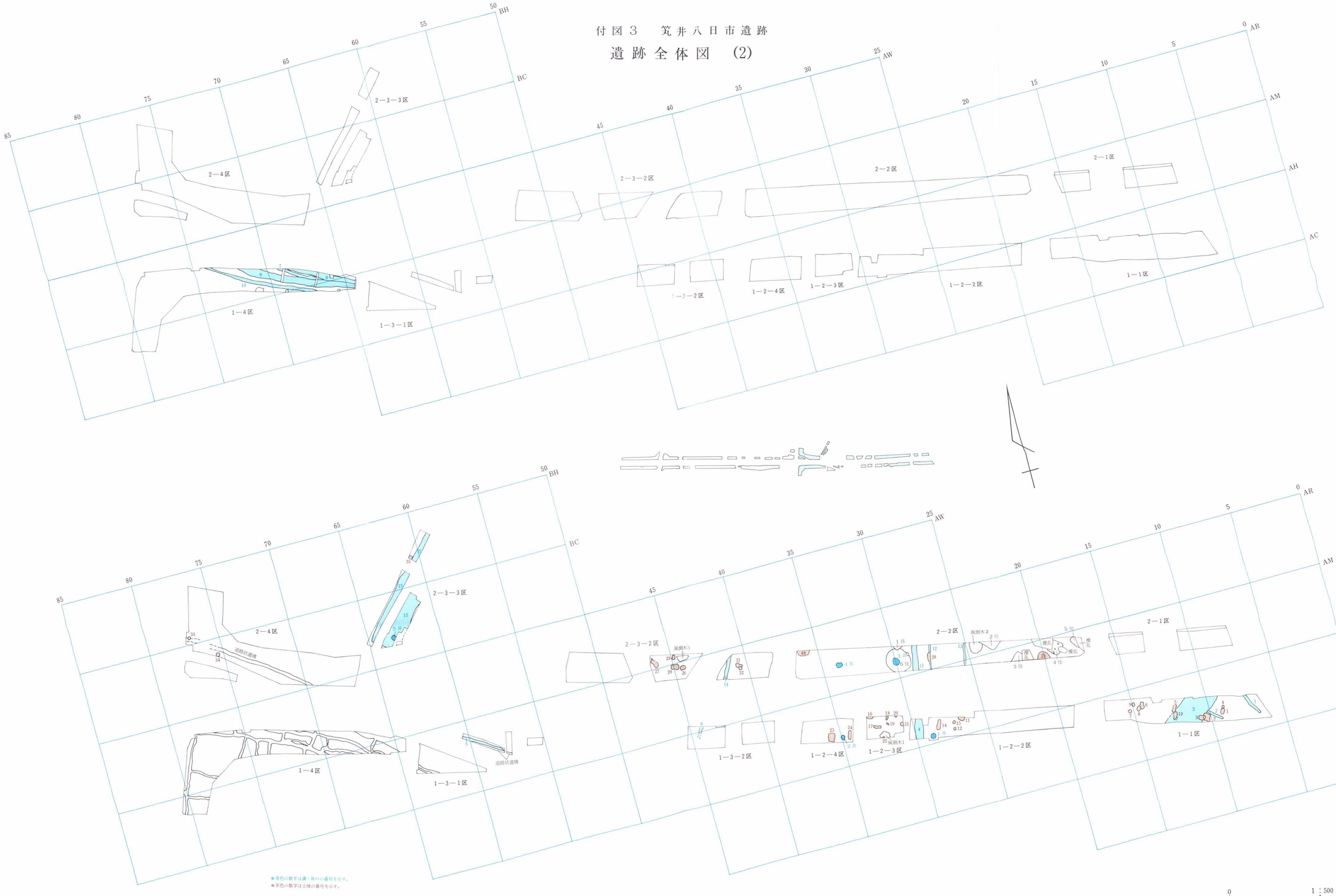
遺　跡　位　置　図



付図２　笂井八日市遺跡

遺跡全体図　(1)

※青色の数字は溝の番号を示す。
※茶色の数字は土壙・穴の番号を示す。

付図３　笂井八日市遺跡

遺跡全体図　(2)